恵良遺跡
堂々炭窯跡
上条遺跡
水戸(三戸)神社跡(上条古墳)
立女遺跡

一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

2001年３月

省浜田工事事務所
教育委員会

恵良遺跡
堂々炭窯跡
上条遺跡
水戸(三戸)神社跡(上条古墳)
立女遺跡

一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

2001年３月

国土交通省浜田工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地域を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

江津地区においても一般国道９号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道９号のバイパスとして江津道路の事業を進めています。この道路は当面、山陰自動車道の機能を併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。更に、過疎化が進み、若者の流出に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や江津市教育委員会の御協力のもとに平成３年度から発掘調査を実施してきております。

本報告書は、平成８・11・12年度に実施した「恵良遺跡」、「堂々炭窯跡」、「上条遺跡」、「水戸（三戸）神社跡（上条古墳）」、「立女遺跡」の調査結果をまとめたものであります。本書が地域の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの御理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成13年３月

国土交通省中国地方整備局浜田工事事務所
所　長　　藤　井　輝　夫

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成５年度から一般国道９号江津道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このたび４冊目となる報告書を刊行する運びとなりました。

この報告書は恵良遺跡（平成８年度調査）、上条遺跡（平成10～11年度調査）、堂々炭窯跡ほか（平成11年度調査）、立女遺跡（平成11～12年度調査）の調査成果をとりまとめたものです。このうち上条遺跡は大正13・14年に計２個の銅鐸が出土した「本州最西端の銅鐸出土地」として知られていました。出土地の正確な位置は特定されていませんでしたが、今回の調査で初めて銅鐸を埋めていたと考えられる穴を検出することができました。今後の青銅器埋納地についての調査研究に寄与する貴重な資料になるものと思われます。

本書が、石央地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり国土交通省浜田工事事務所に御尽力を頂きました。また、浜田市・江津市教育委員会をはじめとする地元の方々に御協力を頂きました。厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

島根県教育委員会教育長

山　﨑　悠　雄

例　　言

1．本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成８・11・12年度に実施した一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査地は下記のとおりである。

恵良遺跡	島根県江津市二宮町	1867外
堂々炭窯跡	島根県江津市波子町	イ873外
上条遺跡	島根県浜田市上府町	ロ118－1外
水戸(三戸)神社跡	島根県浜田市上府町	イ2220－5外
立女遺跡	島根県浜田市上府町	イ2044－8外

3．調査組織は下記のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

平成８年度　　恵良遺跡

〔事 務 局〕 島根県教育庁文化財課　　勝部　昭（課長）、森山洋光（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　　宍道正年（センター長）、古崎蔵治（課長補佐）
渋谷昌宏（企画調整係主事）

〔調 査 員〕 大庭俊次（調査３係文化財保護主事）、勝瀬利栄（同主事）
石倉敬子（同教諭兼文化財保護主事）、伊藤善太郎（同講師兼主事）
梅木茂雄（同臨時職員）、野津　旭（同）

〔研　　修〕 白澤俊也（三隅町教育委員会主事）

〔整理作業員〕 上手文子、鹿森三鈴、梅木まゆ美

平成11年度　　堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸(三戸)神社跡

〔事 務 局〕 埋蔵文化財調査センター　　宍道正年（所長）、秋山　実（総務課長）
松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）、渡邊紀子（同主任主事）、
川﨑　崇（同主事）

〔調 査 員〕 間野大丞（調査５係主事）、増田浩太（同主事）、石倉康民（同教諭兼主事）
佐野木信義（同講師兼主事）、寺尾　令（同臨時職員）、服部龍夫（同）

〔整理作業員〕 上手文子、鹿森三鈴

平成12年度　　立女遺跡・報告書作成

〔事 務 局〕 埋蔵文化財調査センター　　宍道正年（所長）、内田　融（総務課長）
松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）、渡邊紀子(同主任)
川﨑　崇（同主事）

〔調 査 員〕 大庭俊次（調査１係文化財保護主事）、間野大丞（企画調整係文化財保護主事）
東森　晋（調査５係主事）、増田浩太（調査２係主事）
野津　清（調査５係講師兼主事）、寺尾　令（同臨時職員）

〔整理作業員〕 上手文子、鹿森三鈴、陶山佳代、石川真由美、三上恭子、神谷登喜美、柳原準子

4．発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、(社)中

国建設弘済会の３者協定に基づき、島根県教育委員会から(社)中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

平成８年度　布村幹夫（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、神山二美子（事務員）
伊藤るみ（事務員）

平成11年度　布村幹夫（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、大内悦子（事務員）

平成12年度　布村幹夫（現場事務所長）、小川剛史（技術員）、大内悦子（事務員）

5．挿図で使用した方位は、測量法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。

6．本書で使用した図の内、第23図は『考古学雑誌』22-2より転載し、第２・３図は国土地理院発行のものを、第４・５・14・22・37・図は建設省浜田工事事務所作成のものを、第28・29図は（株）アジア航測が作成したものをそれぞれ一部改編して使用している。また、写真図版13下の写真は（株）アジア航測が撮影した。

7．本書に掲載した遺物の実測は主として調査員が行い、浄写は以下の者が行った。

石倉敬子、野津　旭、三上、神谷、柳原、陶山、石川

9．本書に掲載した遺物の写真撮影は、大庭、野津　清が行った。

10. 本書の執筆は大庭、間野、東森、増田、寺尾と浜田市教育委員会榊原が行い、文責は目次に明示した。また、第５章第４節には、㈱文化財コンサルタント（担当.渡辺正巳）に委託して実施した銅濃度測定調査の結果を収録している。

11. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町３３）で保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯……（寺尾）…1

第２章　遺跡の位置と歴史的環境…（東森）…3

第３章　恵良遺跡……（大庭）…9

第１節　平成８年度発掘調査の経過と概要 …… 9

第２節　調査の結果…… 9

第４章　堂々炭窯跡……（間野）…27

第１節　調査前の状況と経過 ……27

第２節　調査の結果…… 27

第３節　小結…… 29

第５章　上条遺跡…（間野・増田・榊原・渡辺）… 45

第１節　調査に至る経緯と経過…（間野）… 45

第２節　平成10年度銅鐸埋納地確認調査について …… （榊原）…47

第３節　調査の結果…… （増田）…53

第４節　上条遺跡銅鐸埋納坑推定地における銅濃度測定 …… （榊原・渡辺）…58

第５節　まとめ…… （榊原）…62

第６章　水戸(三戸)神社跡 …… （間野）…67

第１節　調査の経過と概要…… 67

第２節　調査の結果…… 67

第３節　小結…… 68

第７章　立女遺跡……（東森）…73

第１節　調査の前の状況と経過…… 73

第２節　調査の結果…… 74

第３節　小結…… 74

挿図・表・写真図版目次

第１章　調査に至る経緯

表１　江津道路建設予定地内発掘遺跡一覧（平成13年3月現在）…… 2

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

第１図　遺跡の位置…… 4
第２図　恵良遺跡・堂々炭窯跡位置と周辺の遺跡（S=1/50,000）…… 5
表２　恵良遺跡・堂々炭窯跡周辺の遺跡一覧…… 6
第３図　上条遺跡・水戸（三戸）神社跡・立女遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1/50,000）…… 7
表３　上条遺跡・立女遺跡と周辺の遺跡一覧…… 8

第３章　恵良遺跡

第４図　恵良遺跡周辺の地形（S=1/1000）……11～12
第５図　恵良遺跡調査区・遺構位置図（S=1/500）…… 13
第６図　恵良遺跡1区土層断面実測図（S=1/50）・上層遺構実測図（S=1/50，S=1/100）…… 14
第７図　恵良遺跡1区下層遺構実測図（S=1/100）…… 15
第８図　恵良遺跡2区土層断面実測図・遺構実測図（S=1/100）…… 16
第９図　恵良遺跡1区上層遺構出土遺物実測図（S=1/3）…… 17
第10図　恵良遺跡1区遺構外出土遺物実測図（2須恵器甕S=1/4，他はS=1/3）…… 18
第11図　恵良遺跡1区下層遺構出土遺物実測図（S=1/3，S=1/6）…… 18
第12図　恵良遺跡2区加工段上遺構出土遺物・建材実測図（1～7までS=1/3，8・9はS=1/6）…… 19
第13図　恵良遺跡1区遺構外出土砥石実測図（S=1/3）…… 19
表４　恵良遺跡遺構計測表…… 20
表５　恵良遺跡出土遺物観察表…… 21
表６　恵良遺跡出土遺物破片数量表…… 22
写真図版１　恵良遺跡全景・1区上層遺構・1区下層遺構…… 23
写真図版２　恵良遺跡2区加工段遺構・木柱穴…… 24
写真図版３　恵良遺跡1区出土遺物…… 25
写真図版４　恵良遺跡1・2区出土遺物・建材…… 26

第４章　堂々炭窯跡

第14図　堂々炭窯跡周辺の地形（S=1/1000）…… 31
第15図　堂々炭窯跡調査前地形測量図（S=1/200，25cm コンター）…… 32
第16図　堂々炭窯跡調査終了後地形測量図（S=1/200，25cm コンター，土層図はS=1/100）…… 33
第17図　堂々炭窯跡実測図（S=1/60）…… 34
第18図　堂々炭窯跡実測図（S=1/60）…… 35
第19図　堂々炭窯跡土坑実測図（S=1/30）…… 36
表７　石見地方で発掘調査された炭窯跡…… 36
第20図　石見地方で発掘調査された炭窯跡１（S=1/120）…… 37
第21図　石見地方で発掘調査された炭窯跡２（S=1/120）…… 38
写真図版５　上：堂々炭窯跡調査風景　下：同調査終了後…… 39
写真図版６　炭窯…… 40

写真図版７　上：炭窯半裁状況　下：横断土層……41
写真図版８　上：炭窯焚き口横断土層　下：焚き口～作業場縦断土層 ……42
写真図版９　上：煙道（正面から） ……43
写真図版10　上：焚き口の袖石　中：土坑１半裁状況　下：土坑２完掘後 ……44

第５章　上条遺跡

第22図　上条遺跡・水戸（三戸）神社跡位置図（S=1/2000） ……46
第23図　上府村城山銅鐸発見地局部側図 ……48
第24図　上条遺跡トレンチ位置図（S=1/300，25cm コンター） ……48
第25図　上条遺跡　遺構実測図（S=1/50） ……49
第26図　上条遺跡　完掘地形測量図（S=1/50，10cm コンター） ……50
第27図　土層断面実測図（S=1/50） ……52
第28図　上条遺跡道状遺構調査前地形測量図（S=1/350） ……55
第29図　上条遺跡調査後測量図（S=1/350，土層はS=1/200） ……56
第30図　上条遺跡出土遺物実測図（S=1/3，1石匙はS=2/3） ……57
第31図　上条遺跡銅鐸埋納坑推定地ににおける銅濃度測定試料採取地点位置図（S=1/60） ……59
第32図　T1横穴上の銅濃度分布 ……60
第33図　T1SK1の銅濃度分布 ……60
表８　T1横穴上の分析結果 ……61
表９　T1SK1の分析結果 ……61
写真図版11　上条遺跡出土銅鐸 ……63
写真図版12　上：上条遺跡銅鐸埋納坑推定地点土層断面図　下：銅鐸埋納坑推定地全景 ……64
写真図版13　上：上条遺跡調査前全景（西側から）　下：上条遺跡調査後全景（南側から） ……65
写真図版14　上：出土遺物Ⅰ石匙　下：出土遺物Ⅱ陶磁器 ……66

第６章　水戸（三戸）神社跡

第34図　水戸（三戸）神社跡地形測量図（S=1/300）・土層堆積図（S=1/150） ……69
第35図　水戸（三戸）神社跡土層堆積図（S=1/60） ……70
第36図　水戸（三戸）神社跡調査後地形測量図（S=1/150，全体図S=1/750） ……70
写真図版15　上：水戸（三戸）神社跡調査前近景（北東から）　下：調査風景（北東から） ……71
写真図版16　上：土層堆積状況（北東から）　下：土橋土層堆積状況（南西から） ……72

第７章　立女遺跡

第37図　立女遺跡調査区配置図（S=1/2000） ……73
第38図　立女遺跡遺構配置図（S=1/300）・Ⅰ区土層図（S=1/120） ……75
第39図　立女遺跡Ⅰ区土坑（S=1/40）・Ⅱ区ピット群（S=1/80） ……76
写真図版17　上：平成11調査前遠景（北東から）　上：Ⅰ区調査前（東から）　下：Ⅰ区調査後（東から） …77
写真図版18　上：Ⅰ区堆積土層（東から）　中：Ⅰ区土坑完掘後（北東から）　下：Ⅱ区pit群（北から） ……78

第１章　調査に至る経緯

一般国道９号江津道路は、建設省（現国土交通省）により、４車線の自動車専用道路として建設が計画された。起点は江津市渡津町、終点は浜田市浜田自動車道浜田インターチェンジである。この計画は国道９号線の交通渋滞の緩和と、石見地域の高速交通網の整備を目的としている。

江津道路建設の計画を受け、島根県教育委員会文化課（以下文化課という）は、平成元年に江津市嘉久志町から敬川町までの分布調査を行い13か所の遺跡の存在を確認している。

平成３年１月に４者協議（建設省浜田工事事務所、県土木部、文化課、江津市教育委員会）を行い、発掘調査について具体的な検討がなされた。その結果、平成３年度には建設省の委託を受けた江津市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、７月に江津市二宮町の半田浜西遺跡、翌平成４年１月には同都野津町のカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われた。これらの遺跡の調査の後、３者協議（建設省、江津市教育委員会、文化課）を行い、平成４年度から文化課が本調査に入ることになった。

平成４年度は鹿伏山遺跡、半田浜西遺跡、平成５年度は江津市嘉久志町の久本奥窯跡、同二宮町の二宮Ｃ遺跡、同敬川町の古八幡付近遺跡、カワラケ免遺跡、平成６年度は江津市嘉久志町の嘉久志遺跡、同二宮町の飯田Ｃ遺跡、古八幡付近遺跡１～５区の発掘調査を行った。一年おいて平成８年度は江津市二宮町の恵良遺跡、同波子町の大田屋窯跡、平成９年度は江津市二宮町の神主城跡、飯田Ａ遺跡、古八幡付近遺跡６・7区、同敬川町の横路古墓、平成10年度は、江津市敬川町室崎商店裏遺跡、古八幡付近遺跡８・９区、浜田市上府町の長東坊窯跡、平成11年度は江津市波子町の堂々炭窯跡、浜田市上府町の上条遺跡、水戸（三戸）神社跡、上府八反原窯跡、平成12年度は立女遺跡の発掘調査を行った。

なお、平成９年９月に予定ルートの変更に伴う遺跡の分布調査の依頼を受け、12月から３月にかけて再度の分布調査を実施し、新たに８か所で遺跡の存在を確認した。このうち２か所については、平成10年度に再度検討した結果、本発掘調査を行う遺跡から除外している。

表１　江津道路建設予定地内発掘遺跡一覧

遺　跡　名	発掘年度	主な内容	備　考
半田浜西遺跡	平成４年度	弥生～中世　集落跡 掘建柱建物２、溝10、土坑１、石積み	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
鹿伏山遺跡	平成４年度	土坑１、縄文土器片	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
二宮Ｃ遺跡	平成５年度	弥生時代後期　集落跡 古墳時代中期　集落跡、竪穴住居 中世　掘建柱建物２	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
久本奥窯跡	平成５年度	７世紀後半～８世紀後半　地下式登窯１ 掘建柱建物１	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
古八幡付近遺跡	平成５年度 平成６年度 平成８年度 平成９年度 平成10年度	縄文～近世　集落跡 弥生中期　環壕集落跡 竪穴住居４、掘建柱建物46、溝15、土坑10 古墳２（横穴式石室）	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査 報告書Ⅱ・Ⅲ
嘉久志遺跡	平成６年度	時期不明　経塚　土坑１	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
飯田Ｃ遺跡	平成６年度	散布地 弥生土器片、須恵器片、土師器片	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
恵良遺跡	平成８年度	古代末～中世　集落跡 掘建柱建物６、溝６	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
大田屋窯跡	平成８年度	石見焼生産遺跡（明治時代中心） 連房式登窯１	平成８年度 埋蔵文化財調査センター年報
神主城跡	平成８年度 平成９年度	中世　山城跡 郭、腰郭、土塁、堀切、土壙墓18、窯１、溝１	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
飯田Ａ遺跡	平成９年度	石見焼生産遺跡 窯跡１、作業場跡３	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ
横路古墓	平成９年度	古墳後期　集落跡 近世　集落跡 掘建柱建物５、土壙墓５	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
室崎商店裏遺跡	平成10年度	古墳 横穴式石室	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
長東坊師窯跡	平成10年度	石見焼生産遺跡 連房式登窯１、建物跡１、土坑９	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ
堂々遺跡	平成11年度		工事予定地内で遺構・遺物は検出されず。
堂々炭窯跡	平成11年度	近世後半～末期 炭窯跡（半地下式構造）	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
堂々古墳	平成11年度		工事予定地内で遺構・遺物は検出されず。
上条遺跡	平成11年度	柱穴群、古道 白磁Ⅳ類碗	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
水戸（三戸）神社跡	平成11年度	古道（土橋） 時期不明の段状遺構、加工段	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
上府八反原窯跡 （佐々木窯跡）	平成11年度	石見焼生産遺跡 連房式登窯１、道	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ
立女遺跡	平成11年度	土坑１、ｐｉｔ群	一般国道９号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ
先打井畑遺跡Ⅰ区			
先打井畑遺跡Ⅱ区			
先打井畑遺跡Ⅲ区			
大尾谷遺跡			

第２章　　遺跡の位置と歴史的環境

島根県中部に位置する江津市は、中央を中国地方最大の河川である江の川が流れ、北の日本海へ注いでいる。市街地は江の川の東西に広がっており、恵良遺跡の所在する二宮町と、堂々炭窯跡の所在する波子町は江津市西部に位置している。両町の北部は日本海に面した沖積平野で、南部には標高約150～200mの山地が広がっている。

石見地方（島根県西部）の中央部に位置する浜田市は、古代に石見国府が置かれ、近世には浜田藩が中国地方の押さえとされるなど、古くから石見の中心として栄えた地である。上条遺跡・水戸（三戸）神社跡・上府八反原窯跡・立女遺跡の所在する浜田市上府町は、浜田市東部の下府川上流に位置している。上府町は平野に乏しく、狭い谷に僅かに集落が営まれている。

以下、遺跡周辺で確認された主要な遺跡を紹介したい。

縄文時代

縄文時代の遺物は大平山遺跡群や鹿伏山遺跡、古八幡付近遺跡など数か所で出土している。大平山遺跡群では中期から晩期の土器が出土しており、特に縄文中期の地域的な土器型式として「波子式」が設定されている。

弥生時代

弥生時代は縄文時代に比べると資料が増加する。代表的な集落遺跡としては、古八幡付近遺跡、伊甘神社脇遺跡が挙げられる。これらの遺跡では弥生時代全般の遺物が出土しており、古八幡付近遺跡では中期の居住域や環壕等が確認された。また、伊甘神社脇遺跡と同じ下府川流域では、上流の谷間に位置する上條遺跡で扁平紐式銅鐸２個体が出土している。

古墳時代

古墳時代の集落は、二宮Ｃ遺跡、横路古墓など江津市内で僅かに知られる程度である。しかし、半田浜西遺跡、古八幡付近遺跡、伊甘神社脇遺跡では、土器溜まりや包含層から遺物がまとまって出土しているので、調査区周辺に集落の中心が存在したと思われる。古墳は確実に前期・中期と思われるものは確認されていない。江津市の高野山古墳群、古八幡付近古墳群、浜田市の片山古墳など横穴式石室を主体部とする後期古墳がほとんどである。また、古墳時代後期になると江津市西部では窯業生産が行われ、久本奥窯跡が発掘調査されている。

古代

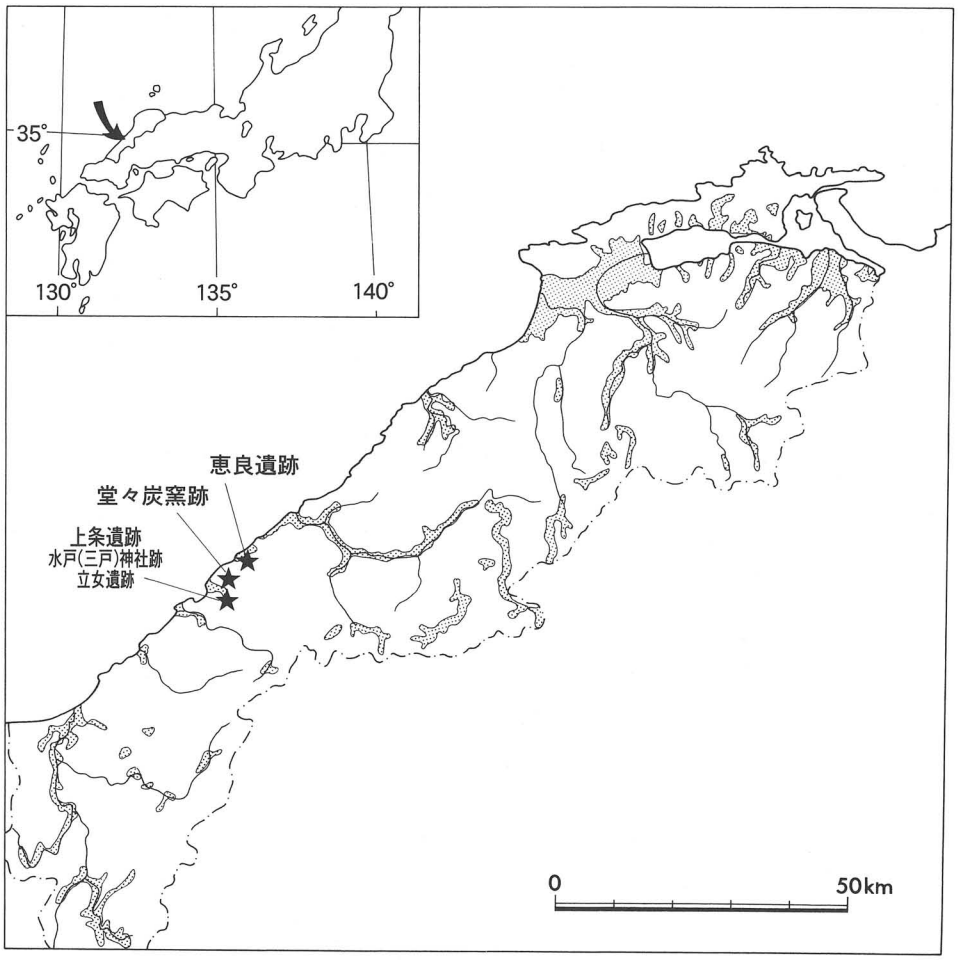
律令時代になると下府川流域には石見国府が置かれ、地方主要道である山陰道が設定された。現在石見国府の所在は確定されていないが、下府廃寺や石見国分寺・同国分尼寺が所在するなど地域の中心として栄えた様子が窺える。資料数も他の時代に比べて多く、下府の横路遺跡、江津市西部の半田浜西遺跡、古八幡付近遺跡では多数の遺構・遺物を検出している。特に、これらの遺跡からは、奈良三彩、統一新羅土器、越州窯青磁、緑釉陶器などの遺物が出土している点が重要である。窯業生産も引き続き行われ、久本奥窯跡、奈古田窯跡で須恵器が、石見国分寺瓦窯跡では瓦が生産されている。また、久本奥窯跡では、下府廃寺と同文の軒丸瓦や砥尾が出土しており関係が注目される。このほか都野津町の清水遺跡では、火葬骨を納めた平安時代の須恵器壺が出土している。

中世

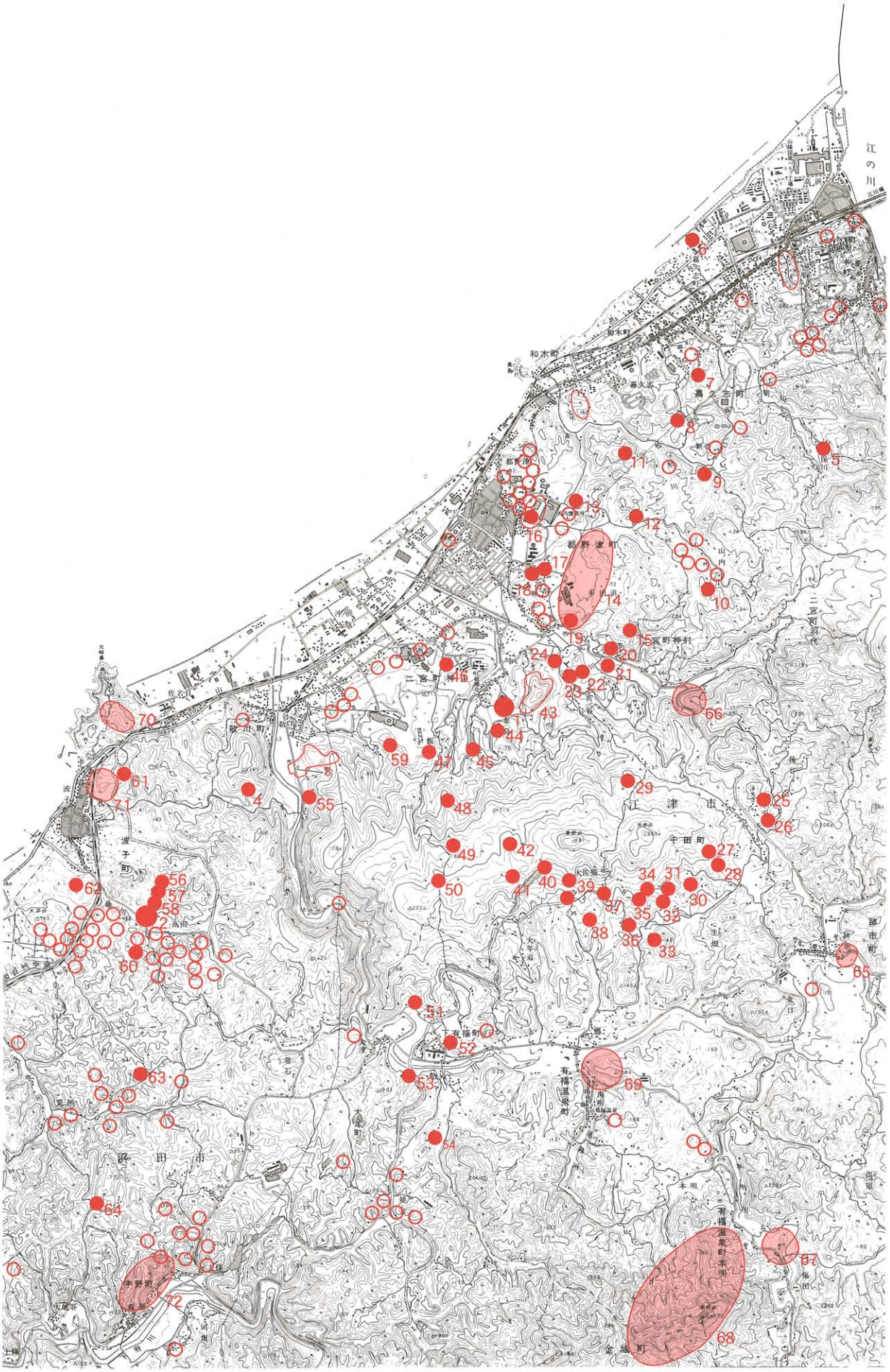
下府川流域では、古代からの国府は新たに「府中」として発展し、南北朝期まで栄えたと考えられている。代表的な遺跡として、集落遺跡で古市遺跡、横路遺跡が、城跡で笹山城跡、八反原城跡が挙げられる。また、伊甘山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、臼口大明神、上府八幡宮も所在する。江津市西部は国人領主である都野氏が支配し、戦国末期に江川西岸の郷田に拠点を移すまで、二宮町に拠点が置かれていたとされる。代表的な集落遺跡として二宮C遺跡、古八幡付近遺跡が挙げられ、城跡としては都野氏の神主城跡のほか、福屋氏の拠点である本明城跡が挙げられる。

近世・近代

近世になるとこの地域は浜田藩領となる。浜田は中国地方の押さえとして幕府に重視され、水陸交通の要衝として栄えた。近世後半頃になると、都野津層に含まれる豊富で良質な粘土を主原料に瓦・陶器等の石見焼の生産が活発になり、現在に至るまでこの地域の主要産業の一つとなっている。石見焼の窯は山の斜面を利用した連房式登り窯で、膨大な数の窯場が操業していたと考えられるが、実体はほとんど把握されていない。江津市西部ではこれまでに田室窯跡、三浦窯跡、飯田A遺跡、大田屋窯跡が、浜田市東部では長東坊師窯跡、生湯窯跡が発掘調査されている。



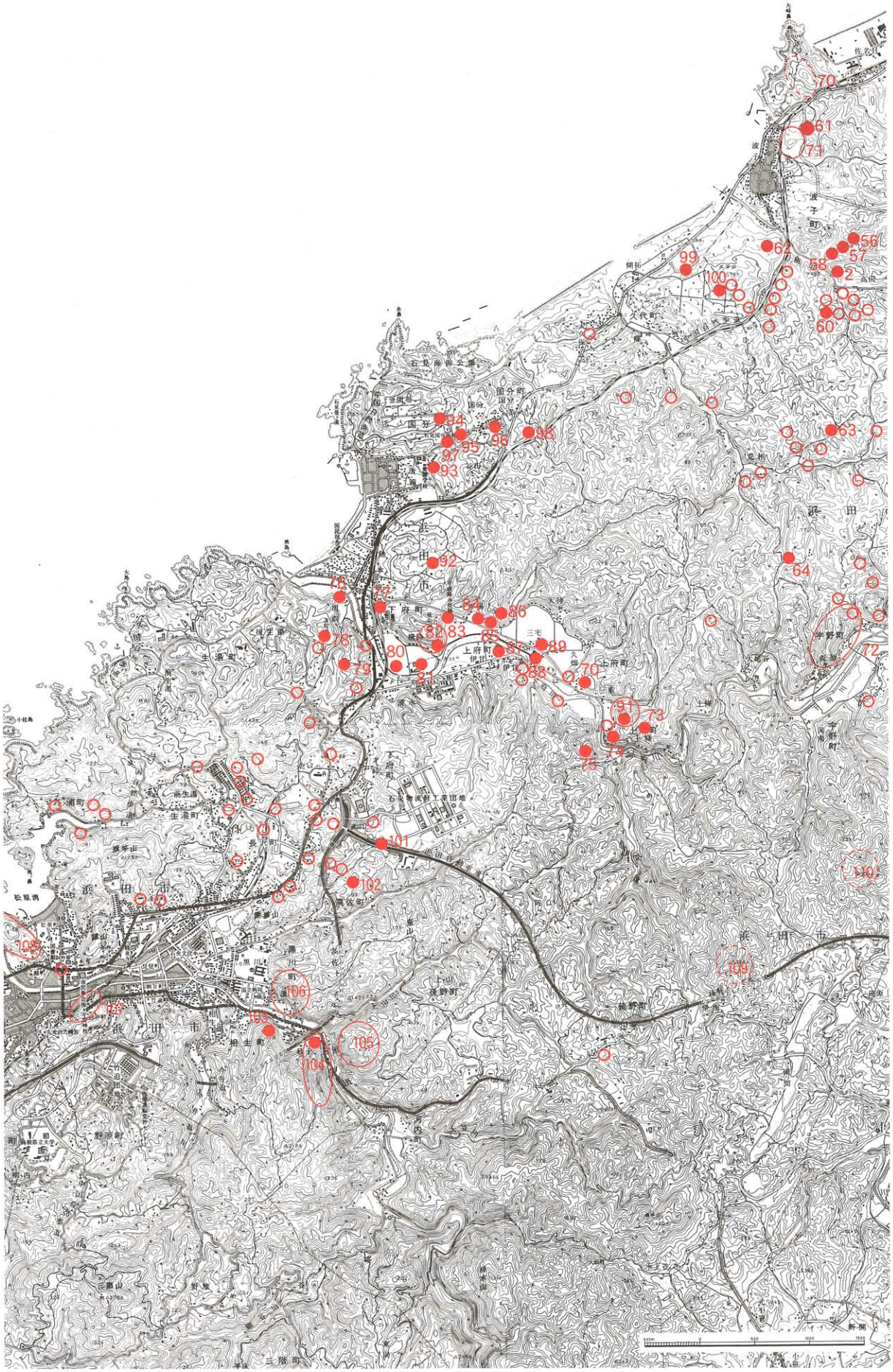
第１図　遺跡の位置



第２図　恵良遺跡・堂々窯跡の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝1/50000）

表2　恵良遺跡・堂々炭窯跡周辺の遺跡一覧

番号	遺名	種別	所在地	概要	備考
1	恵良遺跡	古代末～中世集落跡	江津市二宮町神主	掘建柱建物、須恵器、中世土師器 越州窯系青磁、白磁	江津道路建設に伴って調査
2	堂々炭窯跡	窯跡	江津市波子町	炭窯	
3	古八幡付近遺跡	縄文～近世集落跡 古墳	江津市敬川町	竪穴住居、掘立柱建物、弥生環壕 円墳2基（横穴式石室） 、分銅型土製品、統一新羅土器、越州窯系青磁 緑釉陶器、白磁、青磁木製品他	江津道路建設に伴って調査
4	横路古墓	古墳後期・近世集落跡	江津市敬川町	掘立・柱建物土壙墓	江津道路建設に伴って調査
5	久保川遺跡	散布地	江津市嘉久志町久保川	須恵器	
6	浜田藩台場跡	台場跡	江津市嘉久志町		
7	嘉久志遺跡	経塚	江津市嘉久志町	土坑	江津道路建設に伴って調査
8	久本奥窯跡	古墳時代～古代窯跡	江津市嘉久志町	地下式登り窯、掘建柱建物、土師器、須恵器 硯、鴟尾、瓦（下府廃寺と同氾）	江津道路建設に伴って調査
9	新屋遺跡	散布地	江津市嘉久志町		
10	岡田屋遺跡	散布地	江津市二宮町羽代	須恵器	
11	鹿伏山遺跡	散布地	江津市嘉久志町	土坑、縄文土器	江津道路建設に伴って調査
12	棚橋押込遺跡	散布地	江津市都野津町山ノ内	須恵器、土師器	一部発掘調査
13	二又平古墳	古墳	江津市都野津町六反田	墳形不明	
14	半田浜遺跡	散布地	江津市都野津町半田浜	石斧、弥生土器、土師器、須恵器	江津道路建設に伴って調査
15	天ヶ峠古墳	古墳	江津市二宮町神村	円墳2基（横穴式石室）、管玉	
16	行者山古墳	古墳	江津市都野津町行者山	箱式石棺、直刀	消滅
17	清水遺跡	散布地 火葬墓	江津市都野津町清水	蔵骨器（須恵器）	消滅
18	稲荷山遺跡	散布地	江津市都野津町稲荷山	弥生土器、甕棺	
19	半田浜西遺跡	弥生時代～中世集落跡	江津市二宮町神主	掘立柱建物、溝、弥生土器、土師器、須恵器　奈良三彩、越州窯系青磁、灰釉陶器、石帯	江津道路建設に伴って調査
20	坂部遺跡	散布地	江津市二宮町神村	須恵器	
21	隠居田遺跡	散布地	江津市二宮町神主	弥生土器、須恵器、土師器	
22	春木田遺跡	散布地	江津市二宮町神村	須恵器	
23	宮倉遺跡	集落跡	江津市二宮町神主	竪穴住居、掘建柱建物、溝、弥生土器 土師器、須恵器、瓦（国分寺と同文）	発掘調査
24	二宮Ｃ遺跡	弥生後期・古墳 中期中世集落跡	江津市二宮町神主	竪穴住居、掘建柱建物、弥生土器、土師器 瓦質土器、青磁	江津道路建設に伴って調査
25	土居西屋古墳群	古墳	江津市千田町後谷	円墳2基（横穴式石室）	1基消滅
26	森口古墳群	古墳	江津市千田町中千田	円墳2基（横穴式石室）	
27	空山古墳群	古墳	江津市千田町中千田　空山	円墳5基（横穴式石室）	
28	大元神社古墳	古墳	江津市千田町中千田　空山	円墳2基（横穴式石室）・墳形不明2基 （横穴式石室）、須恵器、土師器、鉄刀残片	
29	伝仙古墳群	古墳	江津市二宮町神村	古墳2基	
30	石田のセド古墳	古墳	江津市千田町大野谷	墳形不明（横穴式石室）	
31	ツヅラヤブ古墳群	古墳	江津市千田町大野谷	円墳5基（横穴式石室）、須恵器	
32	岩田氏宅裏古墳群	古墳	江津市千田町大野谷	円墳2基（横穴式石室）	市指定
33	白石古墳	古墳	江津市千田町大野谷　白石	円墳（横穴式石室）	
34	金クソ古墳	古墳	江津市千田町大佐張　金クソ	円墳（横穴式石室）	
35	峠田野地古墳群	古墳	江津市千田町大佐張	古墳4基（横穴式石室）、須恵器、勾玉、銀環　鉄刀	現在確認できるのは1基
36	ダイ古墳群	古墳	江津市千田町大佐張　ダイ	円墳4基（横穴式石室）	
37	恵後古墳群	古墳	江津市千田町大佐張　恵後	古墳（横穴式石室）	
38	大溢古墳	古墳	江津市千田町大佐張　大溢	古墳（横穴式石室）	
39	岩本古墳群	古墳	江津市千田町大佐張　岩本	古墳3基（横穴式石室）	
40	馬の背古墳	古墳	江津市千田町大佐張	古墳（横穴式石室）	
41	石指古墳	古墳	江津市千田町大佐張	古墳（横穴式石室）	
42	二本松古墳群	古墳	江津市二宮町神主	円墳1基（横穴式石室）墳形不明1基（横穴式石室）	2号墳墳丘なし
43	神主城跡	城跡	江津市二宮町神主	郭、土塁、掘切、土壙墓	江津道路建設に伴って調査
44	高神遺跡	散布地	江津市二宮町神主	溝、須恵器、土師器	一部確認調査
45	飯田Ｃ遺跡	散布地	江津市二宮町神主	弥生土器片、須恵器片、土師器片、土製権、陶硯	江津道路建設に伴って調査
46	青山遺跡	散布地	江津市二宮町神主　青山	弥生土器、土師器、須恵器	
47	飯田Ａ遺跡	窯跡	江津市二宮町飯田	石見焼窯跡、連房式登り窯、礎石建物、物原	江津道路建設に伴って調査
48	二宮古墳群	古墳	江津市二宮町神主	古墳3基（横穴式石室）	
49	高野山火塚	古墳	江津市二宮町神主	円墳（横穴式石室）、須恵器	
50	イノキ廻古墳群	古墳	江津市二宮町神主	円墳3基（横穴式石室）	
51	泰寧寺跡	寺院跡	浜田市下有福町古屋敷	棟板、地蔵尊像、宝篋印塔残欠	
52	山根古墓	古墓	浜田市下有福町	五輪塔、宝篋印塔	
53	滝ノ下古墓	古墓	浜田市下有福町	宝篋印塔	
54	火の谷古墳	古墳	浜田市下有福町火の谷	円墳（横穴式石室）	
55	古八幡遺跡	散布地	江津市敬川町	土師器、須恵器	敬川八幡宮故地
56	先打出井畑遺跡Ⅰ区		江津市波子町		
57	先打出井畑遺跡Ⅱ区		江津市波子町		
58	先打出井畑遺跡Ⅲ区		江津市波子町		
59	崎商店裏遺跡	古墳	江津市敬川町	横穴式石室（崩壊）	江津道路建設に伴って調査
60	大田屋窯跡	窯跡	江津市波子町	石見焼窯跡、連房式登窯、作業場、物原	江津道路建設に伴って調査
61	光明寺跡	寺院跡	江津市波子町高峯山		
62	波子遺跡	散布地	江津市波子町太平山	縄文土器、石族、石斧、古式土師器他	太平山遺跡群
63	長東坊師窯跡	窯跡	浜田市上府町荒相	石見焼窯跡、連房式登り窯、礎石建物、土坑	江津道路建設に伴って調査
64	大尾谷遺跡		浜田市上府町		
65	阿刀城跡	城跡	江津市跡市町跡市	郭	一部踏査不可能
66	神村城跡	城跡	江津市二宮町神村	郭、土塁、竪堀	
67	福田城跡	城跡	江津市有福温泉町本明	郭、土塁、堀切	
68	本明城跡	城跡	江津市有福温泉町本明	山城、石塁、井戸跡	金城町・乙明城跡福屋城跡と同一
69	加志岐城跡	城跡	江津市有福温泉町本明	郭、土塁、堀切、竪堀	
70	殿峰城跡	城跡	江津市波子町		明確な遺構なし
71	尾上城跡	城跡	江津市波子町	郭、石垣	一部踏査不可能
72	龍ヶ城跡	城跡	浜田市宇野町林原	郭、帯郭、土塁、堀切、虎口	



第３図　上条遺跡・水戸（三戸）神社跡・立女遺跡の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝1/50000）

表３　上条遺跡・立女遺跡と周辺の遺跡一覧

番号	遺　　跡　　名	種　　別	所　在　地	概　　要	備　　考
73	上条遺跡	銅鐸埋納地	浜田市上府町	銅鐸埋納坑、ピット群、	江津道路建設に伴って調査
74	水戸（三戸）神社跡	近代？	浜田市上府町	石祠、加工段、古道	江津道路建設に伴って調査
75	立女遺跡		浜田市上府町	土坑	江津道路建設に伴って調査
76	川向遺跡	弥生～中世	浜田市下府町	弥生土器、古式土師器、須恵器、中世土師器、木偶	
77	伊甘神社脇遺跡	弥生～中世	浜田市下府町	柱穴群、古墳時代中期の土器だまり	
78	多陀寺遺跡	散布地	浜田市生湯町	須恵器・土師器	
79	中ノ古墳	古墳	浜田市下府町	横穴式石室	
80	横路遺跡（土器土地区）	中世	浜田市下府町	掘立柱建物跡、墓	
81	横路遺跡（原井ケ市地区）	古代～中世	浜田市下府町	掘立柱建物跡	
82	笹山城跡	城跡	浜田市下府町	曲輪・堀切	
83	下府廃寺跡	寺院跡	浜田市下府町	塔心礎・金銅跡・瓦	一部国指定
84	半場口古墳群	古墳	浜田市下府町	１号墳・石棺？　２号墳・横穴式石室	一部発掘調査
85	仕切遺跡	散布地	浜田市下府町	須恵器・土師器	
86	片山古墳	古墳	浜田市下府町	方墳・横穴式石室	市指定
87	古市遺跡	古代～中世	浜田市下府町	掘立柱建物	
88	宮宅山遺跡	散布地	浜田市上府町	須恵器・土師器・瓦	
89	上府遺跡	弥生～中世	浜田市下府町	柱穴	
90	新延遺跡	散布地	浜田市上府町	須恵器	
91	八反原城跡	城跡	浜田市上府町	曲輪・堀切・土類	
92	大平遺跡	散布地	浜田市下府町	弥生～中世、黒曜石	
93	浜田ろう学校敷地古墳	古墳	浜田市国分町		消滅
94	前場紙漉遺跡	散布地	浜田市国分町	須恵器・土師器・陶磁器・瓦	
95	石見国分寺跡	寺院跡	浜田市国分町	塔跡・誕生仏・瓦	国指定
96	石見国分尼寺跡	寺院跡	浜田市国分町	柱坑・誕生仏・瓦	県指定
97	石見国分寺瓦窯跡	窯跡	浜田市国分町	平窯・瓦	県指定
98	奈古田窯跡	窯跡	浜田市国分町	須恵器	
99	大平浜遺跡	散布地	浜田市久代町	土師器・須恵器	
100	越峠遺跡	散布地	浜田市久代町	土師器・須恵器	
101	浜伊場遺跡	散布地	浜田市長沢町	土師器・須恵器・石鏃	
102	菖蒲迫遺跡	散布地	浜田市長沢町	磨製石斧・須恵器	
103	三子山城跡	城跡	浜田市相生町		
104	社家地古墳群	古墳	浜田市相生町	横穴式石室・須恵器	
105	正蓮寺山城跡	城跡	浜田市後野町	郭、腰郭	
106	潰城跡	城跡	浜田市黒川町	郭	
107	三十夜城	城跡	浜田市牛市町	郭・堀切	
108	浜田城跡	城跡	浜田市殿町	郭・腰郭・石垣・堀切・虎口・櫓台	県指定
109	小山城跡	城跡？	浜田市後野町		
110	高手山城跡	城跡？	浜田市後野町		

※番号のない○は、近世以降の生産遺跡

第３章　　恵　良　遺　跡

第1節　平成８年度発掘調査の経過と概要

平成８年度に実施した範囲確認調査で最終的に本調査が必要とされた部分1900㎡について（第4図)、平成８年9月2日から同年12月18日まで 本調査を実施した。

まず、地形に応じて調査区を２区画設定した。調査区南西にある、標高の高い市道脇の畑地跡を１区、八幡宮に近い市道脇の斜面を２区とした。そして、それぞれの調査区内における水平、垂直の遺構分布を確認するために、３か所にトレンチを設定した。(第4図)

その結果、１区に設定したＴ１からは、市道脇の畑地跡（標高31.9m前後）の覆土下１m付近から上下２面にわたる遺構が確認された。また、２区に設定したＴ２では、斜面地山に穿たれた５個のピットおよび加工段状遺構が検出され、これらをを中心に本調査した。さらに、表土の重機掘削や荒掘りを進めた結果、遺構の分布区域がトレンチＴ１とＴ２にかかる加工段状遺構に限られることがわかったので、他の区域については順次本調査対象から外していった。

Ｔ３からは遺構は検出されなかった。遺物は別表のとおり計17点が出土したが、堆積層が比較的深く、人力で動かせないほどの自然石が多く埋まっていたこと、遺構が確認されなかったこと、トレンチを拡張すると市道に与える影響が大きいと判断されたことなどから、このＴ３周辺区域については発掘調査を取りやめた。

本調査は、２区斜面部分の荒掘りから取りかかり、加工段、加工段上の柱穴列やピットを発掘調査した。次いで１区上層遺構面の検出、ピット群および炭溜まり土坑（炭窯跡？）の発掘、１区下層遺構面の検出、溝跡、柱穴列、ピット群、掘立柱建物跡、焼土面の発掘と進めていった。この間、これらの遺構に伴う遺物の取り上げ、遺構・遺物の検出状況、出土状況の実測図、写真撮影、測量データ、調査区および周辺の地形測量等の記録を採り、12月18日に調査を終了した。

第2節　調査の結果

１区について

１区の遺構は、トレンチＴ１を北端とする市道西側畑地跡の平坦地、国道用地境界南端までの区域に集中しており、南から東に回り込むこの市道下にも遺構の広がっている可能性が高い。遺構は２面におよび、上層と下層に分けられる。

上層の遺構はさらに２か所に分かれる。標高31m付近で検出された平坦地の中程から北側に偏って分布するピット群と、標高30.9m付近で検出された国道用地南境界付近の炭溜まり土坑である。ピット群のうちのいくつかは柱穴の可能性が高いと思われるが、配置を復元するのは困難である。この１区上層遺構の検出過程で若干の中世土師器供膳具、須恵器壺・鉢などが出土している。

また、直接遺構に伴うものではないが、越州窯系青磁ＩＡ類（恵良遺跡第10図１)、白磁Ⅳ類の破片が出土している。前者は初期貿易陶磁器で８世紀中葉以降、後者は中世前期の貿易陶磁器で11世紀後半～12世紀前半とされる[註1]。上層遺構の下限は白磁Ⅳ類以前の時期に求められるものと考える。

ちなみに、１区上層遺構出土須恵器鉢（恵良遺跡第９図８）は口縁部を欠くが、京都府亀岡市篠古窯跡群産とみられ、平底で薄手の体部が直線的に斜め上方に伸びるなど、第Ⅲ期第３段階11世紀第1四半期の特徴を示す[註2]ものと思われ、上記白磁の出土状況と符合しているものと思われる。

このほかに、１区下層遺構は、30.6m前後で検出され、上層遺構群とはほぼ40cmの高低差がある。平面分布においては上層遺構よりも広く、トレンチＴ１から南端用地境界まで全域に分布する。

まず、１区北端と中央にそれぞれ溝跡１条ずつ計２条が検出され、この２条の溝に区画されたかのように分布するピット群が検出された。その北、遺構分布の中心部、溝跡に区画された外側を中心に分布する焼土面11か所とピット群が検出された。さらに、平坦地の南端部分において掘立柱建物跡SB11が検出された。

焼土面は、いずれも標高30.4m前後で検出されている。焼土面どうしの切り合いはなく、色調は赤茶色～赤紫色、焼土の締まり具合も一様で、ほぼ同時的にできたものとも考えられる。焼土面以外の遺構は、溝跡も、ピットも、柱穴もこれを切って営まれており、１区下層遺構群の中で、焼土面遺構が最も古い可能性が考えられる。この焼土面のうち、最も北に位置するものから恵良遺跡第11図１に示す金属器模倣と思われる須恵器坏の一部が出土していることから、この坏の時期と考えられる８世紀前半以降の年代観が与えられるものと思われる。

掘立柱建物跡SB11から出土した土師器坏（恵良遺跡第11図２）は胎土が粗く、古代の土師器の系譜の中に含められるものである。したがって、SB11も古代の遺構と考えておきたい。

このＩ区下層遺構に伴って中世土師器坏、土師器甕、須恵器甕壺類などが出土した（第11図）。このほかに、１区の覆土中からは、格子状タタキ目を持つ須恵器甕や備前系鉢（16世紀末～17世紀初頭）、肥前系陶器皿（17世紀初頭）、管状土錘なども出土している（以上第10図）。

２区について

２区の主要な遺構としては、標高24.8m前後で検出される加工段上に残る遺構群である。これらは３群に分けられると思われる。まず、加工段上西側の狭い範囲に残るピット群もしくは柱穴群である。これらの中には、柱根を残すものがあった。その東側、前後して建てられた掘立柱建物跡２棟にかかると思われる柱穴列と、ほぼこれらの建物跡の長軸に平行する溝跡である。柱穴列と溝跡は並行するものどうし、セット関係にあると考えられる。溝跡の切り合いから、掘立柱建物跡SB21が同SB22に優先しており、より新しいものと考えられる。これらの遺構に伴うと考えられる遺物のうち図示できたものは中世土師器２点と管状土錘5点であった。

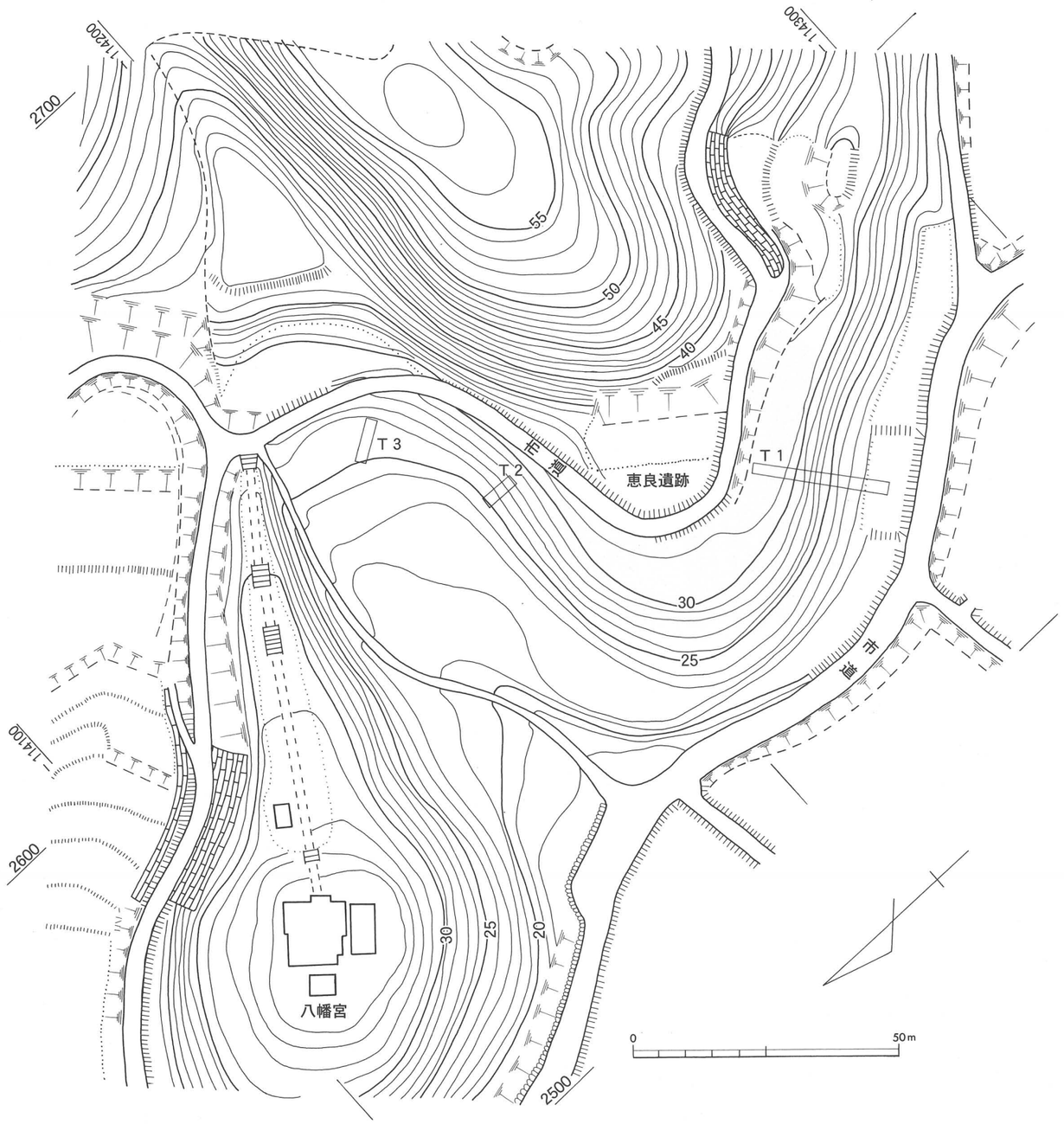
恵良遺跡から出土した中世土師器は、色調から白色系、灰色・褐色系、茶色・橙褐色系の３種に分類される。あくまでも、破片点数においての比較であるが、白色系は最も多く、１区上層遺構にかかって分布している。２区からはほとんど出土しない。灰色・褐色系は１区下層に偏って分布する。２区からも若干出土する。茶色・橙色系は両区からほぼ同量出土する。これらの特徴は時期や産地の違いを反映しているものと考えられる。

註

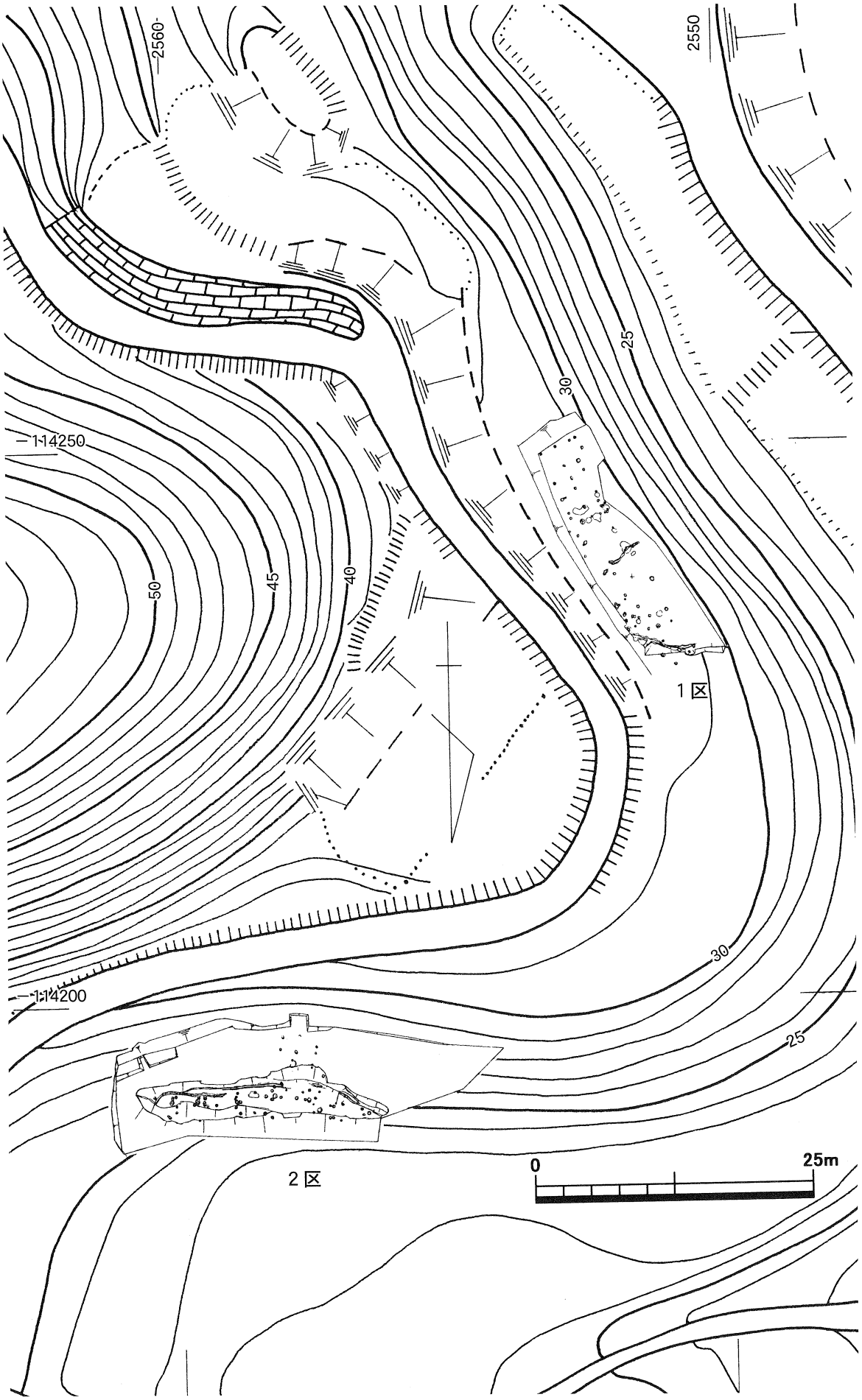
註1『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編1995年真陽社

註2『京都府遺跡調査報告書　第2冊　篠窯跡群Ⅰ』1984年（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

『京都府遺跡調査報告書　第11冊　篠窯跡群Ⅱ』1989年（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

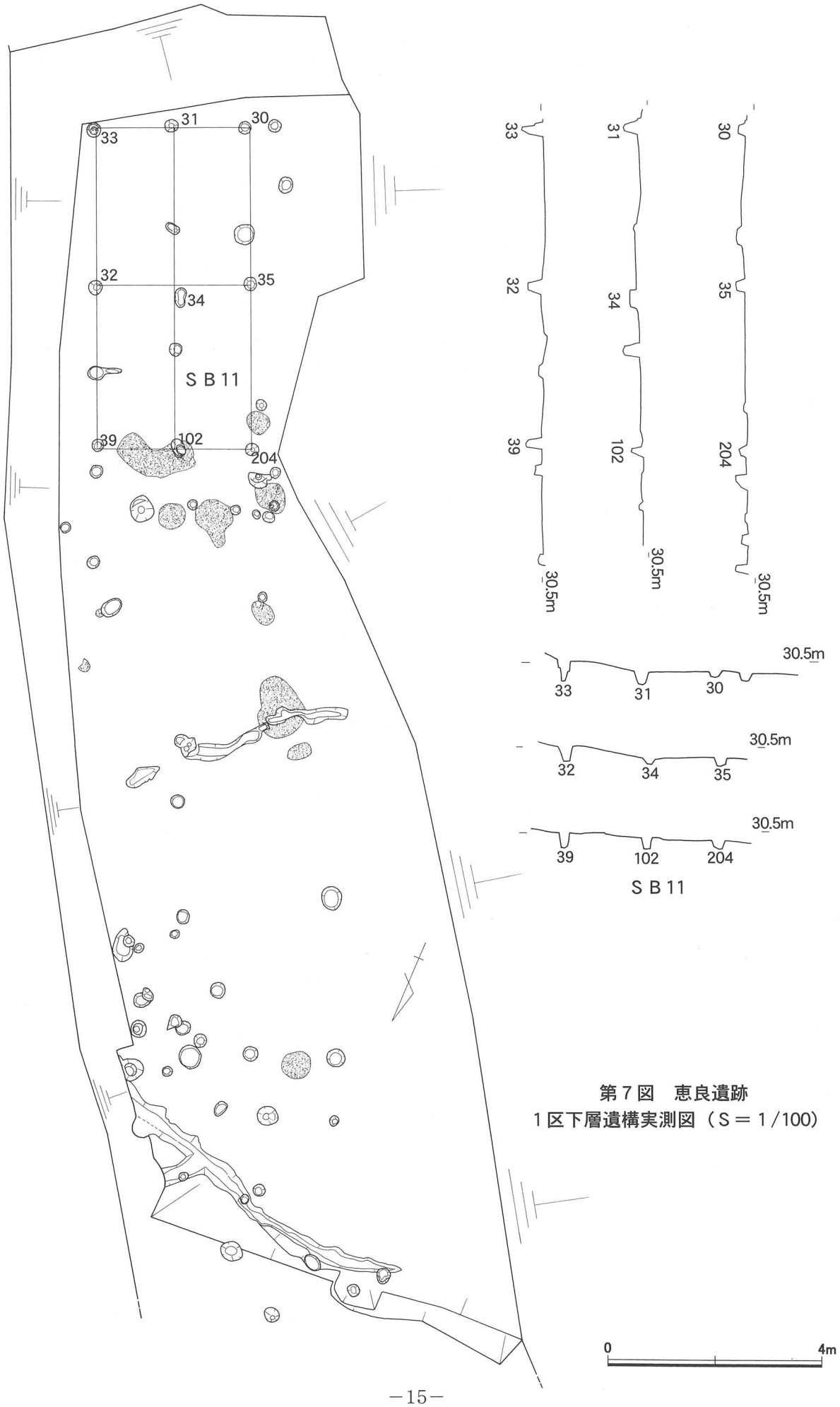


第４図　恵良遺跡　遺跡周辺の地形（Ｓ＝１/1000）

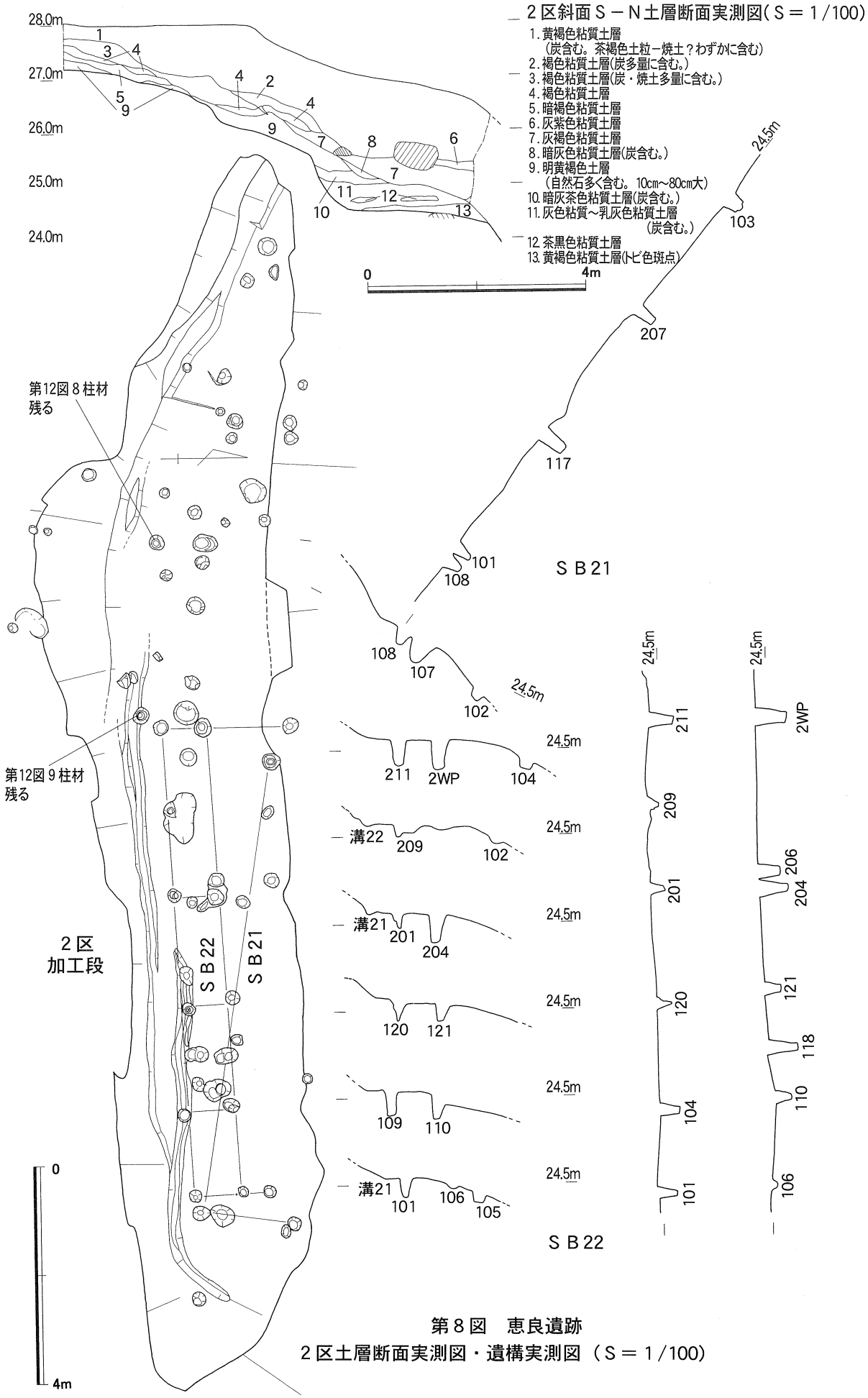


第５図　恵良遺跡　調査区遺構位置図（Ｓ＝１/500）

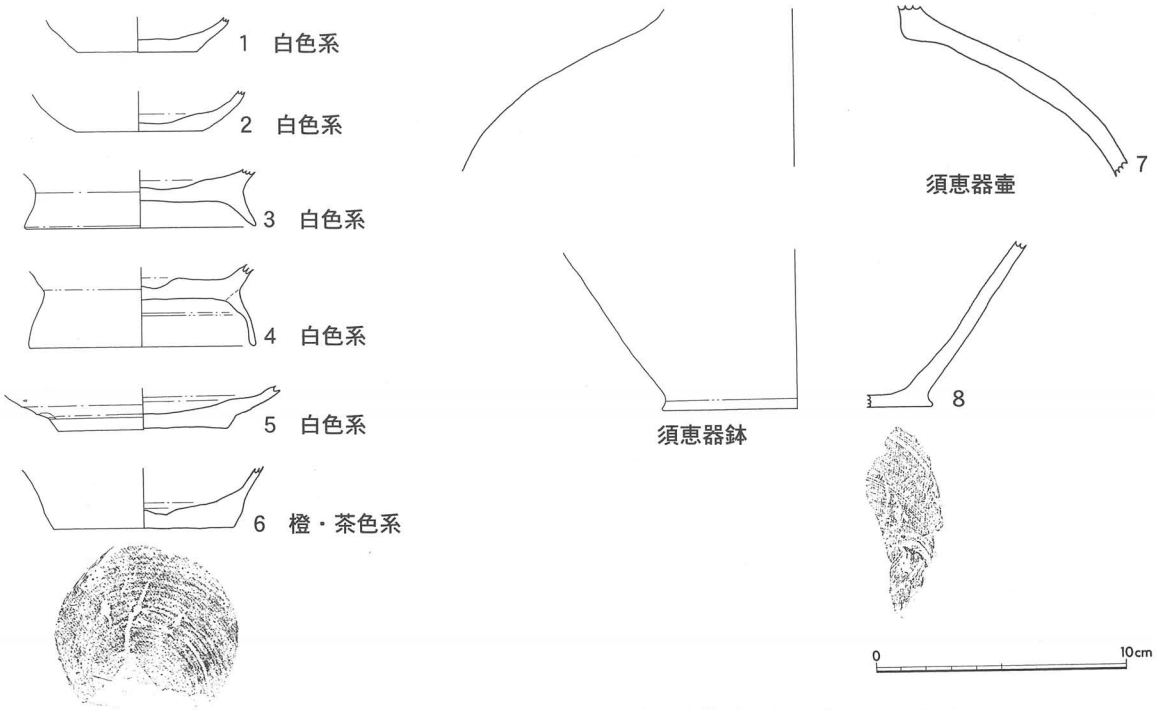
第６図　恵良遺跡　１区土層断面図（Ｓ＝１/50）・上層遺構実測図（Ｓ＝１/50、Ｓ＝１/100）



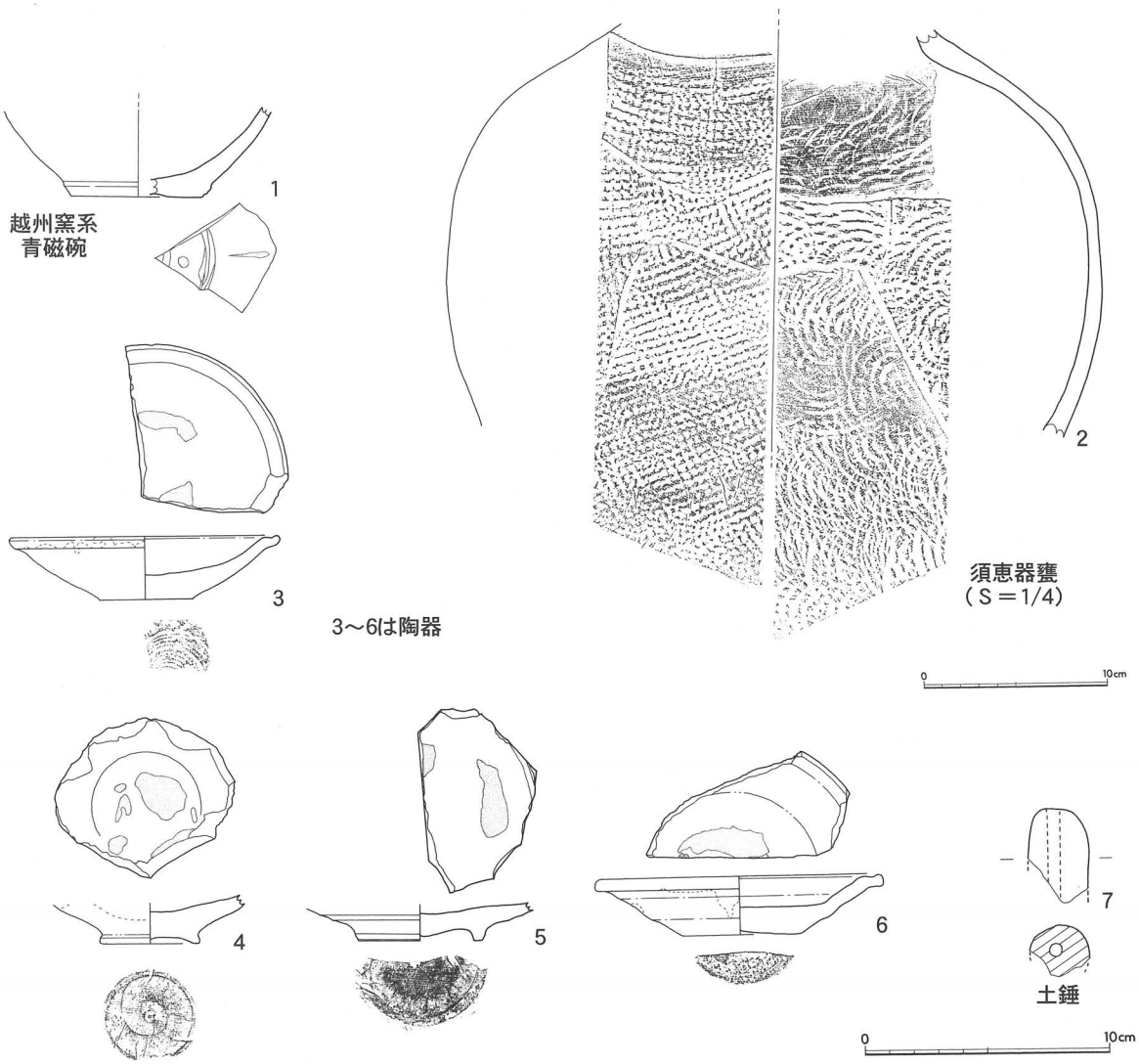
第７図　恵良遺跡
１区下層遺構実測図（Ｓ＝１/100）



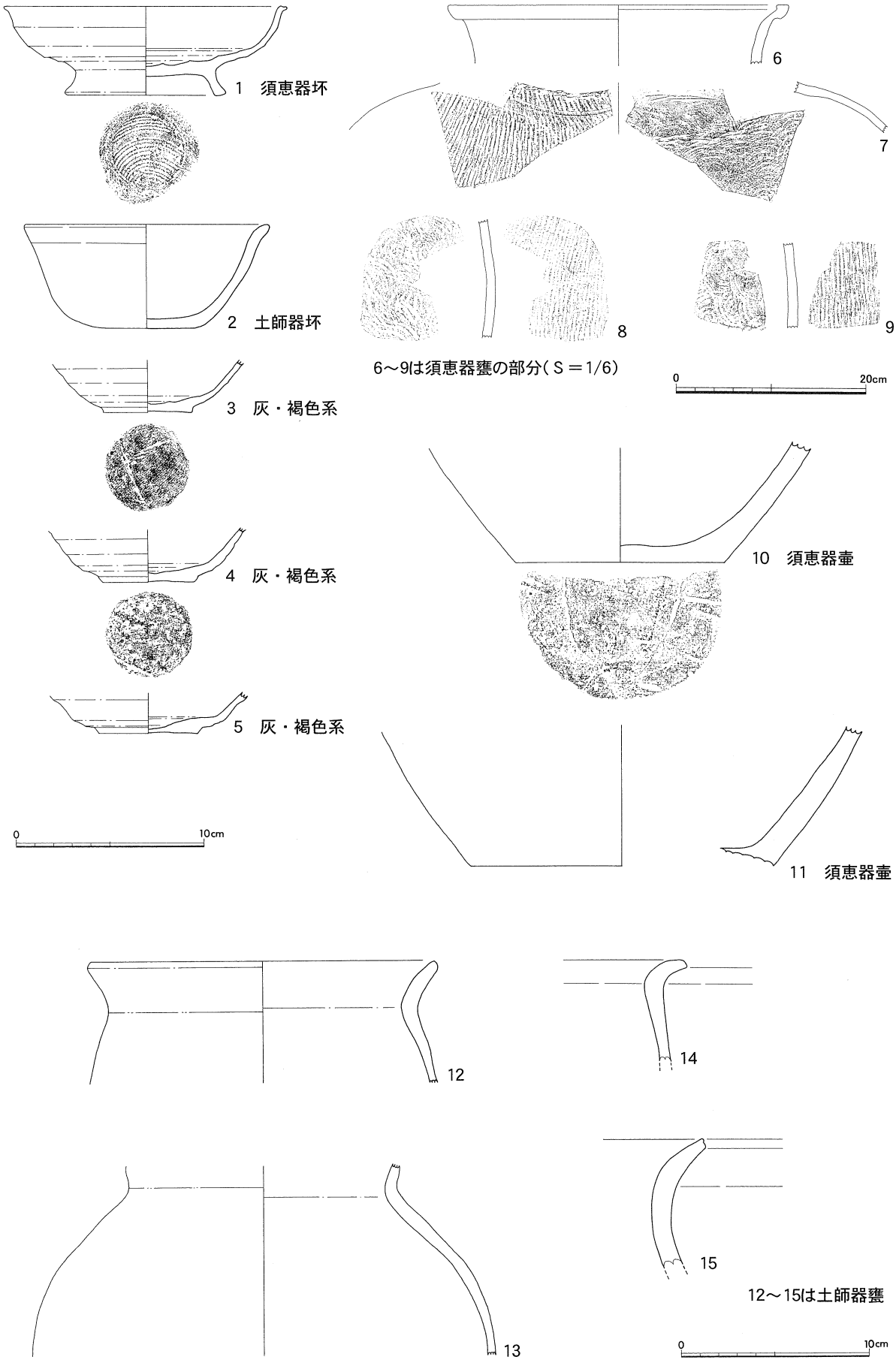
第8図　恵良遺跡
2区土層断面実測図・遺構実測図（S＝1/100）



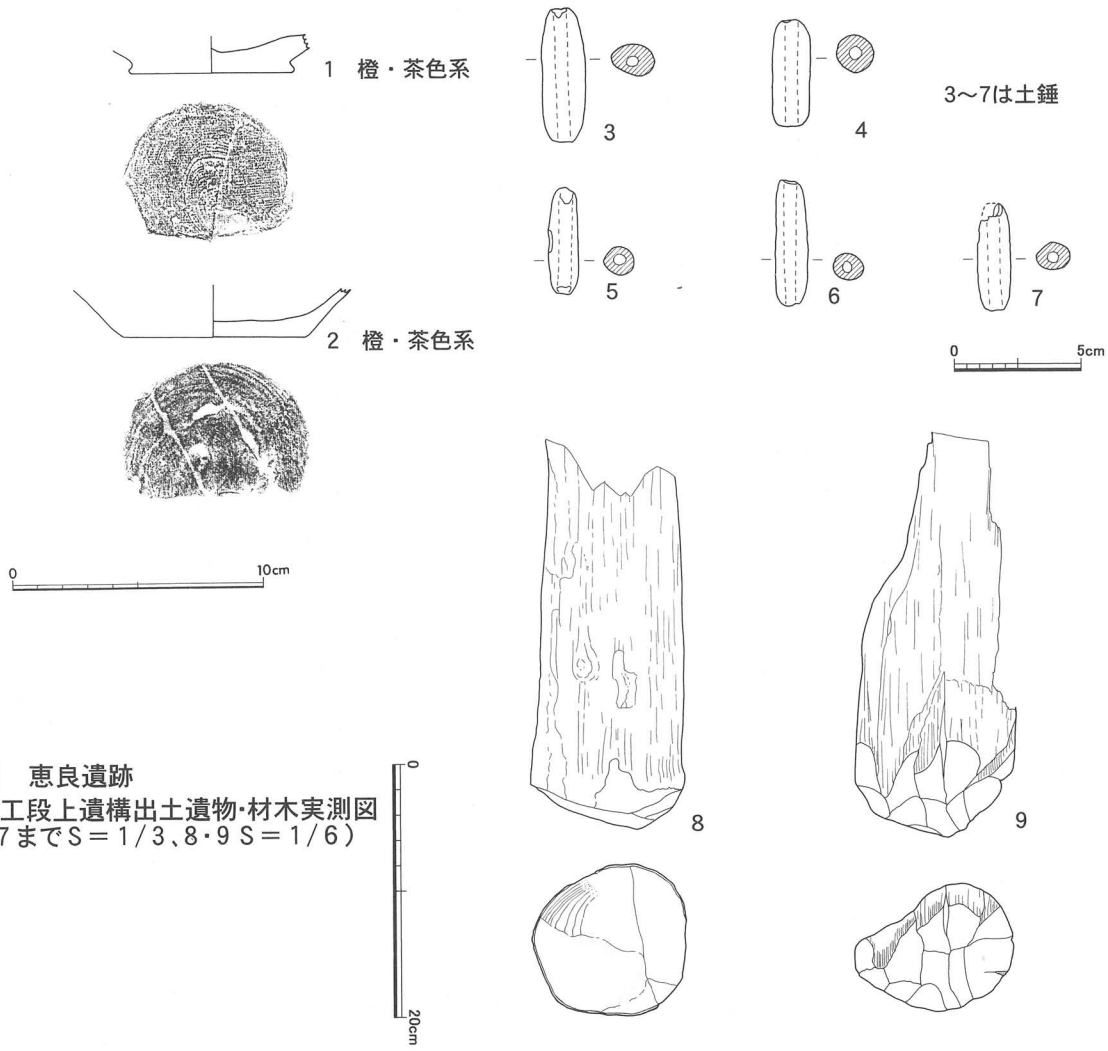
第９図　恵良遺跡　１区上層遺構出土遺物実測図（Ｓ＝１/３）



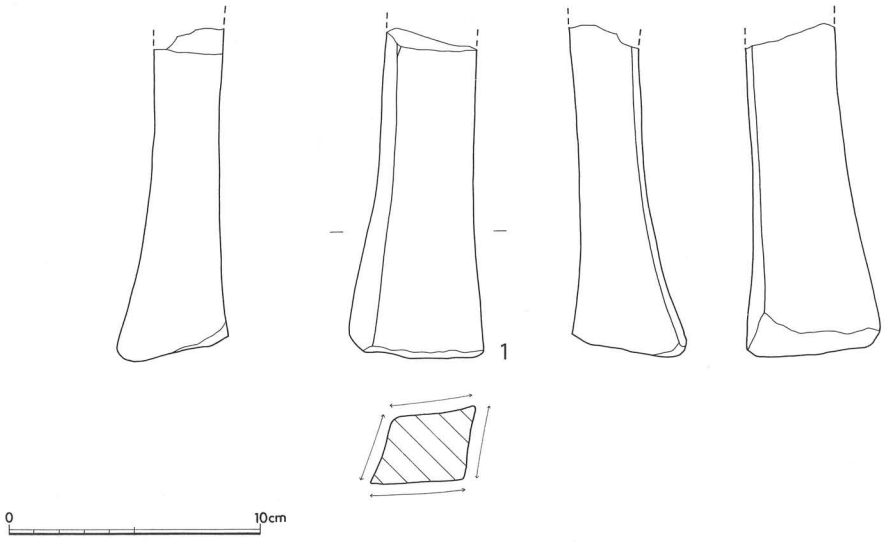
第10図　恵良遺跡　１区遺構外出土遺物実測図（２須恵器甕Ｓ＝１/４、他はＳ＝１/３）



第11図　恵良遺跡　１区下層遺構出土遺物実測図（S＝1/3、他はS＝1/6）



第12図　恵良遺跡
2区加工段上遺構出土遺物･材木実測図
（1～7までS＝1/3、8･9 S＝1/6）



第13図　恵良遺跡　1区遺構外出土砥石実測図（S＝1/3）

恵良遺跡　1区加工段計測表

形　状	細長い長方形	
規　模 (m)	加工段の幅	加工段の奥行き
	23.7（調査区内最大値）	6.4（調査区内）
遺構までの堆積層	1.04m	

恵良遺跡　1区上層遺構SK 1計測表

形　状	平面形－円形　断面形－弓弧状		
規　模 (cm)	直　　径	深さ	備考
	100×83	14	野焼き炭窯か？

恵良遺跡　1区下層遺構掘立柱建物跡S11計測表

柱穴配置		現状11本柱　2間×2間　平面長方形　ほぼ南北長軸					
規　模 (m)		梁行			桁　行		
		2間　2.82～2.9			2間　5.9～6.03		
柱穴等 (cm)	番　号	33	31	30	32	34	35
	上面径	22×26	23	20×23	24×28	20×34	23
	深　さ	41	26	13	29	15	17
	番　号	39	102	204			
	上面径	20×23	23×34	24			
	深　さ	31	23	17			
柱間距離 (m)		33-31	31-30	33-32	32-39		
		1.44	1.38	2.95	2.95		

恵良遺跡　2区加工段計測表

形　状	平面・壁面弓弧状に残る。断面「L」字状	
規　模 (m)	加工段の幅	加工段の奥行き
	22	3.45（現存最長部）
壁　高	1.28（現存最高部）	

恵良遺跡　2区加工段上の掘立柱建物跡SB21計測表

現状柱穴配置		5本柱残る。1間以上×3間以上　平面長方形　ほぼ東西長軸					
規　模 (m)		梁　行			桁　行		
		1間以上　1.7m以上			3間以上　8.4m以上		
溝　跡		SD21					
		幅		深　さ		延　長	
		20cm～22cm		最深11cm		6.8m以上	
柱穴等 (cm)	番　号	102	108	117	207	103	
	上面径	23×26	27×32	27×40	22	30	
	深　さ	22	29	51	37	14	
柱間距離 (m)		102-108	108-117	117-207	207-103		
		1.7	2.9	2.85	2.65		

恵良遺跡　2区加工段上掘立柱建物跡SB22計測表

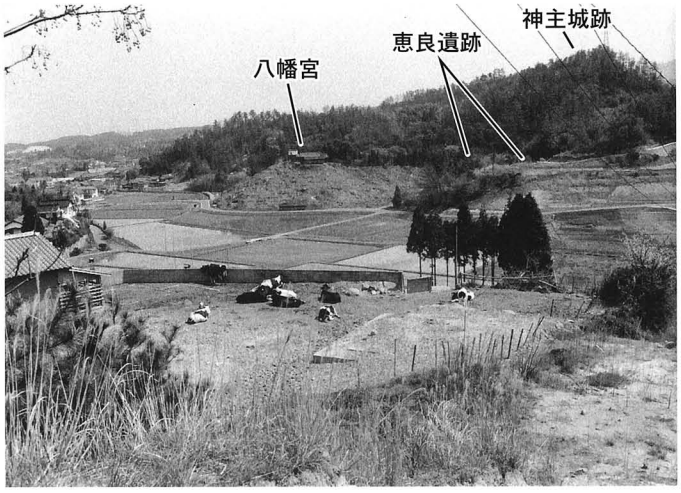
現状柱穴配置		12本柱残る　1間×5間以上　縁付？　平面長方形　ほぼ東西長軸					
規　模 (m)		梁　行			桁　行		
		1間以上　2.36m以上			5間以上　8.7m以上		
溝　跡		SD22					
		幅		深　さ		延　長	
		20cm～35cm		最深17cm		9.38m以上	
柱穴等 (cm)	番　号	106	101	110	109	121	120
	上面径	18	20	23×27	21	25	23
	深　さ	10	29	44	44	36	31
	番　号	204	201	209	104	2WP	211
	上面径	35	22	22×26	25×28	28×32	24×27
	深　さ	54	30	26	11	57	47
柱間距離 (m)		106-101	101-109	109-120	120-201	201-209	209-211
		0.88	1.55	1.95	2.1	1.55	1.55
		204-2WP	104-2WP				
		3.14	1.56				

恵良遺跡出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	計測値	胎土	焼成	色調	形態・文様・手法	備考
9-1	1区上層	中世土師器	坏	復元高台径4.8cm	精良、密	良好	黄乳灰色	回転ナデ？、回転糸切り痕？、平底。底部内面に回転ナデの渦紋残る。	底部破片、白色系
9-2	1区上層	中世土師器	坏	底径5.0cm	精良、密	良好	乳灰色～淡黄褐色	体部内外回転ナデ、平底、回転糸切り痕	白色系
9-3	1区上層	中世土師器	坏	高台径9.0cm	精良、密	良好	黄乳灰色	回転ナデ？、回転糸切り痕？、貼付高台、見込みに回転ナデの渦紋残る。	高台と底部、白色系
9-4	1区上層	中世土師器	坏	高台径9.0cm	砂粒多量均質に含む。	良好	黄乳灰色	回転ナデ？、回転糸切り痕？、非常に高い貼付高台、見込みに回転ナデの渦紋残る。	高台と底部、白色系
9-5	1区上層	中世土師器	坏	底径6.8cm	砂粒多量に含む。	不良軟質	白色	回転ナデ、回転糸切り痕、底部高台状平底、見込みに回転ナデの渦紋残る。	底部のみ、白色系
9-6	1区上層	中世土師器	坏	底径7.2cm	砂粒少々含む。	良好硬質	橙色	ナデ、ケズリ、平底、回転糸切り痕未調整、体部直線的に立ち上がる。	橙・茶色系
9-7	1区上層	須恵器	壺		密	堅緻	内：青灰色、外：灰色	回転ナデ	頸部から胴部破片
9-8	1区上層	須恵器	鉢	復元底径10.6cm	精良、密	堅緻	淡青灰色	回転ナデ・ケズリ、平底、回転糸切り痕未調整、器壁薄く、直線的な立ち上がり。	京都府亀岡市篠古窯跡群産須恵器鉢D　第3期第3段階11世紀第1四半期
10-1	1区遺構外	磁器	椀	復元底径6cm	精良、緻密	堅緻	明るいオリーブ色	全面施釉後量付けの釉薬を掻き取っている。蛇の目高台	越州窯系青磁椀ⅠA類。体部上半口縁欠く。
10-2	1区遺構外覆土中	須恵器	甕	復元胴径35.4cm	精良、密	堅緻	内：明灰色、外：灰色～暗灰色	内：同心円状タタキ目、外：格子状タタキ目	頸部下～胴部破片
10-3	1区遺構外覆土中	陶器	皿	復元口径10.8cm、復元底径3.8cm	精良、密	堅緻	内：淡緑色、外：暗黄褐色	回転ナデ。内面砂目積み跡あり。内面全部・口縁外面緑釉。	底部～口縁破片
10-4	1区遺構外覆土中	陶器	皿	高台径4.0cm	精良、密	堅緻	内：緑灰色、外：淡緑灰色	回転ナデ。高台内渦紋残る。内面砂目積み跡あり。内面石灰釉。	底部破片
10-5	1区遺構外覆土中	陶器	皿	高台径5.0cm	精良、密	堅緻	内：淡緑褐色、外：暗茶褐色	回転ナデ、回転ヘラケズリ。内面砂目積み跡あり。	底部破片
10-6	1区遺構外覆土中	陶器	皿	復元口径11.4cm、復元底径4.6cm	精良、密	堅緻	内：淡黄緑褐色、外：黄褐色～赤褐色、断面：黄灰褐色	回転ナデ。内面砂目積み跡あり。内部全部・外面上部緑釉。	底部～口縁破片
10-7	1区遺構外覆土中	土製品	土錘	現存長3.8cm、径2.5cm	砂粒多く含む	やや軟質	黒褐色	管状土錘	1/2以下残る。
11-1	1区下層赤褐色土層中	須恵器	坏	口径15.0cm、器高4.7cm、高台径8.6cm	密、砂粒少々含む	堅緻	明灰色	回転ナデ？、回転糸切り痕？、高く踏ん張る貼付高台、見込みに回転ナデの渦紋残る。口縁肥厚させる。	ほぼ完形
11-2	1区下層SB11	土師器	坏	復元口径12.5cm、器高5.57cm、底径5.5cm	微砂粒多く含む。	良好	黄茶色	ナデ？器壁の厚さが一様。口縁やや肥厚させ外反する。	破片
11-3	1区下層	中世土師器	坏	底径4.8cm	砂粒少々均一に含む。	不良軟質	淡灰色	回転ナデ、回転糸切り痕、底部高台状平底、見込みに回転ナデの渦紋残る。	底部～体部立ち上がり、灰・褐色系
11-4	1区下層	中世土師器	坏	底径4.8cm	砂粒多量に含む。	不良軟質	淡灰褐色	回転ナデ、回転糸切り痕、底部高台状平底、見込みに回転ナデの渦紋残る。	口縁を欠く、灰・褐色系
11-5	1区下層	中世土師器	坏	底径5.3cm	砂粒少々均一に含む。	不良軟質	淡灰褐色	回転ナデ、回転糸切り痕、底部高台状平底、見込みに回転ナデの渦紋残る。	底部～体部立ち上がり、灰・褐色系
11-6	1区下層	須恵器	甕	復元口径35.8cm	密、砂粒含む。	堅緻	内：明灰色、外：青灰色	回転ナデ	口縁部破片
11-7	1区下層	須恵器	甕		密	堅緻	内：明灰色、外：青灰色	内：同心円状タタキ目、外：平行線状タタキ目	肩部破片
11-8	1区下層	須恵器	甕		密	堅緻	内：灰色、外：淡灰色	内：同心円状タタキ目、外：平行線状タタキ目	胴部破片
11-9	1区下層	須恵器	甕		密	堅緻	内：灰色、外：淡灰色	内：同心円状タタキ目、外：平行線状タタキ目	胴部破片
11-10	1区下層	須恵器	長頸壺	復元底径11.0cm	精良、密	堅緻	内：明灰色、外：灰色	回転ナデ、底部外面ナデ、平底	底部および底部付近破片
11-11	1区下層	須恵器	長頸壺	復元底径16.0cm	精良、密	堅緻	内：灰色、外：暗灰色		底部付近破片
11-12	1区下層	土師器	甕	復元口径18cm	やや粗い。2mm以下の白色砂粒含む。	普通	赤褐色	内：ケズリ、外：ナデ？「く」の字状口縁	口縁部～胴部破片
11-13	1区下層	土師器	甕	復元頸径14.2cm	やや粗い。1mm以下の白色砂粒含む。	普通	内：赤褐色～黒色、外：赤褐色	内：ケズリ、外：ナデ？「く」の字状口縁	頸部～胴部破片
11-14	1区下層	土師器	甕		微砂粒多く含む。	良好	淡黄茶色	内：ケズリ、外：ナデ？「く」の字状口縁	口縁部～胴部破片
11-15	1区下層	土師器	甕		微砂粒多く含む。	良好	淡黄褐色～桃色	「く」の字状口縁	口縁部～頸部破片
12-1	2区加工段上西側遺構群上の堆積層	中世土師器	坏	底径6.2cm	密、白色砂粒少し含む。	良好硬質	内：褐色、外：黒褐色、断面：黄褐色	ナデ、回転糸切り痕未調整。底部高台状に残る。	底部破片、橙・茶色系
12-2	2区加工段上西側遺構群上の堆積層	中世土師器	坏	底径7.2cm	密、白色砂粒少し含む。	良好硬質	橙茶色	回転ナデ、回転糸切り痕未調整	底部破片、橙・茶色系
12-3	2区加工段上西側遺構群上の堆積層？	土製品	土錘	最大径1.7cm、長さ5.4cm、重さ12.8g	砂粒含む	良好	淡黄褐色～黒灰褐色	管状	完形
12-4	2区加工段上西側遺構群上の堆積層？	土製品	土錘	最大径1.5cm、長さ4.3cm、重さ10.8g	砂粒含む	良好	黒色～淡黄褐色	管状	完形
12-5	2区加工段上西側遺構群上の堆積層	土製品	土錘	最大径1.2cm、長さ4.3cm、重さ5.6g	砂粒含む	良好	黒灰色～淡黄褐色	管状	完形
12-6	2区加工段上西側遺構群上の堆積層	土製品	土錘	最大径1.3cm、長さ5.0cm、重さ8.0g	砂粒含む	良好	黒灰褐色	管状	完形
12-7	2区加工段上西側遺構群上の堆積層	土製品	土錘	最大径1.4cm、長さ4.3cm、重さ6.5g	砂粒含む	良好	黒灰褐色～淡黄褐色	管状	ほぼ完形
12-8	2区加工段上西側遺構群WP3中に残る	建材	柱材	現存長30cm、径12.8cm(最大値)				鉈等の金属道具によって切断整形。	落葉広葉樹
12-9	2区加工段上西側遺構群WP1中に残る	建材	柱材	現存長32cm、径12.5cm(最大値)				鉈等の金属道具によって切断整形。	落葉広葉樹他に松材使用の穴もあり。
13-1	1区南寄り覆土層中	石器	砥石	現存長13.2cm、4.2cm×3.1cm			青カビ色		長面4面使用　金属用

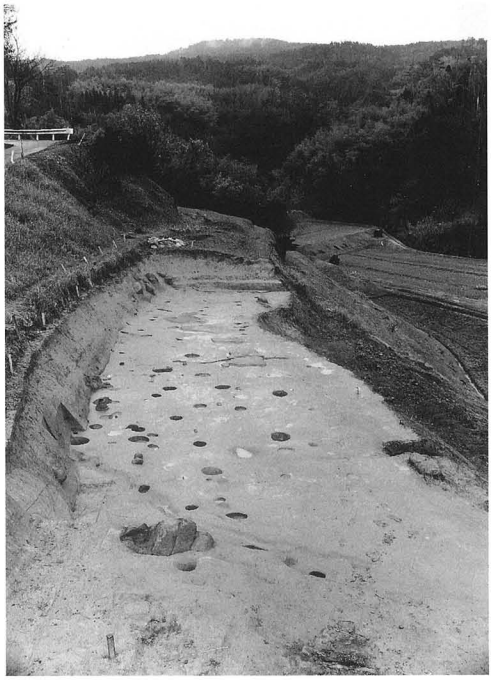
恵良遺跡出土遺物破片数量表

種　別	器　種	特徴・属性・部位			Ⅰ　区	Ⅱ　区	第3トレンチ	計
土師器	甕	口縁が外反するもの			6	4	0	10
		口縁が厚く低いもの			13	0	0	13
	坏				1	0	0	1
	器種不明				63	68	0	131
計					83	72	0	155
須恵器	蓋坏	古墳時代			2	7	0	9
		古代(蓋)			7	1	0	8
		古代(身)	底部ヘラ切り痕あり		4	2	0	6
			底部糸切り痕あり		4	3	0	7
			底部高台付		9	0	0	9
			口縁・体部片		38	2	0	40
	高坏				1	0	0	1
	壷	口縁部片			0	1	0	1
		底部片			5	4	0	9
		胴部他破片			11	10	0	21
	甕	口縁部片			1	0	0	1
		底部片			0	0	0	0
		胴部他破片			13	9	9	31
	鉢				1	0	0	1
	器種不明				9	0	0	9
計					105	39	9	153
中世土師器	坏・皿	白色系	底径4cm前後	高台なし	57	0	0	57
				高台あり	0	0	0	0
			底径5cm前後	高台なし	87	0	0	87
				高台あり	7	0	0	7
			底径6cm以上	高台なし	50	0	0	50
				高台あり	17	0	0	17
			口縁部・体部		49	1	0	50
		計			267	1	0	268
		灰・褐色系	底径4cm前後	高台なし	13	0	0	13
				高台あり	0	0	0	0
			底径5cm前後	高台なし	36	11	0	47
				高台あり	0	0	0	0
			底径6cm以上	高台なし	0	0	0	0
				高台あり	3	0	0	3
			口縁部・体部		73	6	0	79
		計			125	17	0	142
		茶色系	底部		26	49	0	75
			口縁部・体部		47	17	1	65
		計			73	66	1	140
計					465	84	1	550
瓦質土器					1	0	0	1
計					1	0	0	1
白磁	碗				2	0	0	2
計					2	0	0	2
越州窯系青磁	碗				1	0	0	1
計					1	0	0	1
龍泉窯系青磁	碗				1	0	0	1
計					1	0	0	1
備前系	擂鉢				1	0	0	1
計					1	0	0	1
肥前系	陶器				23	12	5	40
	磁器				8	1	0	9
計					31	13	5	49
石見系	丸物				32	12	2	46
	瓦				3	0	0	3
	焼台				1	2	0	3
計					36	14	2	52
古瓦	丸瓦				0	1	0	1
計					0	1	0	1
石器	砥石				1	0	0	1
	不明石器				1	0	0	1
計					2	0	0	2
木器・製品	柱根				0	3	0	3
計					0	3	0	3
土錘	管状				1	5	0	6
計					1	5	0	6
土製品	土製支脚				1	0	0	1
	竈				0	3	0	3
計					1	3	0	4
不明品					3	0	0	3
計					3	0	0	3
総　計					733	234	17	984



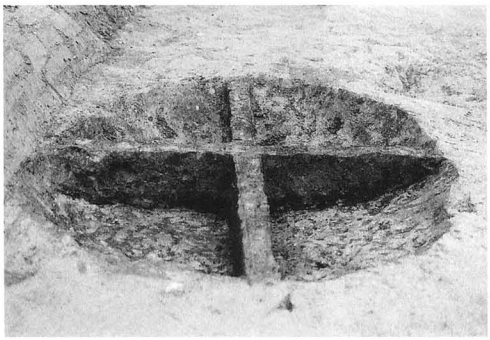
恵良遺跡遠景（西から）

恵良遺跡遠景（西から）



恵良遺跡１区下層遺構（北から）

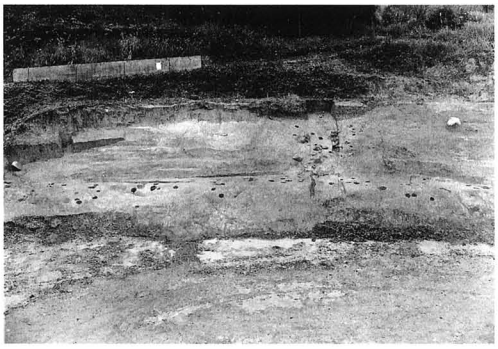
恵良遺跡１区上層遺構（南から）



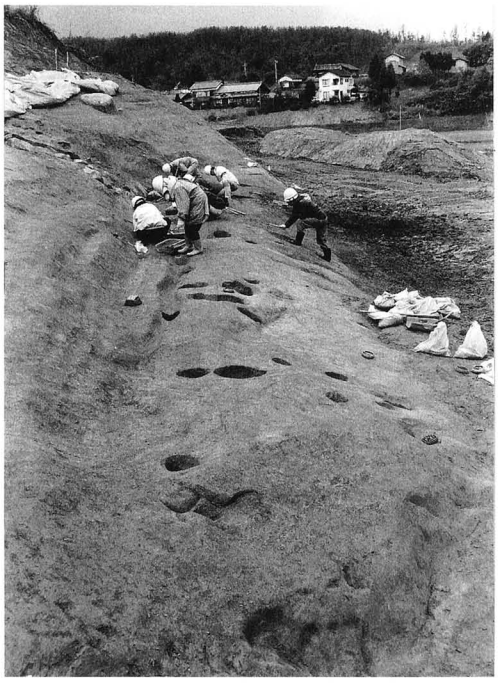
恵良遺跡１区上層　ＳＫ01

恵良遺跡１区下層遺構（南から）

恵良遺跡下層　ＳＢ11（南から）

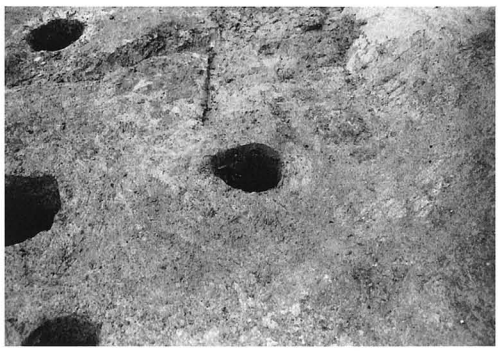


恵良遺跡２区完掘状況
（南から）

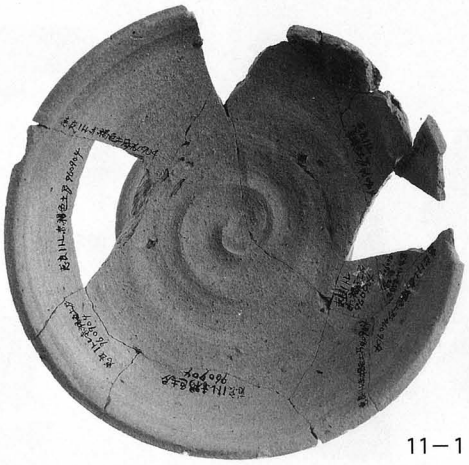


恵良遺跡２区加工段発掘状況
（北から）

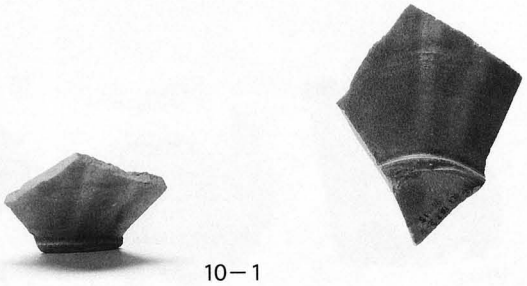
恵良遺跡２区加工段上西側遺構群
中の建材（第12図８）を残す柱穴
検出状況（西から）



同上

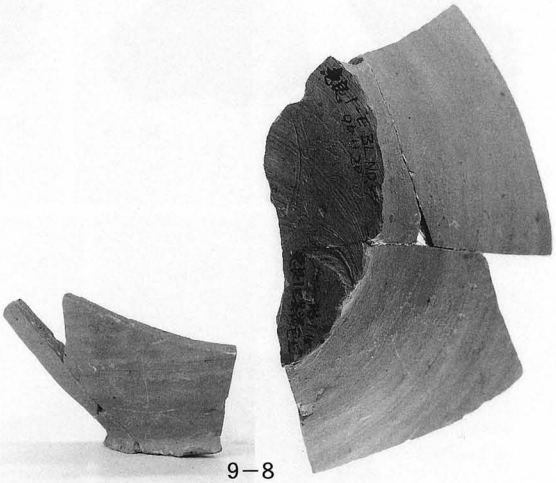


11－1



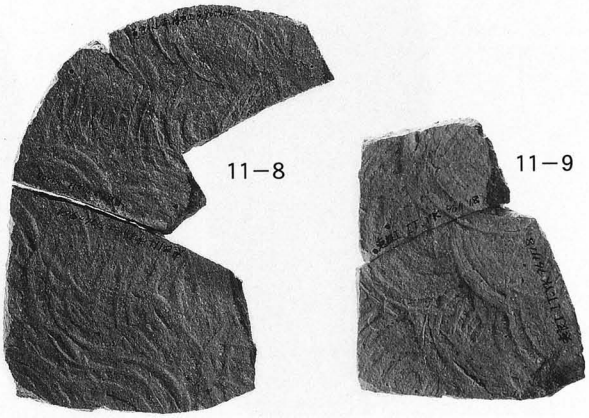
10－1

11－1



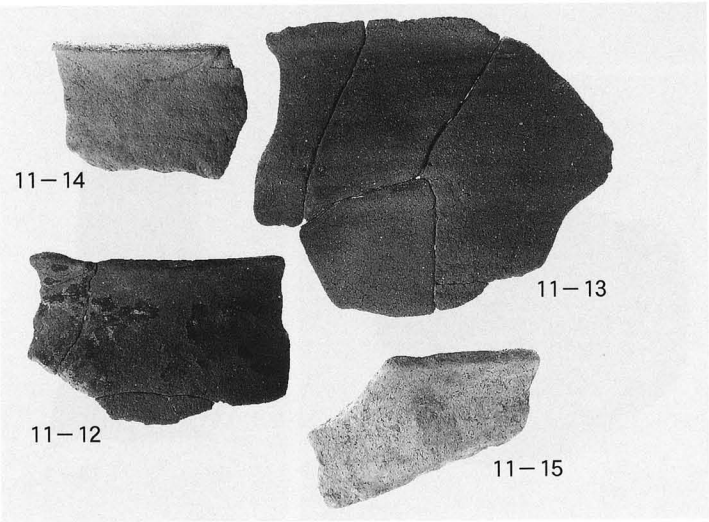
9－8

11－1



11－8

11－9



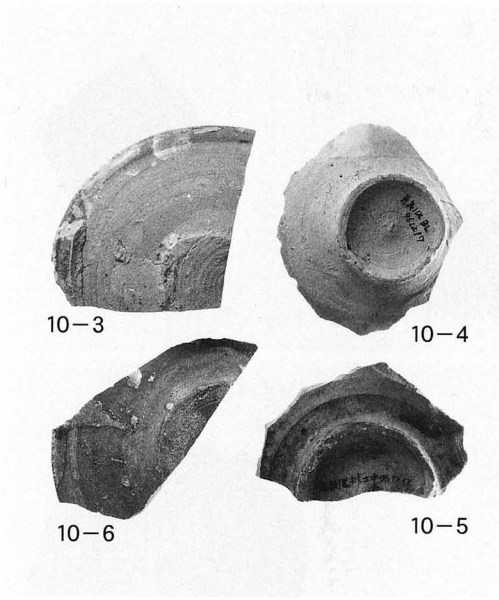
11－14

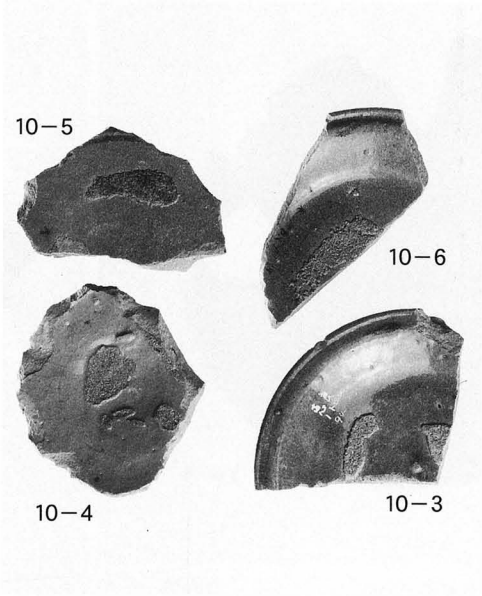
11－13

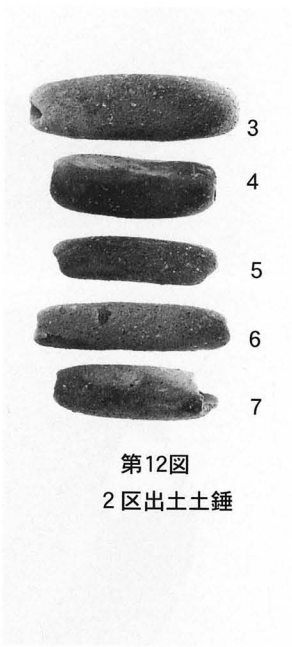
11－12

11－15

11－2







第12図
２区出土土錘

第4章　堂々炭窯跡

第１節　調査前の状況と経過

調査前の状況（第14図）

堂々炭窯跡は江津市波子町イ2220－８他に所在する。遺跡は標高76mの大平山の西側を流れ日本海へと注ぐ曲川を西に望む、標高56.6mの丘陵上と西向きの丘陵斜面に位置している。江津道路建設に先立ち行われた分布調査で確認されたもので、尾根筋と西向き斜面を堂々遺跡、斜面に築かれた炭窯跡を堂々窯跡、曲川に向けて突き出た尾根上を堂々古墳と呼称した。堂々遺跡の西向き斜面は畑として耕作されていたようであり谷の両側に段が認められた。堂々炭窯跡はまだ完全に埋没しておらず窪地になっていた。

調査の経緯

調査は平成11年６月21日から堂々遺跡のトレンチ調査と古墳・炭窯跡周辺の測量調査を平行して進めた。堂々遺跡では８か所のトレンチを設定した。調査の結果、尾根上の第３トレンチから時期不明の焼土面が確認されたのみであった。堂々古墳も盛土及び人為的加工の痕跡は確認できず、古墳ではないものと判断した。この結果を受けて本調査は炭窯跡とその周辺のみ実施することとした。本調査は７月29日まで行った。

第２節　調査の結果

炭窯跡１基と付随する土坑２基、道路跡１を検出した。遺物は周辺から近代以降の所産と思われる陶磁器と弥生土器片１点が出土した。炭窯跡については次の通りである。

立地（第15・16図、写真図版５）　西向きの丘陵斜面に直交するように築かれている。炭窯跡のある場所の標高は29.8mで尾根上との比高差は約26mである。ちょうどこの辺りには古道が通っている。古道は等高線と平行するように東西方向に延びているが、炭窯跡のところでは北側に曲がっている。この古道と炭窯跡との前後関係は不明である。

土層堆積状況（第17・18図、写真図版７）　窯跡は完全に埋没しておらず窪地になっていたため、周辺から落ち込んだり意図的に投棄された雑木や植物の葉が厚く堆積していた。これを除去すると周辺から流れ込んだと思われる黄～灰黄色粘質土がわずかに見られただけで、そのすぐ下からは焼土や窯の天井部材（コウ）が検出された。窯の床面には数cmの薄い黒色粉炭が広がっていた。また中軸線左奥の側壁の一部は、内側に向けて倒れ込むように崩れているのが横断土層ａｂラインで確認された。この周辺からは崩れた地山がブロック状になって出土している。

構造・規模（第17・18図、写真図版６）　半地下式構造の炭窯跡である。主軸はN-42.5°-Eで、等高線に対して直交するよう掘り込まれている。奥壁から焚口部までの全長は4.2mで、最大幅は3.05mである。奥壁の高さは最も良く残っているところで1.15mである。平面は琵琶形を呈するが、奥壁に向かって右側の側壁と奥壁のコーナー付近が外に張り出すため、左右非対称になっている。点火室（燃焼室）と炭化室（焼成室）は明確には区分されていない。しかし焚口から奥に70～90cm

までの両側の側壁には石が立て並べてあり、焼けも弱いことから、この空間が点火室（燃焼室）に相当するものと思われる。天井部は既に崩落していたが、窯内部に熱を受けた粘土塊が堆積していたことから、コウ掛けされていたことが分かる。床面の傾斜は焚口から奥へ２m辺りまでは、焚口に向けて下がり、そこから奥壁側はほぼ水平になっている。

壁・床面の被熱状況（第17・18図、写真図版６）

奥壁は床面から60cmの高さまでは表面に黒いタールが付着し硬く焼き締まっている。床面と側壁は焚口から約２m奥壁側までは焼けが弱く酸化色を呈し、そこから奥は表面にタールが付着し硬く焼き締まっていた。

溝（第17・18図） 窯の床面中軸線上に造られている。窯内部の排水を目的として築かれたのであろう。溝は上縁で測ると幅20～30cmである。断面は浅い皿状を呈し、焚き口付近ではV字状になる。底面は焚き口側に向けて傾斜しており、最も深い焚き口のところで深さは10cmである。溝内には黒色粉炭が堆積していた。

煙道（第17・18図、写真図版９上） 煙道は奥壁の中央からやや左側に１か所設けられていた。排煙口の幅は30cm、排煙口から煙道口までの高さは1.19mである。排煙口から約34°の傾きで立ち上がった後、傾斜を変え、約79°の傾きで煙道口へと通じる。煙道口は崩落しており規模、構造とも不明である。煙道の内側の障子と称される部分には閉塞のための痕跡は残されていなかった。しかし煙道入り口の基底面に握り拳大のレキが数個置かれ、煙道から約1.0m南の粉炭層直上で、15～20cm角、厚さ3.0mの板石が４枚まとまって出土している。このことから煙道前面は板石を積み粘土で目張りしてていたものと推察される。煙道は窯奥壁を仕上げた後に奥に掘りこんで左右の壁を造り、前面に石を積んで粘土で目張りする、という手順で造られたのであろう。また、煙道の前面の焚き口側は幅83cm×51cmの土坑状に落ち込んでいる。土坑の底面は煙道側に傾斜している。窯内の排煙を調節するためと思われる。

焚口（第17・18図、写真図版８、10上） 焚口の幅は58cm、高さは現状で47cmである。両袖には一抱えもある石が据えられていた。袖石は床面に10～20cm程度埋め込み、更に裏側を粘土でしっかりと裏込めしていた。この周りからも窯口を構成していたと思われる、握り拳大～人頭大程度の石が多く出土している。また焚き口の床面から37cm上面では50×28cm、厚さ19cmの大形の石が出土した。おそらく天井に架けてあったものが落ち込んだのであろう。

作業場（第17・18図、写真図版８下） 焚き口前面には、窯の掘削によって発生した土などを押し流して埋め立て、作業場を造っている。幅は現状では2.0mほどしか無いが、谷側は流出しているものと考えられる。

土坑（第19図、写真図版10中・下） 焚口の左右には、作業面の造成土に掘り込んで土坑が築かれている。SK01は平面が楕円形。長径83cm、短径50cm、深さ10cm前後の浅い皿状の土坑である。SK02は長径166cm、短径85～94cmの大形土坑である。底面は焚き口に近い方が深くなっており、46cmである。二つの土坑とも、土坑内の埋土は黒色粉炭土の単一層であった。また、SK02の南から窯の煙突口方向へと登る幅0.55～1.20mの道が延びている。炭窯の煙道口を覗きに行く際などに使用する作業道であろう。

炭窯の築造規格 窯の上縁で全長が１丈４尺、幅１丈で造られている。焚口の幅は２尺、煙道の幅は１尺である。

炭窯の構造と所産年代（第20･21図、表７） この炭窯跡の時期を示す出土品は無く時代を特定することは困難である。地元での聞き取り調査の結果からは、戦後のものではないことは判明した。しかしながら炭窯跡が完全に埋没していなかったことからもみても、大きく時代を遡るものではないことも予想された。

まずは堂々炭窯跡と石見地方で調査された中～近世の炭窯跡の調査事例とを比較してみたい。

堂々炭窯跡の特徴としては次の点があげられる。

①点火室（燃焼室）と炭化室（焼成室）の区分がない

②平面形が琵琶形を呈する

③煙道は煙道口から基底面まで奥壁を掘り込んで造っている。

これと共通の構造をもつ炭窯跡には米屋山遺跡（第21図７）、山ノ内古墳群（同８）、父ケ平遺跡（同９）がある。ただし煙道の数は大形の窯である米屋山遺跡、山ノ内古墳群は２つで、それより小形の父ケ平遺跡、堂々炭窯跡は１つになっている。このほか重富遺跡Ⅳ区炭窯跡（第20図５）、北ケ迫遺跡炭窯跡（第21図11）は平面形は異なるものの、大まかには近いものといえよう。これらは近代以降に導入される改良窯に近い構造をもっている。

これに対して14～15世紀の製鉄遺構に伴うタタラ山第１遺跡の炭窯跡（第20図１～３）は次のような特徴をもっている。

①点火室（燃焼室）と炭化室（焼成室）が明確に区分される

②平面形が縦に長く「とっくり・羽子板」状を呈する

③煙道がトンネル状のくり貫きである

同様の構造をもつ炭窯跡には十文セド遺跡（第20図４）がある。さらに隣接する広島県平家ヶ城跡でも多数の炭窯跡が調査されているが、タタラ山第１遺跡と多くの共通点をもつことが指摘され、14世紀前後の所産年代が与えられている。

生産される木炭の種類や用途、炭窯跡の規模も考慮しなければいけないが、上記の構造の違いは時期差として認識して良いものといえよう。新段階の炭窯跡の絶対年代だが、自然科学分析の結果から18世紀後半代を中心とする時期と考えられている。本遺跡でも放射性炭素年代測定を実施し、補正Ｃ14年代値測定値90±60B.P（1950A.Dを０年とする）が得られている。以上をふまえて堂々炭窯跡の時期を19世紀代のものとしておきたい。この窯で作られた木炭の種類と用途だが、床面が焚口に向けて傾斜していることや、焚口の両側に土坑をもつことから「白炭」が生産されたものと考えている。この点については今後、資料の増加を待って改めて検討したい。

第３節　小　結

今回の調査では近世末～近代初めの炭窯跡１基を確認した。当該期の木炭生産に関わる調査例は非常に少なく新たに事例を加えることができたことは意義深いものといえる。今後は生産された木炭の用途と炭窯跡の構造などについて検討していく必要があるだろう。

昭和30年代の石油・ガスなどの新たな熱資源の普及により木炭生産は衰退していった。
しかし昨今の環境問題への関心の高まりによって、再び木炭生産が注目されるようになっている。生涯学習事業などで炭焼き体験が行われる事例も増えているようである。人々と木炭との関わりを

考える上でも生産遺跡としての炭窯跡の考古学的調査が意味をもってくるのではないかと思われる。

なお、今回の調査に従事した発掘作業員の方々からは炭窯跡について多くの御教示を頂いた。記して御礼申し上げる。

註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『平家ヶ城跡発掘調査報告書』１９９７

参考文献

島根県木炭史編集委員会『島根の木炭産業史』１９８２

朱通祥男「寄居町三品の白炭技術－古老が語る昭和初期の炭窯の１日－」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』１１　１９８９

杉原清一『瀧ノ谷大畝遺跡（たたら跡・炭窯跡）』島根県横田町教育委員会　１９９６

そのほかの石見地方の遺跡の報告書は表と文献一覧を参照されたい。

付編　堂々炭窯跡出土木炭の放射性炭素年代測定

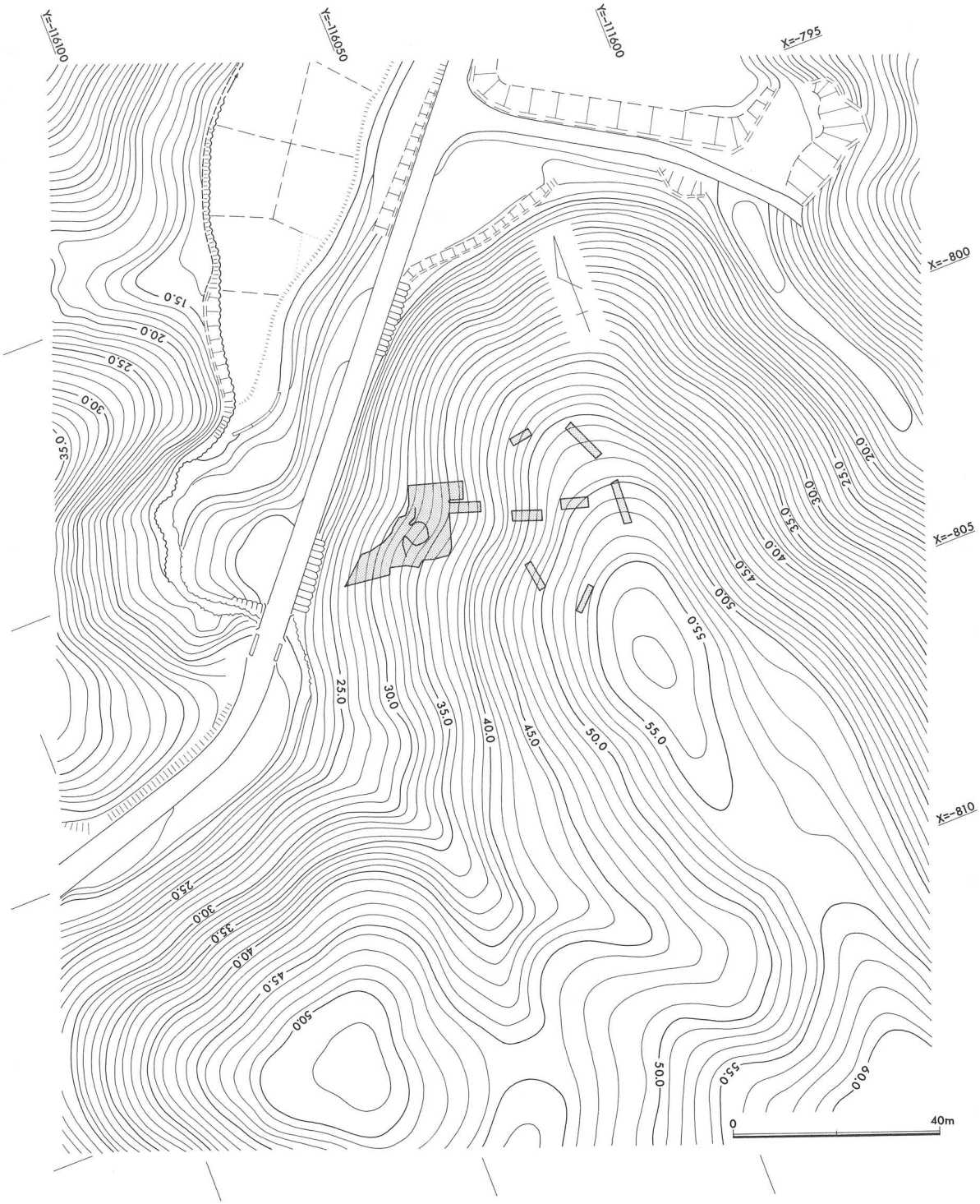
放射性炭素年代測定分析は（株）地球科学研究所に委託して行った。試料などの詳細は以下の通りである。

試料データ	Ｃ１４年代（ｙＢＰ）	σ１３Ｃ（ｐｅｒｍｉｌ）	補正Ｃ１４年代（ｙＢＰ）(Convertional C14age)
Beta-133825	１３０±６０	－２７．４	９０±６０

試料名（12062）　DK990714

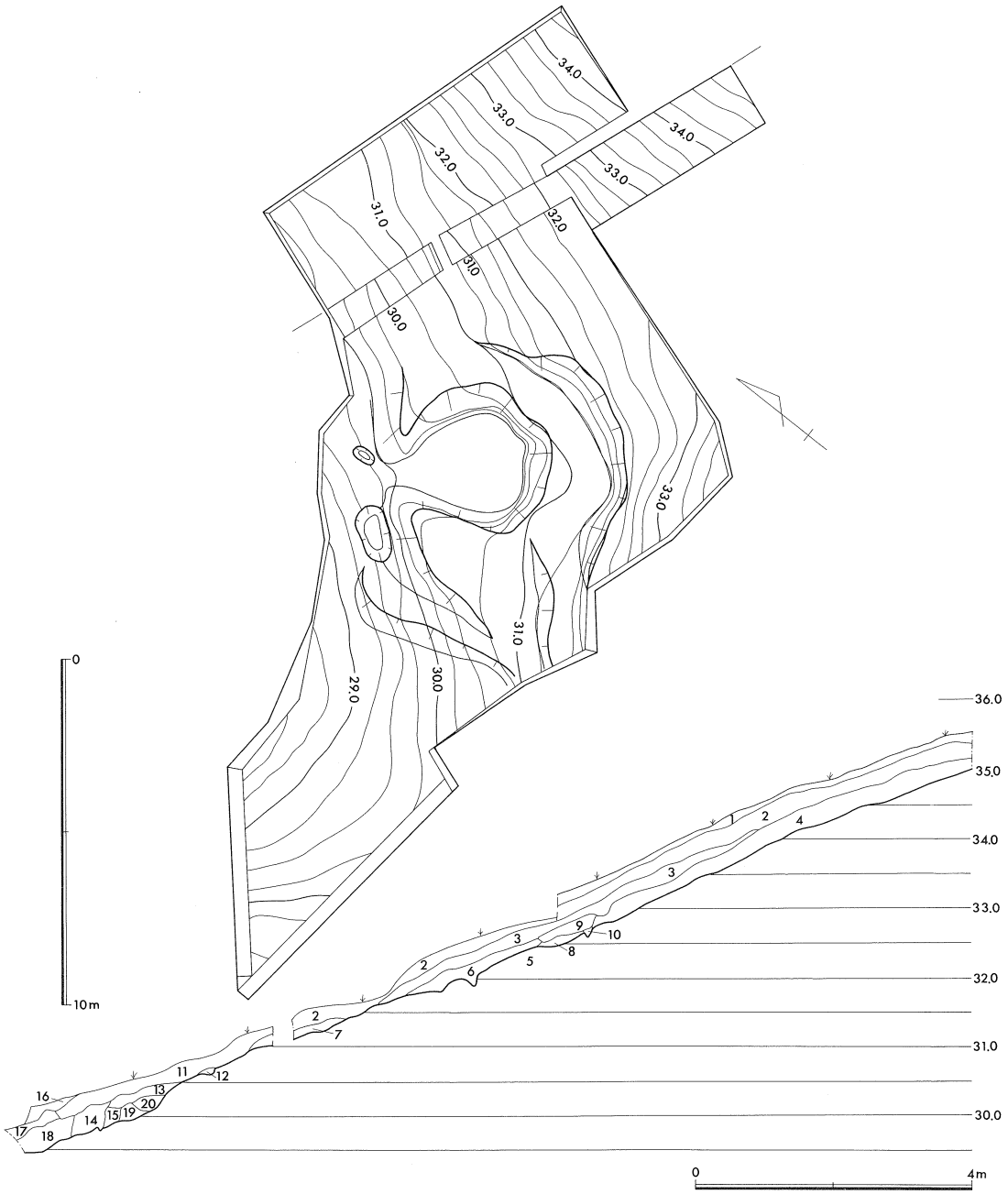
測定方法、期間　radiometric-standard

試料種、前処理　charred material　acid-alkail-acid



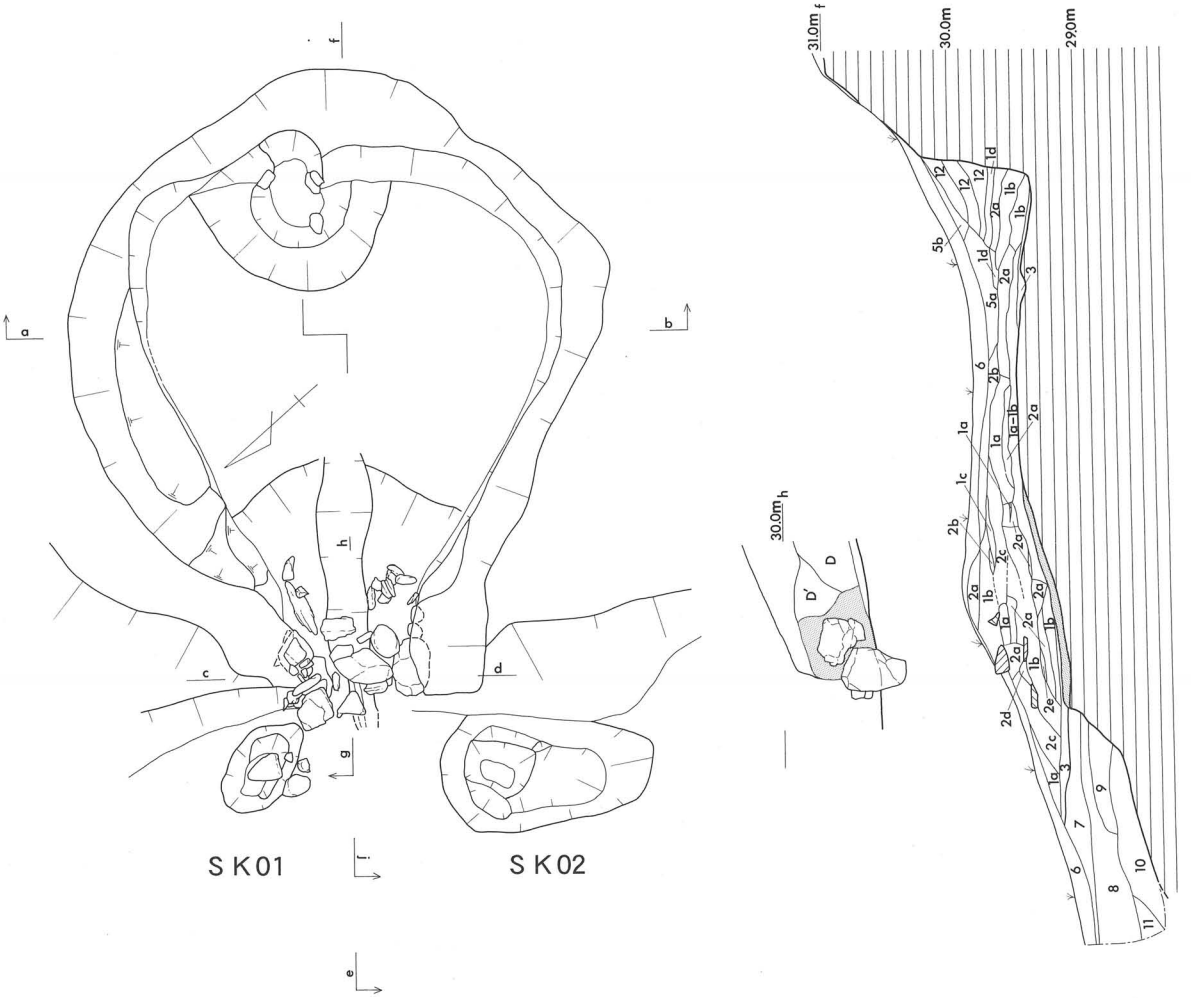
第14図　堂々炭窯跡周辺の地形（S＝1/1200　1mコンター）

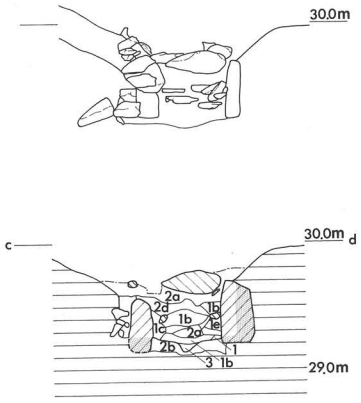
第15図　堂々炭窯跡調査前地形測量図（S＝1/200　25cmコンター）



1　腐葉土
2　灰黄色土
3　暗灰黄色土（木炭粉混ざる）
4　灰黄色土(地山ブロック混ざる　粘性あり)
5　はだいろ土（地山）
6　灰黄色土（木炭粉混ざる　3より淡い）
7　灰黄色土
8　灰黄色土（やや汚れる）
9　灰黄色土(地山ブロック混ざる　粘性あり)
10　灰黄色土
11　灰黄色土（2より淡い）
12　11が少し濁る
13～15　暗灰黄色土
16～19　灰黄色土
20　暗灰黄色土

第16図　堂々炭窯跡調査終了後地形測量図（測量図はS＝1/200　25cmコンター、土層図はS＝1/100）



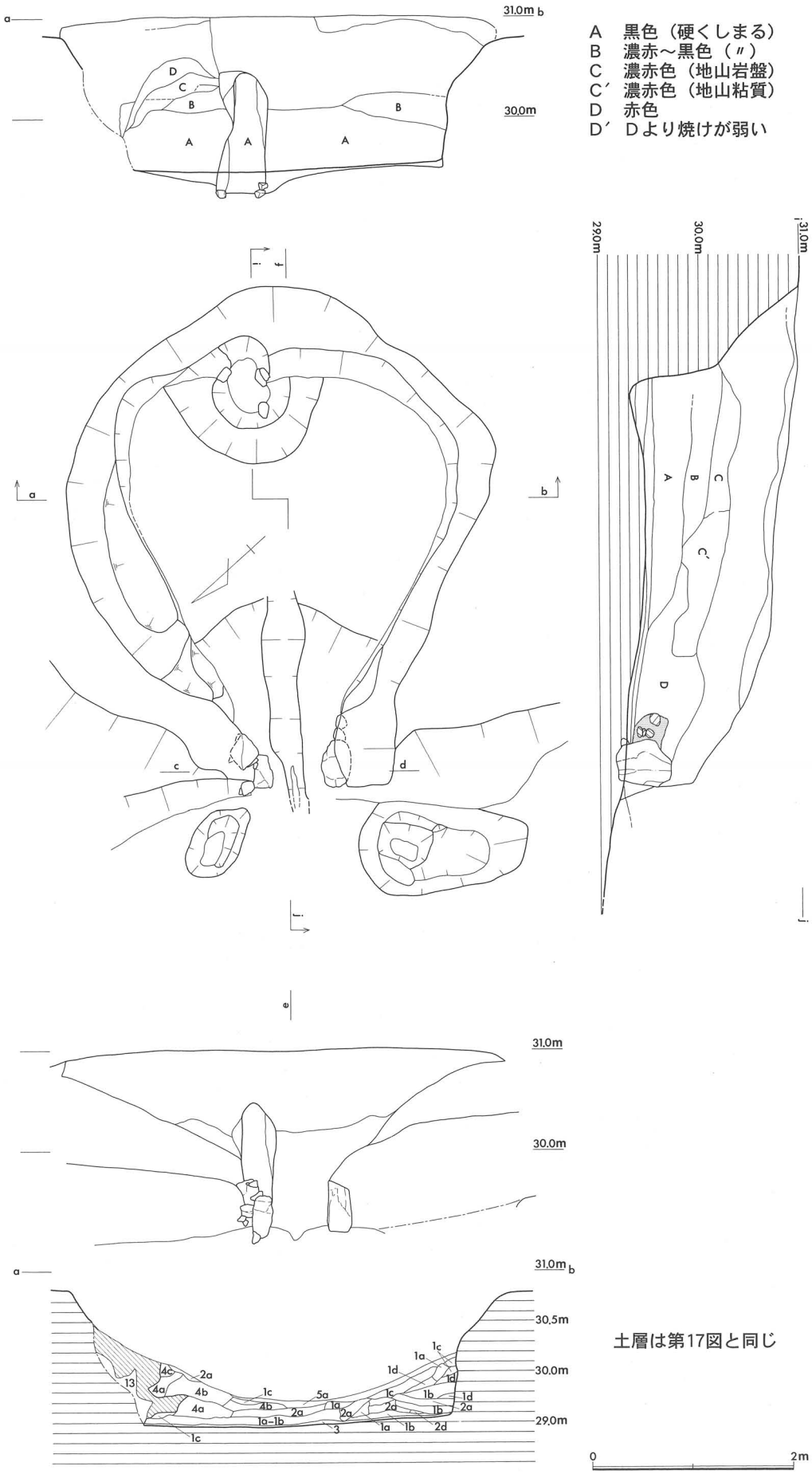


点トーンは貼り土（黄色粘質土）

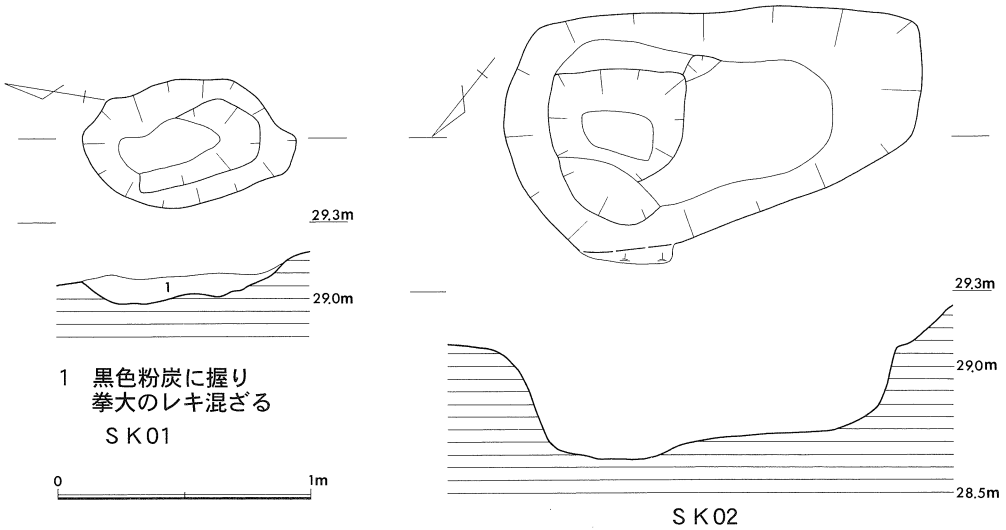
1a　赤色焼土
1b　1a＋レキ・コウ土・粉炭
1c　濃赤～チョコレート色焼土
1d　チョコレート色レキ混じり焼土＋粉炭
1e　チョコレート色レキ混じり土＋粉炭
2a　黄色粘質土
2b　濁黄色粘質土
2c　2a＋レキ・焼土
2d　黄色粘質土＋焼土
2e　黄～赤色コウ土
3　黒色粉炭
4a～c　コウ土塊
5a　黄～灰黄色粘質土
5b　5aにレキ混ざる
6　未分解植物層
7　黄土色土
8　黄土色土
9　灰黄色土
10　灰黄色土（やわらかい）
11　暗黄土色土
12　チョコレート（色レキ＋粉炭）
13　地山
斜線は崩落した側壁

0　2m

第17図　堂々炭窯実測図（S＝1/60）



第18図　堂々炭窯実測図（S＝1/60）



第19図　堂々炭窯跡土坑実測図（Ｓ＝１/30）

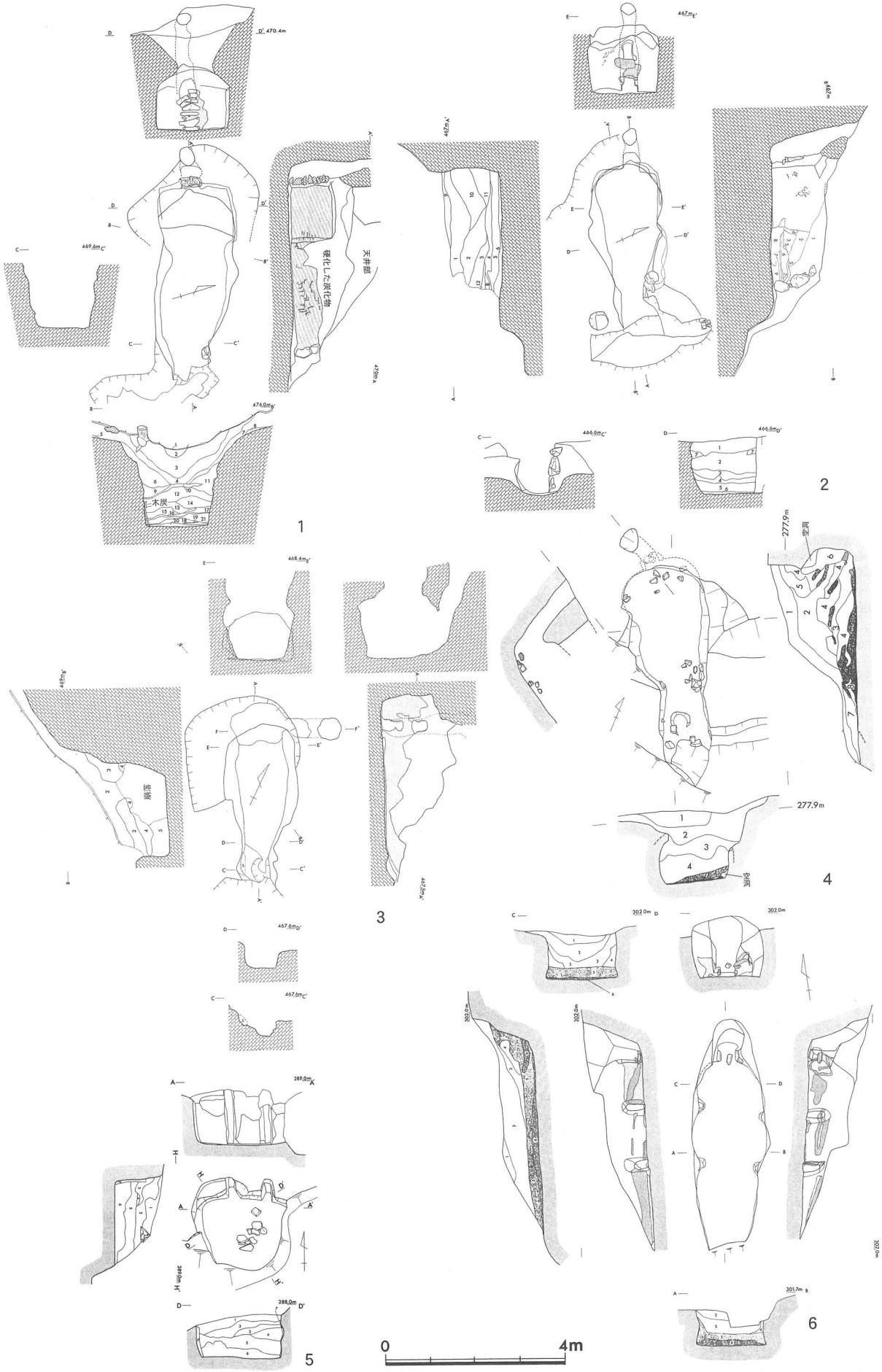
表７　石見地方で発掘調査された炭窯跡

	遺跡名	所在地	全長×最大幅 m	年代		
				熱残留磁気	放射性炭素	熱ルミネッセンス
0	堂々炭窯跡	江津市波子町	4.2×3.05		90±60yB.P	
1	タタラ山第１遺跡１号炭窯跡	瑞穂町市木	3.75×1.40	1410±15・1800±25	―	
2	タタラ山第１遺跡２号炭窯跡	〃	2.93×1.40	1420±25・1730±25	530±80・510±75yB.P	
3	タタラ山第１遺跡３号炭窯跡	〃	3.24×1.20	1410±10・1730±25	510±70・500±70yB.P	
4	十文セド遺跡	旭町丸原	4.1×1.75	1390±15・1770±25		
5	重富遺跡Ⅳ区炭窯跡	旭町重富	2.3～2.6×？	1875±60		
6	重富遺跡Ⅰ区炭窯跡	〃	５×1.7		210±7yB.P	
7	米屋山遺跡	瑞穂町市木	5.7×3.5	1370±10・1750±30	1780±70	268±29、269±81B.P
8	山ノ内遺跡	旭町木田・山ノ内	6.8×3.7			
9	父ヶ平遺跡	石見町矢上	3.3×2.0以上	1380±15・1750±25	190±75yB.P	
10	タタラ山第２遺跡４号炭窯跡	瑞穂町市木	4.64×2.32			
11	北ケ迫遺跡	益田市内田町	3.6×1.8			

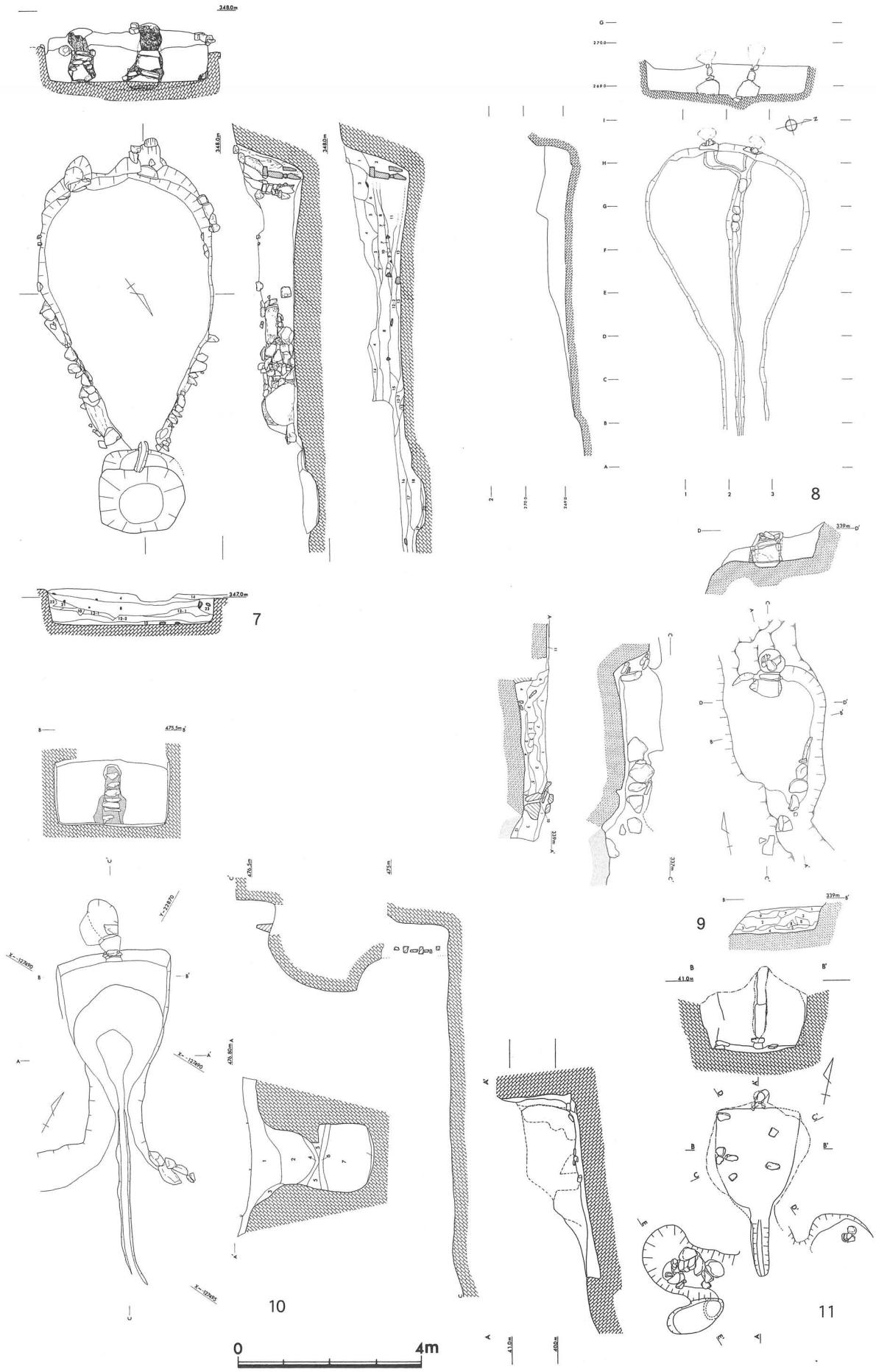
文献

0　島根県教育委員会「堂々炭窯跡」『恵良遺跡　堂々炭窯跡　上条遺跡　水戸（三戸）神社跡（上条古墳）　立女遺跡』２００１
１～３　島根県教育委員会『父ヶ平遺跡・中ノ原遺跡・タタラ山第１・第２遺跡』１９９３
4　島根県教育委員会「十文セド遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ　１９８５
５～６　島根県教育委員会「重富遺跡」『中国横断自動車道広島浜田線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ　１９９２
7　島根県教育委員会「米屋山遺跡」『主要地方道浜田八重可部線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』１９９１
8　旭町教育委員会『県営農地開発事業（梨園造成）に伴う山ノ内２８号墳発掘調査報告書』１９９２
９～10　島根県教育委員会『父ヶ平遺跡・中ノ原遺跡・タタラ山第１・第２遺跡』１９９３
11　島根県教育委員会１９８８年調査

炭窯跡は幕末～明治初頭の石見焼窯跡の物原の下から検出されている。



第20図　石見地方で調査された炭窯跡(1)（S＝1/120）



第21図　石見地方で調査された炭窯跡(2)（S＝1/120）

調査風景

調査終了後

写真図版6

炭　窯　跡

炭窯跡半裁状況（焚き口から）

炭窯跡横断土層

焚き口横断土層

焚き口～作業場縦断土層

煙　道（正面から）

炭窯跡完掘後（焚き口から）

焚き口の袖石

ＳＫ01半裁状況

ＳＫ02完掘後

第５章　上条遺跡

第１節　調査に至る経緯と経過

建設省中国地方建設局により一般国道９号江津道路の建設が計画され、平成元年５月30日付けで道路建設予定地内の文化財の有無に照会があった。このとき添付されていた図面のルート予定地内に銅鐸出土地である上条遺跡が含まれていたため、島根県教育委員会文化課（当時）は建設省浜田工事事務所と平成２年１月に協議を行った[(1)]。文化課では本遺跡が銅鐸文化圏の西端を示すものとして注目されている重要な遺跡であり、ルートからはずすように申し入れた。これに対して建設省からはルート変更は可能であり遺跡をはずして計画するとの回答を得た。この協議により上条遺跡をはずしてルートは当初予定よりも北側にふったもので設計されていた。

その後は具体的な動きはなかったが、平成９年７月に行った浜田工事事務所との協議で初めて遺跡周辺の詳細な工事図面が示された。これをもとに９月に現地踏査を行った結果、図面と実際の銅鐸出土地点とがずれていることが判明したため、急遽、10月に浜田工事事務所と協議した。この場で建設省から下府川以西のルートが変更となり、上条遺跡周辺も設計変更が必要の旨説明があり変更案が提示された。この図面ではルートは上条遺跡のある範囲は当初予定から南側にふれており、さらに銅鐸出土地の谷も盛り土によって埋められることになっていた。島根県教育委員会文化財課では浜田工事事務所に対して、出土地と周辺の景観に配慮して、銅鐸出土地の北の尾根筋から南側一帯を工事からはずすように設計変更を申し入れた。同年12月に浜田工事事務所からは工法を変更した図面が提示されたが、文化財課では銅鐸出土地を特定するために道路用地外も含めたトレンチ調査を行い、その結果をふまえてあらためて取り扱いについて協議することとした。

平成10年度に島根県教育委員会と浜田市教育委員会により銅鐸出土地点特定のためのトレンチ調査を実施することとした。調査は平成10年12月３日から平成11年１月14日まで行い、銅鐸出土地が道路用地の隣接地に当たることが特定された。この結果をうけて島根県教育委員会は建設省に対して銅鐸出土地は道路用地外にあたるものの、出土地周辺の地形の保全を図るよう再度要望した。また道路用地内も銅鐸出土地の隣接地にあたることから平成11年度に全面調査が必要であることを説明した。平成11年４月になり建設省から銅鐸出土地のある平坦面の崖を完全に残すよう変更された図面が示された。島根県教育委員会では、この変更案を了承し、道路用地内の1000㎡について平成11年４月26日から６月30日まで本調査を行った。

註

（１）分布調査は平成２年１月に実施し、上条遺跡を含めて16か所の遺跡が存在することを確認し、平成２年３月９日付けで回答した。

第22図　上条遺跡・水戸（三戸）神社跡位置図（S＝1/2000、1mコンター）

第２節　平成10年度銅鐸埋納地確認調査について

かつての銅鐸出土地付近には「銅鐸出土地」の標柱が立てられている。しかし、正確な位置は特定されていなかったため、平成10年度は島根県教育委員会と浜田市教育委員会により道路用地隣接地の確認調査を実施することとなった。

銅鐸発見の経緯

銅鐸は大正時代末に発見され、昭和初期には高橋直一氏の略報の後に直良信夫氏の現地踏査と発見者への聞き取りが行われている。[(1)] 直良論文により簡略にまとめると、まず大正13年に1号鐸が壁土の採取に伴い発見された。発見当時はほぼ完全であったが放置されたため、鈕と舞の基部、鐸身の一部が残るのみとなった。翌大正14年には1号鐸出土地より約20～30cm離れた地点で2号鐸がほぼ完全な状態で発見された。いずれも発見時には鈕を上にして直立していたという。出土地は那賀郡上府村一ノ界引越イ2214番地4である。

銅鐸は現在東京国立博物館にあり、「島根県浜田市上府町城山（石見国那賀郡上府村字城山通称鍛冶床）出土品」として紹介されている。[(2)] 1号鐸は舞長10cm・現存部高さ4.7cmで、外縁付鈕2式又は扁平鈕1式である。2号鐸は総高27.3cm・鐸身22.3cmを測り、４区画袈裟襷文を有す。扁平鈕1式である。

発見当初から出土地や遺跡名に混乱が見られ、これまでに「上府遺跡」「城山遺跡」「上條遺跡」とされることがあった。本報告では遺跡地図により「上条遺跡」と統一して報告を行う。

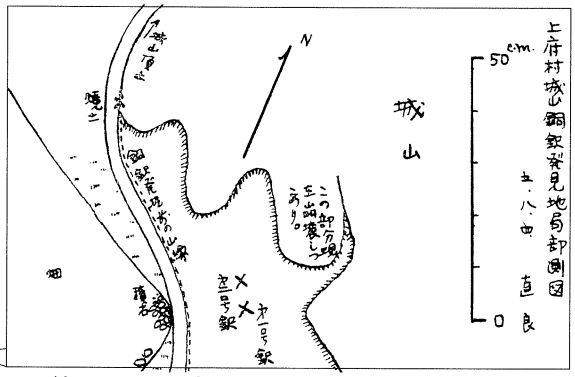
試堀調査の概要

調査は平成10年12月３日から平成11年１月14日まで実施した。調査地は通称「城山（じょうやま）」といわれる最高標高91.8mの平坦地から南西方向に伸びる丘陵の南側緩斜面である。なお、山城（八反原城）はこの丘陵から北へ伸びる尾根上にあり、八反原城や銅鐸出土地を含めた山全体を「城山」と呼んでいるようである。平坦地からは南に高平山（標高420m）・南西に三階山（標高378.9m）を望み、下府の平野はほとんど見えない。緩斜面は標高約66～79mを測り、北東方向に入る狭い谷奥である。谷の出口は三群変成岩が露頭する急斜面である。調査前は見通しの悪い竹藪であった。切図による番地調査では直良論文で出土地とされたイ2214番地4は分筆により現存しなかった。しかし、伐採後の地形観察で採土による崖面が確認でき、直良論文の出土地略図に近い位置が特定できた。標柱の北側約５ｍ（Ｔ１）である。なお、直良論文にある道脇の積石・焼石は確認出来なかった。畑は現在は杉が植林されている辺り（Ｔ２～４）と考えられる。山道は現在看板の立てられている谷から上り、出土地の横を過ぎ尾根上に出る。尾根上の道は大きく窪んでおり、近年まで人が通行したようである。地元での聞き取りによると銅鐸発見者の岡田氏だけでなく、複数の世帯の人が壁用の土（明赤褐色粘質土）の採土を行なっていたらしい。採土は谷底部から始め、昭和30年頃には上方の道に近い位置（Ｔ８）で行なわれていたとのことである。

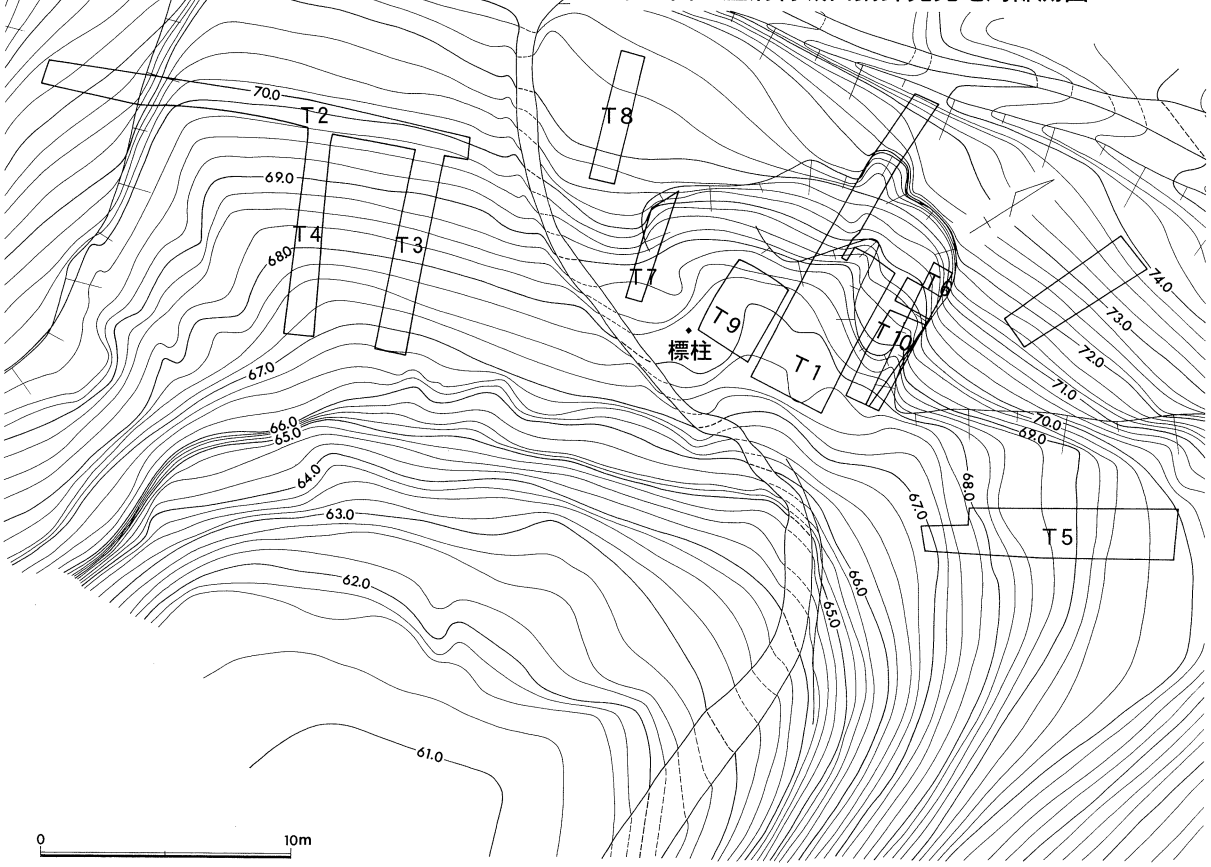
採土跡と周辺に調査区を設定して調査を開始した。しかし、採土跡は予想以上に厚く撹乱土が堆積しており、土捨て場の不足も伴い調査は難行した。最終的に12の調査区・約109㎡の調査を行った。遺跡の層位は地山として岩質に近い暗黄褐色土・黄褐色粘質土及び明赤褐色粘質土（壁土）がある。この山は三群変成岩が分布し、強い風化作用の結果赤色粘土化したと推定される。後述のSK1での地山は、三群変成岩中に貫入した安山岩質の岩脈が風化作用を受けたと考えられる。[(3)] 採土地点では明

赤褐色粘質土（壁土）及び黄褐色粘質土は削られ、ほとんどが旧表土と考えられる暗灰褐色粘質土ブロックが混じる状態で二次堆積していた。他の調査区では明赤褐色粘質土は確認できなかったことから、明赤褐色粘質土（壁土）の露頭した場所で集中的に採土を行ったと考えられる。銅鐸の埋納坑も明赤褐色粘質土面に掘り込まれていた可能性がある。

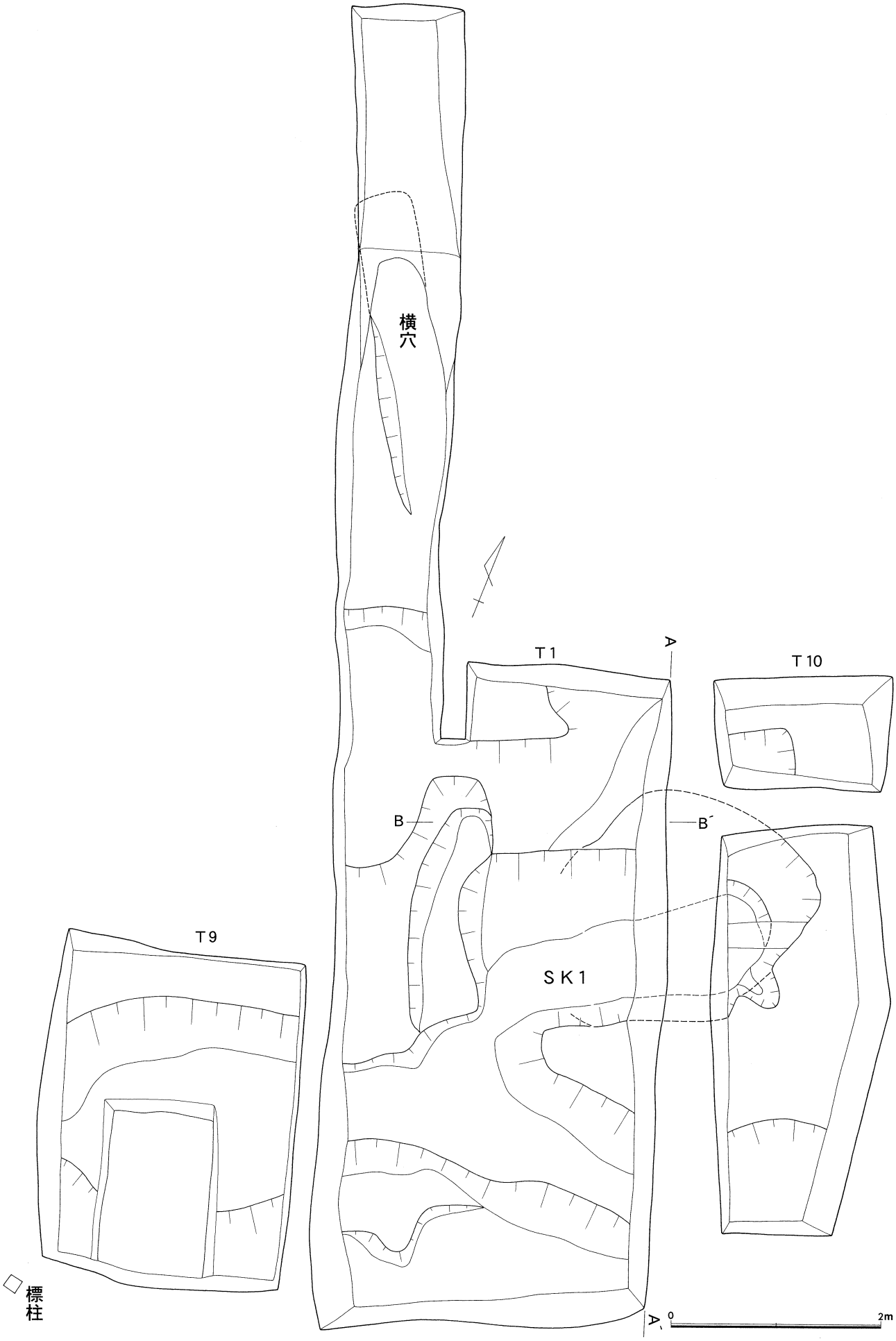
Ｔ１　銅鐸出土推定地の採土跡を南北に縦断するように１ｍ×13mの調査区を設定し、北東側の平坦地を２ｍ×６ｍ拡張した。地山面は岩質の暗黄褐色土で、段状に削られていた。これは基盤の三郡変成岩中に貫入した安山岩質の岩脈が風化作用を受けたものと考えられる。本来上層にあったと考えられる明赤褐色粘質土（壁土）及び黄褐色粘質土は削られ、暗灰褐色粘質土（旧表土か）などが混じる状態で二次堆積していた。北側の崖面が一段奥まった地点では明赤褐色粘質土（壁土）を掘り窪めた幅約75cm・高さ１ｍ・奥行70cmの横穴が見つかった。しまりのわるい明赤褐色粘質土



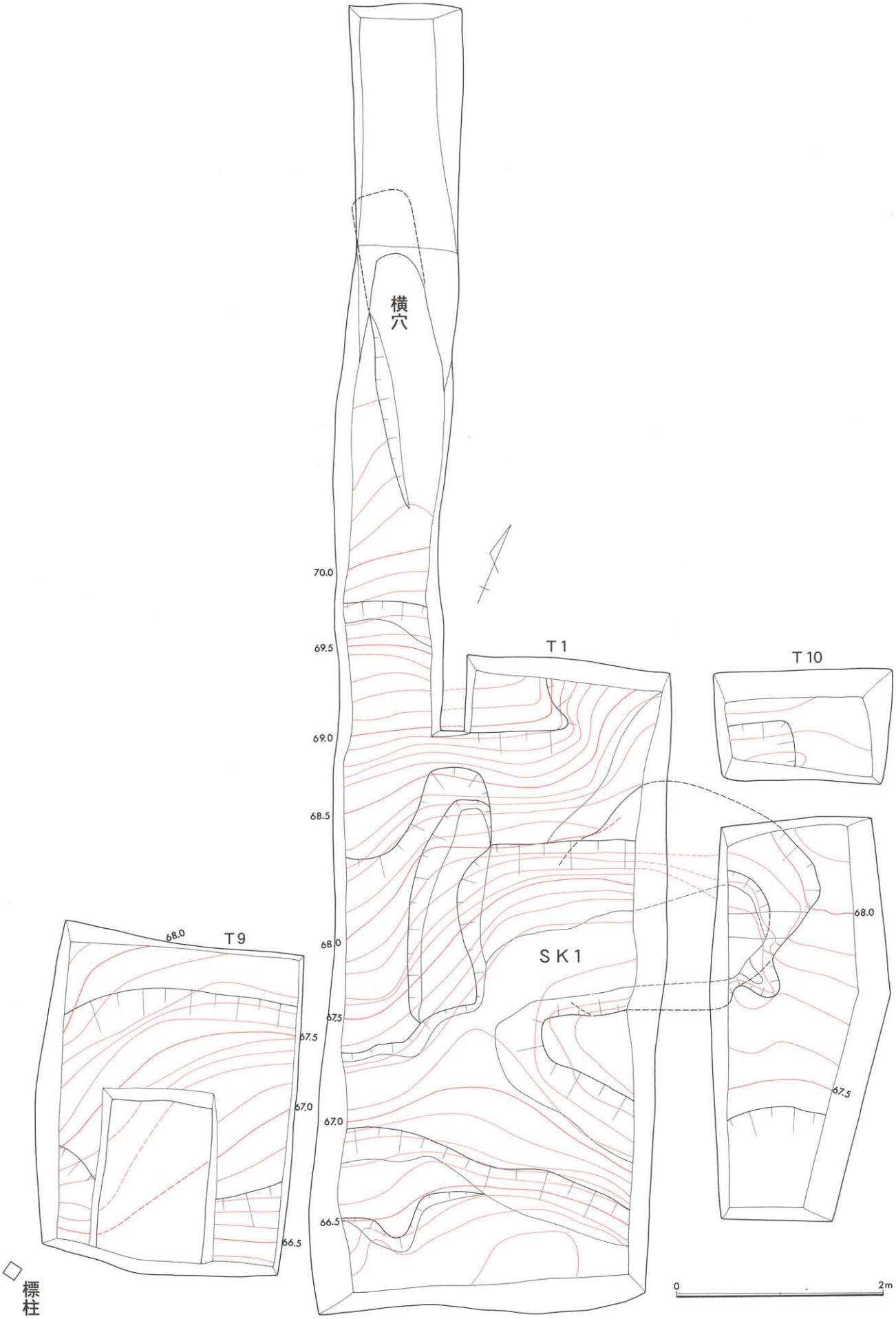
第23図　上府村城山銅鐸発見地局部測図



第24図　上条遺跡　トレンチ位置図（Ｓ＝１/300、25cmコンター）



第25図　上条遺跡　遺構実測図（1）（S＝1/50）



第26図　上条遺跡　完掘地形測量図（S＝1/50、10cmコンター）

で埋没していたが、イモ穴として使われた痕跡がないことから、採土に伴い掘られ、すぐ埋められたと考えられる。

東側に拡張した場所では地山面が東方向に掘り窪められ通路状になっていた。明赤褐色粘質土(壁土)、黄褐色粘質土、暗灰褐色粘質土（旧表土か）が混じる二次堆積土が堆積していた。調査区東壁では浅黄色粘質土と明赤褐色粘質土の互層状堆積が認められ、人為的な埋土と考えられた。このことから、土坑状の遺構（ＳＫ１）の西側が採土により撹乱されたと判断された。遺物は確認されなかった。

Ｔ２　道の南西側の平坦地から斜面にかけて設定した１ｍ×17mの調査区である。現地表下10～40cmで黄褐色粘質土の地山面を確認した。直径約15cm・深さ約14cmの穴が２基見つかったが、埋土は表土に近い土のため撹乱の可能性が高い。遺物は確認されなかった。

Ｔ３　Ｔ２に直交して斜面に設定した１ｍ×８ｍの調査区である。現地表下15～35cmで黄褐色粘質土の地山面を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

Ｔ４　Ｔ２に直交して斜面に設定した１ｍ×８ｍの調査区である。現地表下15～35cmで黄褐色粘質土の地山面を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

Ｔ５　採土地点南東の谷底に設定した約２ｍ×10mの調査区である。黄褐色粘質土の地山面は南東方向に約30度以上で急傾斜していた。谷を埋め、畑として利用していたとのことである。遺構・遺物は確認されなかった。

Ｔ６　採土地点東崖面に設定した１ｍ×６ｍの調査区である。現地表下約30～150cmで黄褐色及び赤褐色の地山を確認した。調査区南東側では地山直上に厚さ0.7～1.5cmの小礫・炭粒を含む黒褐色粘質土が確認され、採土時の地表面と考えられる。地山面は約40度で急傾斜しており、遺構・遺物は確認されなかった。

Ｔ７　採土地点西崖面に設定した１ｍ×4.5mの調査区である。現地表下約40～80cmで黄褐色粘質土の地山を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

Ｔ８　採土地点の北西の平坦地に設定した１ｍ×５ｍの調査区である。昭和30年頃はこの辺りで採土が行なわれたようである。現地表下約40cm下で黄褐色粘質土の地山面を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

Ｔ９　標柱の北東側・採土後の平坦地に設定した2.5m×3.5mの調査区である。現地表下約25～120cmで暗黄褐色土の地山を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

Ｔ10　Ｔ１で確認されたＳＫ１の規模を確認するためにＴ１東側に設定した1.5m×４ｍの調査区である。一部Ｔ６と重なる。現地表下約120cmの黄褐色粘質土面でＳＫ１の東端を確認した。調査区北側と南側の地山面は急傾斜していると考えられるが、いずれも採土による撹乱と考えられる。遺物は確認されなかった。

ＳＫ１　Ｔ１・Ｔ10で確認された土坑状の遺構である。遺構上面と西側及び南側は大きく採土で撹乱されているが、残存部から推定すると幅約2.2m以上・深さ90cm以上の円形の土坑と推定される。北側に約１ｍのテラスがつく二段掘り土坑と考えられる。土坑の上層約70cm・土坑上段（テラス）及び下段の上位には５～10cmの厚さで浅黄色粘質土と明赤褐色粘質土が互層状に堆積していた。

註

(1) 高橋直一　1928「石見新発見の銅鐸について」『考古学雑誌』18 - 7

直良信夫　1932「石見上府村発見銅鐸の出土状態」『考古学雑誌』22 - 2

のち、直良信夫　1991 『近畿古代文化論考』木耳社に再録

なお、現地測量の結果、出土略測図の縮尺単位は10m程が妥当と考えられる。

(2) 東京国立博物館 1981『東京国立博物館図版目録 弥生遺物篇（金属器）』

(3) 遺跡周辺の地質については（株）文化財調査コンサルタントの渡辺正巳氏にご教示いただいた。

1:暗灰褐色粘質土　2:暗灰褐色粘質土ブロック混明褐色粘質土　3:明赤褐色粘質土混暗灰褐色粘質土

4:炭混暗灰褐色粘質土（5層境浅黄色粘質土）

5:明赤褐色粘質土混暗褐色粘質土（暗黄褐色粘質土ブロック含）　6:暗灰褐色粘質土混明赤褐色粘質土

7:暗黄褐色粘質土明赤褐色粘質土（ヤヤ砂質）　8:明赤褐色粘質土混暗灰褐色粘質土

9:明赤褐色粘質土（暗灰褐色粘質土粒含）　10:明赤褐色粘質土（表土、浅黄色粘質土粒多含）

11:暗灰褐色粘質土ブロック混明赤褐色粘質土（2層ヨリ暗）　12:明赤褐色粘質土混暗灰褐色粘質土

13:明赤褐色粘質土混暗灰褐色粘質土（12ヨリ赤）

14:.浅黄色粘質土・暗灰褐色粘質土混明赤褐色粘質土（炭含）

21:明赤褐色粘質土混浅黄色粘質土（白）　22:明赤褐色粘質土（浅黄色粘質土少混、赤）

23:21と同じ・21ヨリ明赤褐色粘質土多含　24:22と同じ　25:21と同じ・黄味強

26:22と同じ・地山ブロック多混　27:22と同じ・26ヨリ地山ブロック少　28:暗赤褐色粘質土（明赤褐色粘質土含）　29:暗赤褐色粘質土混明赤褐色粘質土　30:浅黄色粘質土混明赤褐色粘質土

31:赤褐色粘質土（浅黄色粘質土粒含）　32:赤褐色粘質土（浅黄色粘質土粒少含）

33:明赤褐色粘質土混浅黄色粘質土　34:白色粒混暗褐色土（地山）

第27図　土層断面実測図（S＝1/50）

第３節　調査の結果

調査前の状況（第28図、写真図版13）

平成11年度の調査は、銅鐸出土地のある丘陵上部を中心に行い、丘陵南東側、北西側の斜面と尾根筋、加えて尾根上の平坦地が対象となった。ちょうど銅鐸出土推定地の北東側にあたる一帯で、総調査面積は約1,000㎡である。伐採前の調査地は大部分が見通しのきかない竹藪であったが、尾根筋に沿って小道が通っており、最近まで利用されていたようである。また尾根上の平坦地は、果樹園、畑として近年まで利用されていたとのことである。

調査の経過

調査は平成11年４月26日より開始した。伐採後の木材搬出中であったが、工事予定の関係で早急に調査を行う必要があり、発掘可能な部分から調査に入った。

調査区の大部分を占める南東側斜面は、粘土（壁土用粘土）採取による崖面が点在する、比較的急峻な斜面である。重機が進入できなかったため、表土掘削から人力での作業となった。調査は尾根筋から徐々に下に向けて行ったが、細い谷の最奥部故に廃土処理が難しく、予想外に難行した。廃土は総計50本ものベルトコンベアを這わせて尾根上に引き上げ、さらに尾根筋を通って調査区外に搬出しなければならなかった。大がかりな調査にも関わらず出土遺物は少なく、安山岩製石匙１点と須恵器片が少量出土した以外は、現代の陶器片、鉄釘などが出土したにすぎない。

遺物の出土地点は調査区北東側角に偏っており、すぐ北側の平坦地から流れ込んだ可能性が考えられた。そのため急遽、調査区を北側に拡張するとともに、丘陵上の平坦地に十字型のトレンチを設定した。拡張区からは比較的まとまった数のピットを検出したが、やはり遺物は少なかった。またトレンチでは、遺構、遺物とも検出できなかった。

丘陵北西側斜面の調査については、後世の粘土採取によって地形が大きく改変されていることが分かったため、トレンチ調査を行ってから可否を判断することとした。斜面が大きく抉られて崖面を形成している部分と、比較的旧地形が残っていると考えられる部分を選び、計３本のトレンチを設定した。トレンチ調査の結果、どの場所も10～40cmと比較的浅い面で地山が露出することが分かった。部分的に深い場所はあるものの、明赤褐色粘質土（壁土用粘土）、茶褐色粘質土が採取されずに残っているにすぎなかった。遺物も全く出土しなかったことから、北西側斜面の全面調査は行わないこととした。

今回の調査区は遺構、遺物とも僅かであったが、上条遺跡を広く一般に紹介するため、６月20日に現地説明会を開催した。平成10年度の調査結果も合わせて紹介することとし、浜田市教育委員会の協力を得て、県・市両教育委員会の共同開催とした。直前の長雨のために発掘現場の整備が滞ってしまい、当日は朝から総出で草刈りと通路の整備を行わねばならなかった。しかし苦労の甲斐あって、快晴に恵まれた説明会は91名の参加者を数えた。その後、７月１日に空撮を行い、全ての調査を終了した。

調査の結果（第29図、写真図版13）

南東側斜面の上部は粘土採取によってかなり掘削されており、30～50cm程掘り下げると地山面に突き当たった。一方、谷筋は付近の土砂が大量に流れ込んでおり、地山に由来すると思われる角礫を多く含む堆積土が２～2.5mの厚さで堆積していた。ここでは粘土採取に伴う崖面以外、人為的

な痕跡を確認することはできなかった。拡張区では約30穴のピットを検出したほか、尾根に沿って掘り込まれた道状遺構を１条確認した。しかし銅鐸の埋納に関係すると思われる遺構は無かった。粘土採取が大規模に行われていたことから破壊された可能性も否定できないが、特に銅鐸出土地点周辺には他の時代も含めて遺構が全くなかったことは注目される。

出土遺物は、安山岩製石匙１点と須恵器片約20点、白磁片１点などである。出土遺物が散在していた場所は、調査区北西角と拡張区であり、ちょうど尾根筋の小道を挟んだ幅５m程の範囲内でほとんど全ての遺物が出土した。

土層（第29図）

層序は基本的に調査区全域にわたって同一である。表土直下の第２層は、含有物が多くしまりが弱い暗黒褐色土である。調査区のうち粘土採取が行われていた場所では残存していない。遺物は全てこの層から出土しているが、石匙から現代の陶磁器までを含み、下部からポリエチレン製の袋が見つかるなどかなりの攪乱を受けていると考えられる。詳細は不明だが、斜面上部の緩傾斜地では果樹園や畑の造成に伴う土の撹拌が行われており、ここから流出した土が谷部に流れ込んでいると考えられる。第３層は谷部に堆積した流土層である。第４層は茶褐色粘質土である。部分的に赤色の木目の細かい粘質土（明赤褐色粘質土）を含む。壁土用として採取されていた粘土はこの土で、銅鐸出土地周辺に特に多く分布している。また、その採取痕跡が崖面として調査区内に点在している。調査区北東部の拡張区では、この層にピット群が掘り込まれている。第５層は、５～10cm大の礫を多量に含む黒褐色土である。目の粗い砂質土層であるが、下位の第６層が地山（岩盤）層であり、岩盤から遊離した礫が混じって堆積している。第６層は、青灰色の岩盤で、部分的に白灰色、暗緑色を呈する。

ピット群

調査区北東部、道の北側に広がる緩傾斜から30穴余りのピットを検出した。いずれも径15～20cmと小型で、深さも10～20cm前後が多い。すべて第４層に掘り込まれているが、直上の第２層は攪乱が激しく（前記のように、おそらく耕作土である）、ピットの上面が飛んでいる可能性も否定できない。配置が全く不規則なため時期、性格は不明であるが、0.9～１m程の間隔で列状に並ぶ一群があるようにも見える。尾根筋の小道から分かれて、北西に向かって列状に並んでいるようでもあり、柵状の構造物が造られていたのかもしれない。また簡単な小屋状の構造物が立てられていた可能性もある。

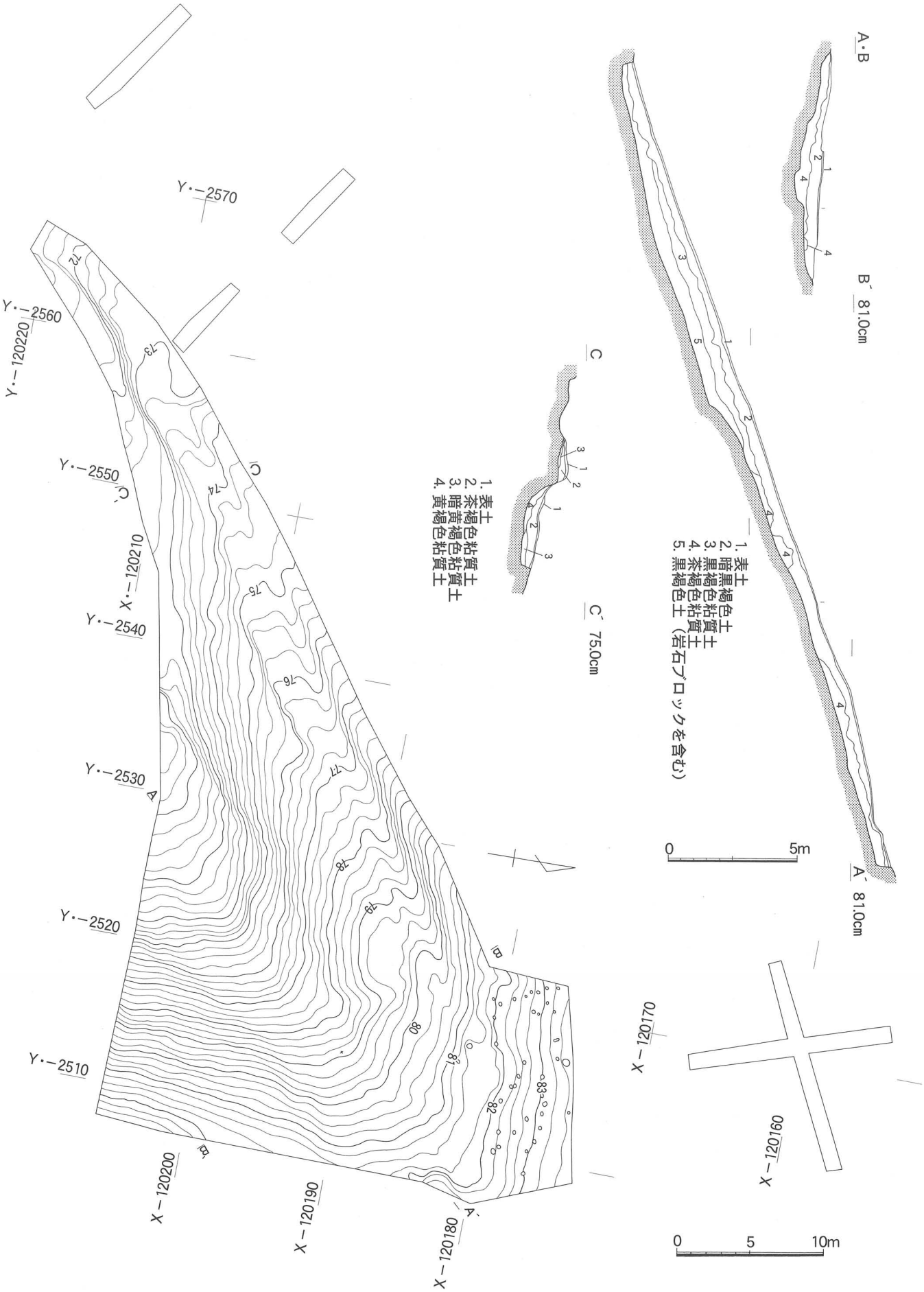
道状遺構

ピット群の南側に広がる東西約７m、南北約２mの溝状の窪みである。深さ約20cmと浅く、出土遺物はない。ピット群と同様に第３層に刻まれている。現在の尾根上の小道とはズレがあるが、尾根筋に沿ってのびており、より古い時期の山道の跡である可能性が高い。

出土遺物（第30図、写真図版14）

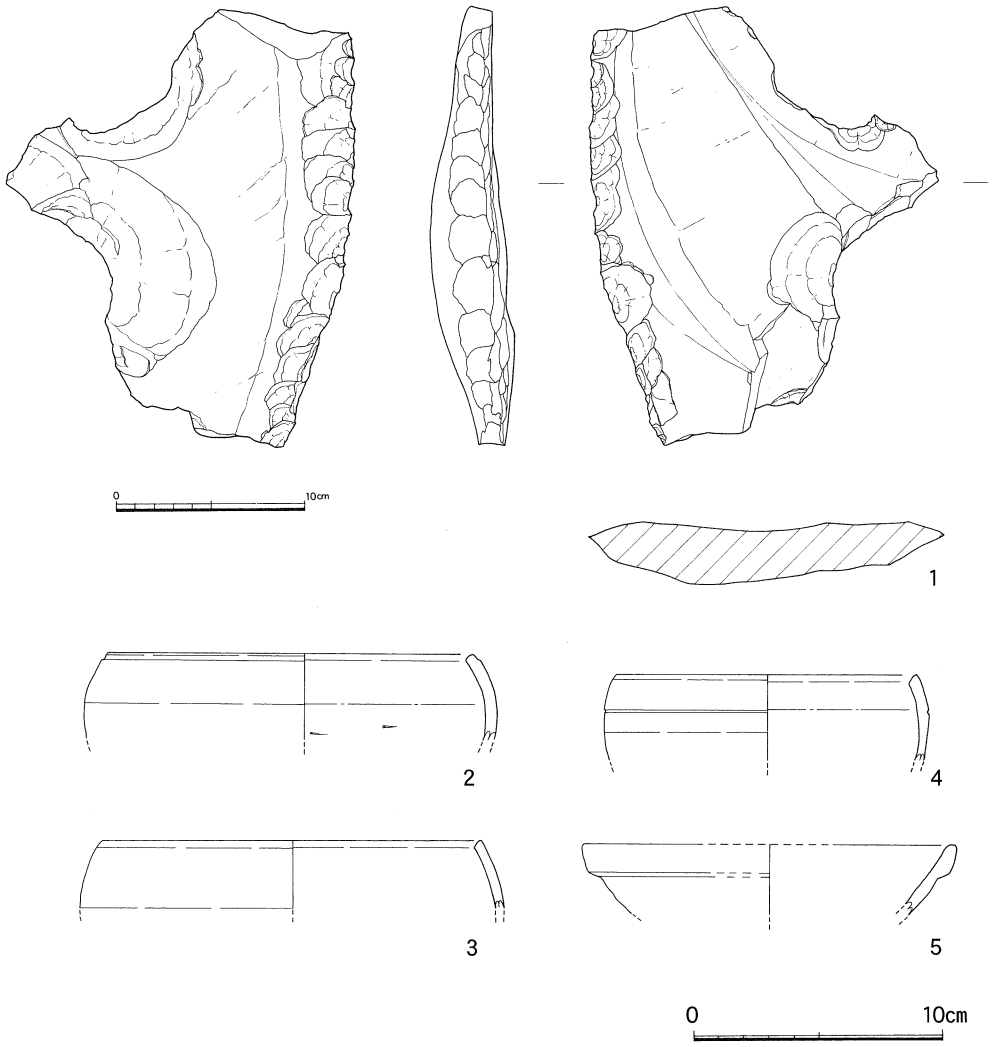
30－１～３は、須恵器坏身もしくは鉢の口縁部である。口縁に向かって緩やかに内湾し、口縁端部には内傾する平坦面をもつ。内面、外面ともになで調整である。いずれも小片の為口径は不正確であるが、全て別個体と考えられる。１は復元口径15.6cmで、端部外面に沈線を１条入れる。端部はやや丸みを帯びており、内傾する平坦面が僅かに認められる。２は口縁端部にしっかりした平坦面を持つが、口縁の内傾は緩い。肩部に沈線１条を入れる。３は口縁端部外面に僅かにアクセント

第28図　上条遺跡調査前地形測量図（S＝1/350）



第29図　上条遺跡　調査後測量図（S＝1/350，土層は S＝1/200）

が付く。４は白磁椀である。口縁部に玉縁を持ち、薄目に施釉されている。胎土は灰白色を呈するが、粒子が粗めで細かな気泡がかなり混ざる。太宰府分類の椀Ⅳ類であろう。[*1] ５は安山岩製の石匙である。翼状剥片を素材とし、背面・腹面の両面からそれぞれ調整を行い柄部を作り出す。刃部は両面調整で、背面・腹面の順に調整を行なう。基本的に端部からの連続して打撃を加えることで刃部を作り出している。刃部両端が欠損しているが、刃部残存長8.8cm、最大厚1.2cm、重さ78.26ｇである。



第30図　上条遺跡　出土遺物実測図（Ｓ＝１/３、１石匙はＳ＝２/３）

*1　山本信夫1983「土器の分類」『太宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財　第７集
1984「土器分類の追加」『太宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市の文化財　第８集
森田レイ子、山本信夫2000『太宰府条坊跡ＸＶ』太宰府市の文化財　第49集

第４節　上条遺跡銅鐸埋納坑推定地における銅濃度測定

はじめに

銅鐸埋納地周辺では、地層（堆積物）中のCu濃度が高くなることが知られている（三ツ井ほか, 1996)。つまり、発掘調査に伴って検出された土坑埋土のCu濃度が高いことが、この土坑が銅鐸埋納坑であったことの必要条件であることは明らかである。このことから、土坑内トレンチ壁面より採取した試料のCu濃度を測定した。

分析試料について

分析試料を図１に示す２地点で採取した。各地点での試料採取ポイントは、図２，３に示すとおりである。

分析方法

分析にあたり、それぞれ0.5～２ｇの重量を使用し、SHIMADZU（島津製作所）製シーケンシャル形高周波プラズマ発光分析装置（ICPS-7500）を用いて測定を行った。

また、測定は島根県立工業技術センターに委託して実施した。

分析結果

分析結果を表１、２に示す。また、平面的な分布を見るために図２，３に濃度分布を示した。

考察およびまとめ

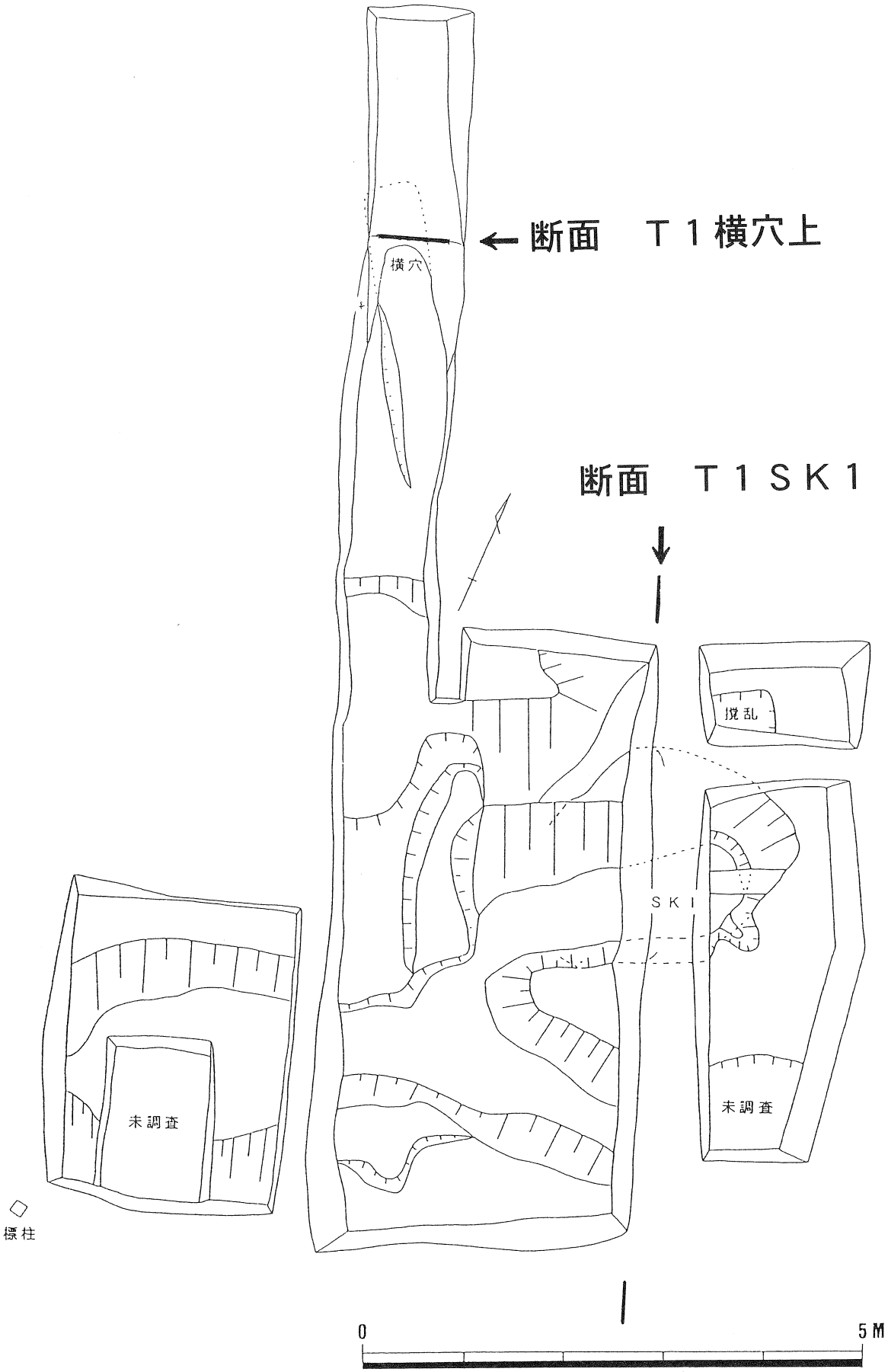
「T1SK1」地点では地山に対し、土抗中試料のＣｕ濃度は高い傾向にある。さらに、21～24ではCu濃度の高い部分が集中する。一方で31、33-1では集中はしないものの高濃度を示す。Cu濃度がこの地区の地山に比べ高いことは、今回の土抗が銅鐸埋納坑跡と推定されることを示唆するようにも見える。

一方で遺跡周辺には三郡変成岩が分布し、強い風化作用の結果赤色粘土化している様子が観察される。「T1横穴上」地点で地山とされる部分がこれに当たり、試料のCu濃度は高い。また、T1SK1で地山とされた部分は、三郡変成岩中に貫入した安山岩質の岩脈が風化作用を受けたものである。

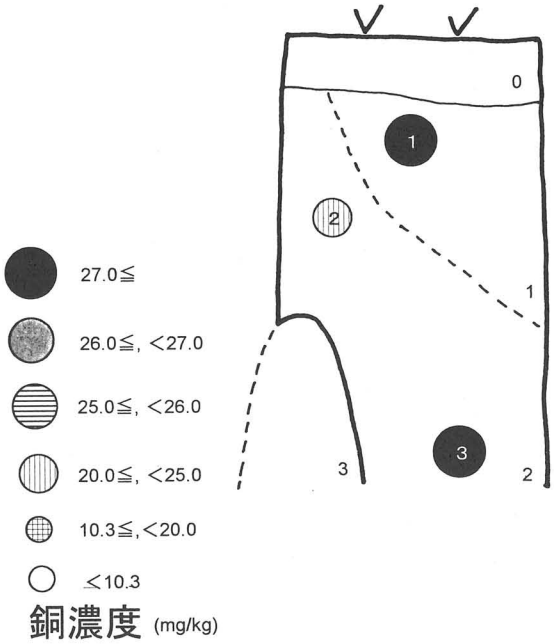
T1SK1でCu濃度の高い層はいずれも赤色粘土の部分であり、本質的にCu濃度が高かった可能性が高い。したがってT1SK1断面でCu濃度が高かった理由として、銅鐸が埋まっていたことを指示することはできない。

引用文献

三ツ井誠一郎・久保田満・村上　隆（1996）下田遺跡から出土した銅鐸の埋蔵環境．下田遺跡,（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書18，371-380.



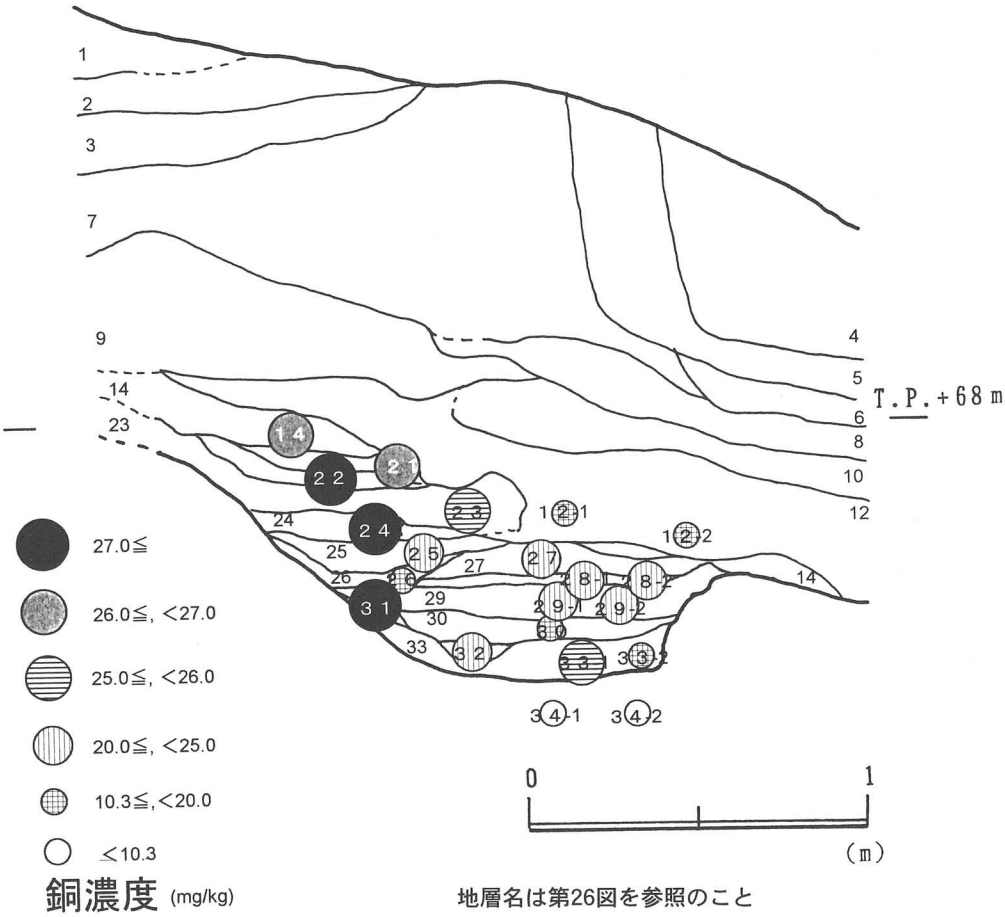
第31図　上条遺跡銅鐸埋納坑推定地における銅濃度測定試料採取地点位置図（Ｓ＝1/60）



0:表土　1:明赤褐色粘質土（壁土）　2:明赤褐色粘質土（白色粒混）　3:横穴

第32図　T1横穴上の銅濃度分布

（図は現地で作成したスケッチである）



地層名は第26図を参照のこと

第33図　T1SK1の銅濃度分布

表８　Ｔ１横穴上の分析結果

試料No.	Cu含有量(mg/kg)
1	31.8
2	20.8
3	31.6

表９　Ｔ１SK１の分析結果

試料No.	Cu含有量 (mg/kg)
12-1	16.3
12-2	16.8
14	26.1
21	26.6
22	27.8
23	25.1
24	27.5
25	22.8
26	17.4
27	22.5
28-1	21.2
28-2	21.1
29-1	21.0
29-2	23.5
30	19.6
31	27.1
32	21.7
33-1	25.2
33-2	18.3
34-1	10.2
34-2	8.6

調査終了後

第5節　ま　と　め

調査の結果、直接銅鐸と関連づけられる遺構・遺物は確認されなかった。

平成10年度調査で確認されたSK１は上位に赤色系粘質土と白色系粘質土の互層状堆積が認められ、人為的に埋められた土坑の可能性がある。遺物が出土しなかったため土坑の性格は決められないが、通路状に東へ掘られた採土の痕跡とＳＫ１の西端が平面で重複するため、ＳＫ１の西端付近に銅鐸が埋められていた可能性も想定される。しかし、調査時にＳＫ１の検出が遅れ、採土による撹乱とＳＫ１の関係がつかめなかったため断言はできない。Ｃｕ濃度分析の結果でも、もともと周囲の地山のＣｕ濃度が高いため、埋納坑と断定するだけの根拠にはならなかった。ＳＫ１は丘陵斜面をカットし、山側にテラスを作り出しており、幅2.2m以上・深さ90cm以上あったと考えられる。仮にＳＫ１を埋納坑とした場合には扁平鈕銅鐸二個体の埋納坑としては大きすぎる印象がある。しかし、銅鐸に対して大きな埋納坑を掘った兵庫県野々間遺跡など数例確認されている。[1]

平成11年度調査では出土推定地より北東の谷斜面と丘陵上を調査したが、尾根筋から遺物が僅かに出土したのみであった。尾根筋の道は丘陵北西の山裾にある三重地区の集落から北進し荒相へ抜けるもので、近年まで石見焼の陶土を頻繁に馬で運搬していたという。遺物が単発的に出土する状況は尾根筋が古くから断続的にでも通行のため利用されていたことを示唆していよう。

確実にいえることは、採土跡の状況から銅鐸出土地は平成10年度調査のＴ１・Ｔ９・Ｔ１０辺りと考えられることである。銅鐸発見時の土は、採土が継続して行われていることから斜面の下へ流された可能性がある。なお、出土推定地は道路横で保存されており、説明板が立てられている。

改めてこの出土地について検討すると、出土地は下府川によって形成された平野の最も東の丘陵の裏側（平野と反対側）に位置する。これより上流では下府川は急峻な山に囲まれて流れ、約2km上流の宇野までまとまった平野や集落はない。平野から見ると感覚的な表現だが「平野部と山地の境界」のような印象を受け、「一ノ界引越」という小字名も示唆的である。下府平野ではまだ確実な弥生集落の調査は行われていないが、河口部から挙げると次のような遺跡で遺物が出土する。川向遺跡（弥生前期・後期）・伊甘神社脇遺跡（弥生前期～後期）・千足遺跡（弥生後期）・下府廃寺跡（弥生後期）・古市遺跡（弥生前期・後期）・上府遺跡（弥生中期）などである。[2] さらに上流の宇野町では弥生時代の遺跡は確認されていない。山が海側までせまり、小規模な沖積平野が断続的に続く石見地方の地形制約もあるが、同一水系の下府平野・丘陵部の小集落群を中心に銅鐸を2個共有していたのであろう。その銅鐸は集落のある平野部の東縁辺の丘陵裏側に埋納されたようにとれる。銅鐸の使用・埋納目的には諸説あるが、今後の研究の中で比較検討していく必要がある。

註

(1) 兵庫県氷上郡春日町　1990　『野々間遺跡』

(2) 浜田土木建築事務所・浜田市教育委員会　2000　『川向遺跡』

島根県教育委員会　1979　『石見国府推定地調査報告Ⅱ』

千足遺跡は伊甘神社脇遺跡の南東にあり、2000年度に浜田市教育委員会が試堀調査により確認した。

浜田市教育委員会　1993　『下府廃寺跡』

島根県教育委員会　1980　『石見国府推定地調査報告Ⅲ』

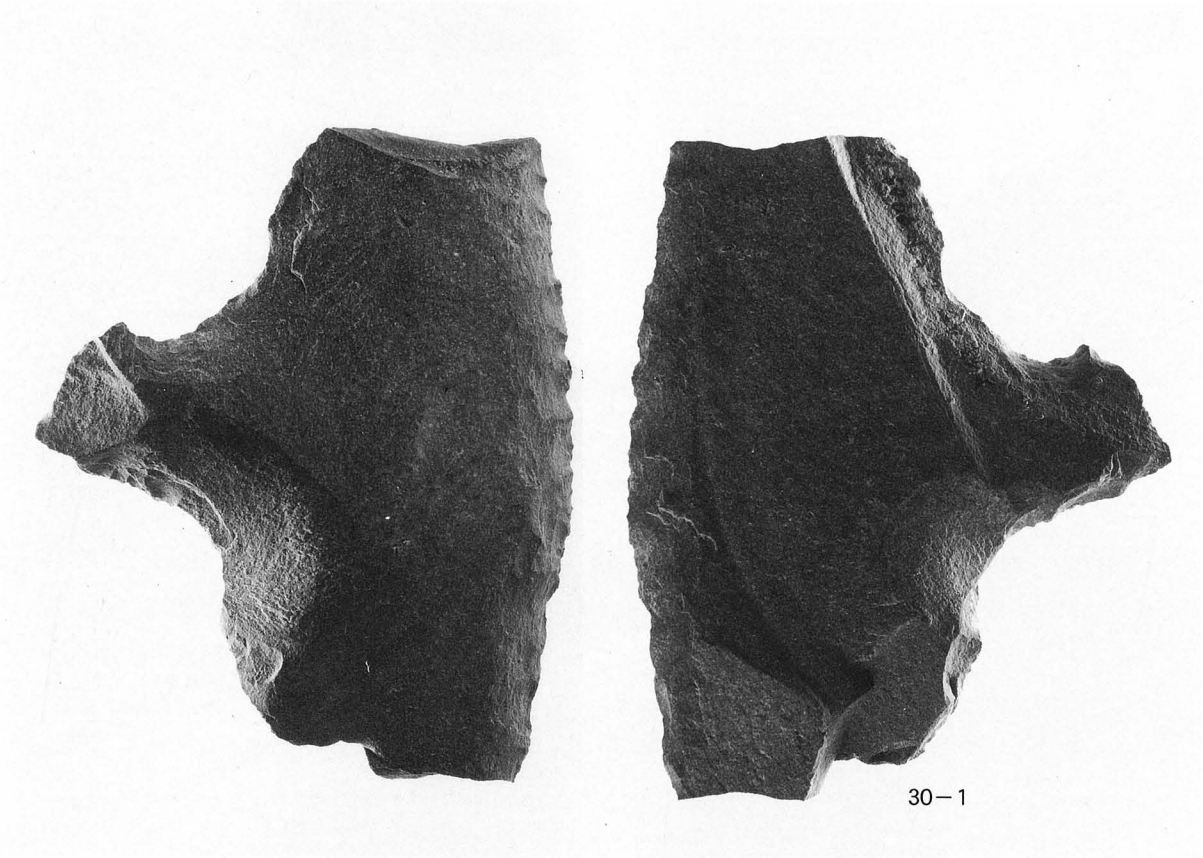
上条遺跡出土銅鐸（東京国立博物館所蔵）

平成10年度調査　Ｔ１、Ｔ９

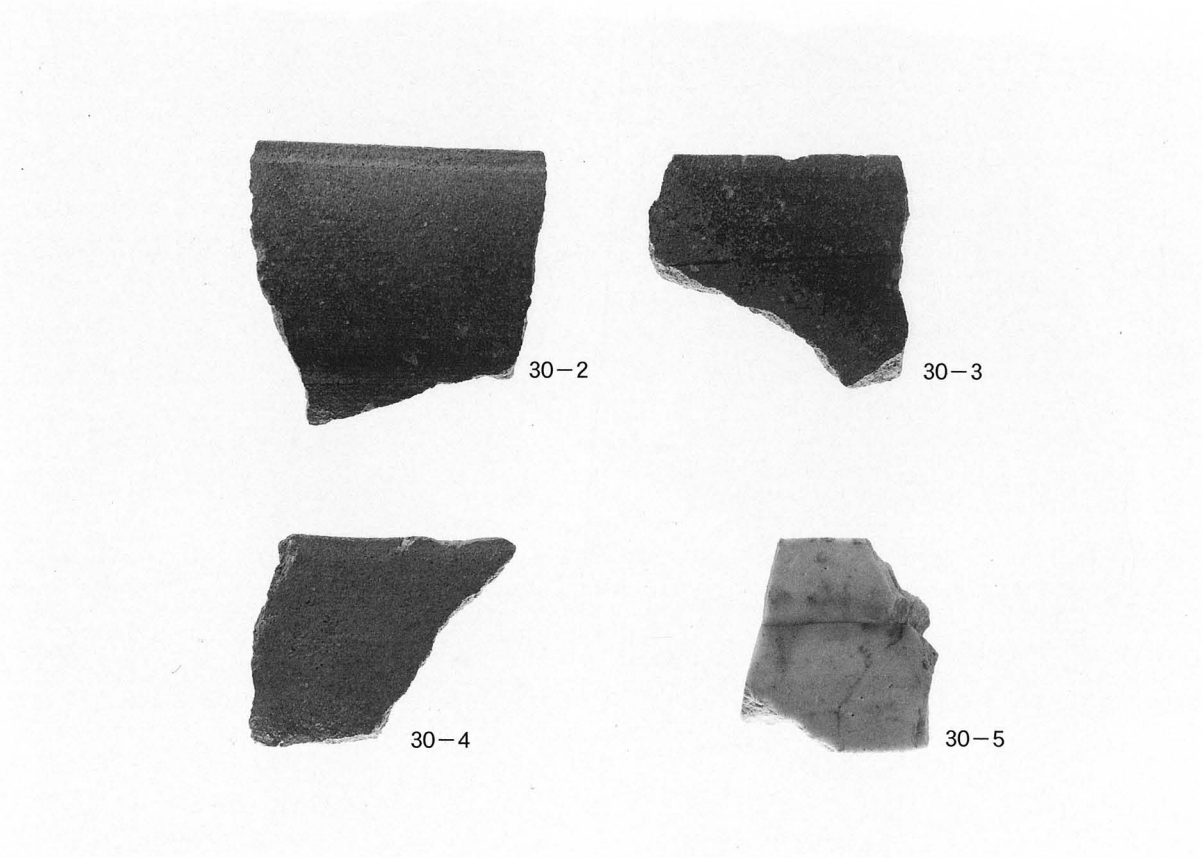
平成10年度調査　ＳＫ１

上条遺跡　調査前全景（西側から）

上条遺跡　調査後全景（南側から）



出土遺物　Ⅰ　石匙



出土遺物　Ⅱ　須恵器・白磁

第６章　水戸（三戸）神社跡

第１節　調査前の状況と経過

調査前の状況（第34図、写真図版15）

水戸（三戸）神社跡（上条古墳）は浜田市上府町の下府川東岸の丘陵先端に位置している。遺跡の上に立つと下府川を眼下に望むことができる大変眺望の良い立地である。この遺跡は江津道路建設予定地内の分布調査で確認されたもので、当初は直径10m程度の前期～中期の古墳ではないかと想定していた。また、この尾根上には「水戸（三戸）神社」と呼ばれる石の祠が祀られていたようでありカワラケの破片が採集されている。[1]

調査の経過

調査は平成11年４月から実施する予定であったが、古墳の西側部分が用地買収の関係で調査できないため、着手できなかった。事態はなかなか進展しないまま７月になって浜田工事事務所より、調査予定地の東側部分の橋脚下部工事の施工範囲のみ先に着手して欲しい旨の要請があった。本来であれば古墳全体が可能になってから調査に着手すべきであろう。しかしながら調査前の観察で古墳ではない可能性も考えられたため、ひとまず東側部分について先に調査を実施することとした。

調査は平成11年８月７日から開始し９月７日に終了した。測量調査の結果想定した古墳の主軸線上に土層観察用の畦を残して東側部分は全面的に表土を除去した。さらに部分的にトレンチを設定し掘り下げていった。その結果、盛土及び人為的加工の痕跡は確認できず古墳ではないものと判断した。調査区内では尾根筋を縦断する道路遺構と性格不明の溝状遺構を検出したのみである。その後、西側部分の調査が可能になったが、古墳ではないことが判明していたため水戸（三戸）神社が祀られていたと推定される加工段付近を中心に調査することとした。調査は平成11年11月25日から12月10日まで行った。調査の結果、加工段２基を検出した。

第２節　調査の結果

道路遺構（第34・35図、写真図版16）

調査前まで地元で生活道として使われていた道である。道の構築方法や構築時期を知るために部分的に調査を行った。道路遺構は尾根筋を縦走し、上条遺跡のある尾根を通った後、宇野町大尾谷方面へ通じている。道の幅が１mほどの小規模なものである。道路は古墳と推定した丘陵先端の尾根筋では、高いところを通るのを避け、南側の斜面を削平して通していた。また、丘陵先端の高まりと東側の高まりの間の鞍部は、盛土によって土橋を造っていたのが確認できた。土橋の長さは10m、幅は１mである。

溝状遺構（第36図）

土橋と平行に延びた後、古墳のある尾根の東側の裾で北に折れる、平面Ｌ字形を呈している。規模は幅50cm前後、深さ10cm前後である。溝の埋土からは近現代の所産と考えられる陶磁器が出土している。

加工段・焼土遺構（第36図）

丘陵先端から西側の緩斜面で検出された。この緩斜面から西側には、いくつかの段や窪みが認められた。改変により旧地形をとどめていないようである。

調査前の聞き取りによれば、この辺りに水戸（三戸）神社と呼ばれる石の祠が祀られていたらしい。祠が置かれていたと思われる場所にはわずかな段が残されていたが、調査では地下構造等は認められなかった。周辺からは年代、器種不明の瓦質土器が出土した。奉賽物かどうかは不明である。また加工段の南1.5mのところでも小規模な加工段とそれに伴う焼土面が確認されている。遺構の時期は不明である。

第３節　小結

上条古墳は当初想定していた古墳ではなく自然地形であることが判明した。道路遺構の時期は不明である。しかし付近に中世の山城である八反原城が存在しているほか、上条遺跡でも白磁Ⅳ類碗が出土していることから、あるいは中世にまで遡る可能性も考えられる。

註

（１）地元の人からの「水戸（三戸）神社跡」についての聞き取り結果は次の通りである。

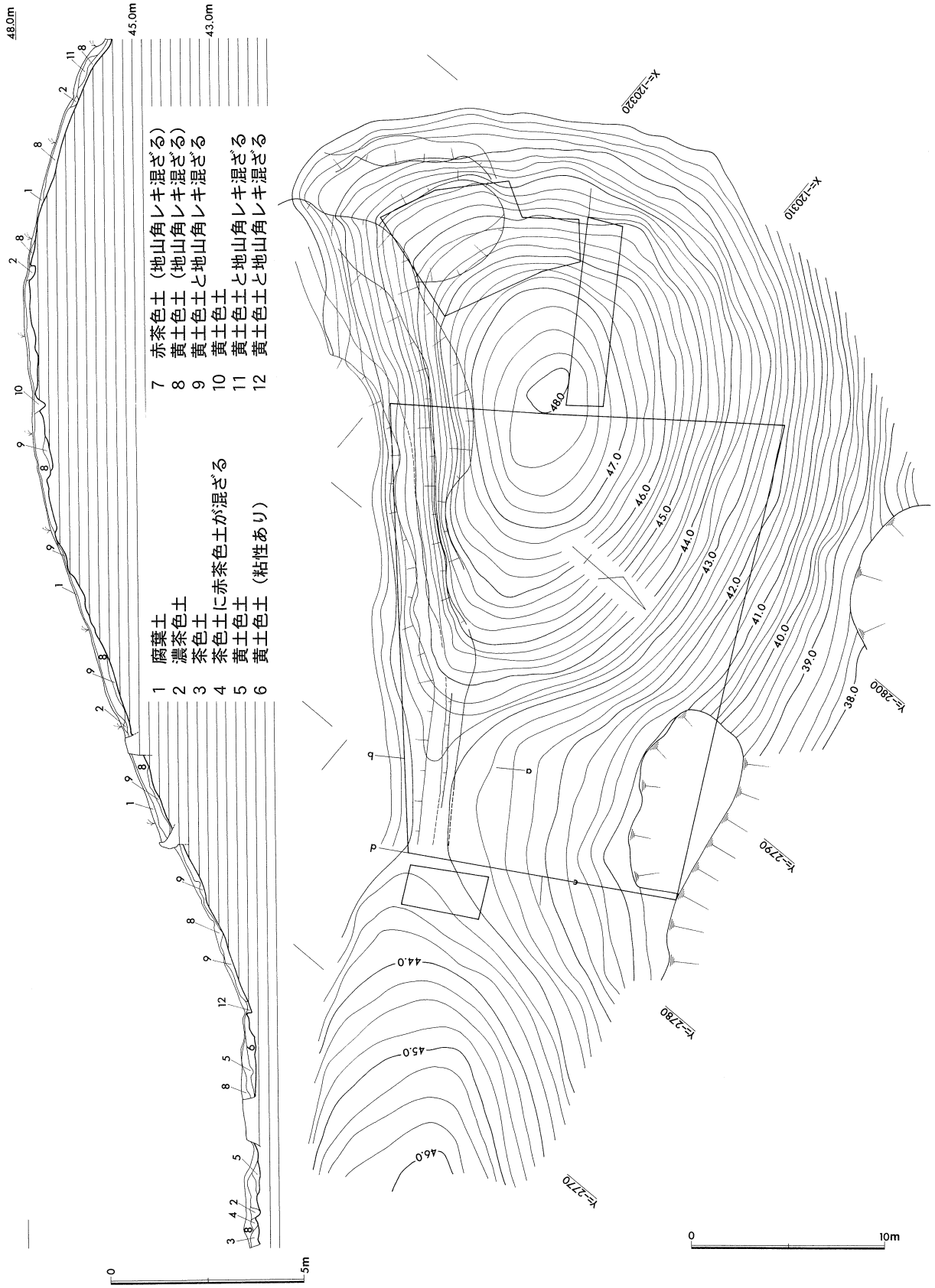
・明治時代に建てられたものである

・石かコンクリート製のどちらかである

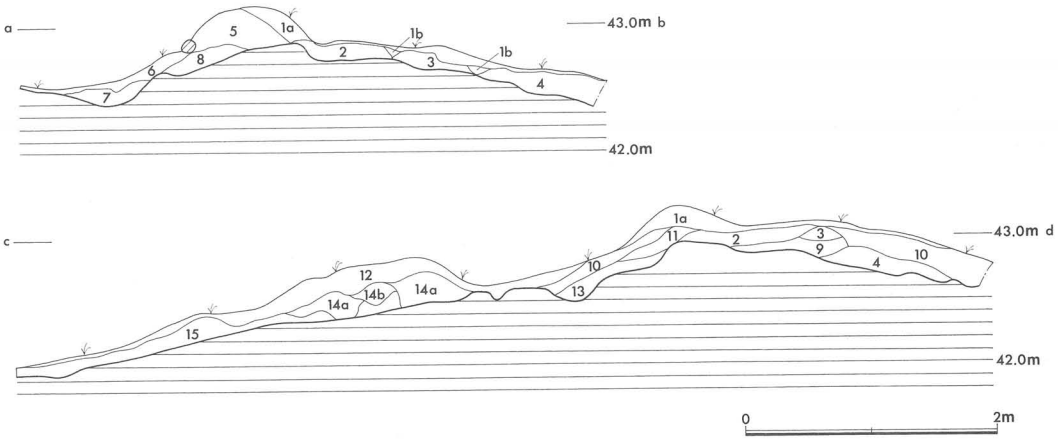
・三軒の家の名前があった

・道ばたに置かれていた

この「水戸（三戸）神社」は道路建設に伴って移され、県道田所国府線の道路脇に再建されて祀られている。

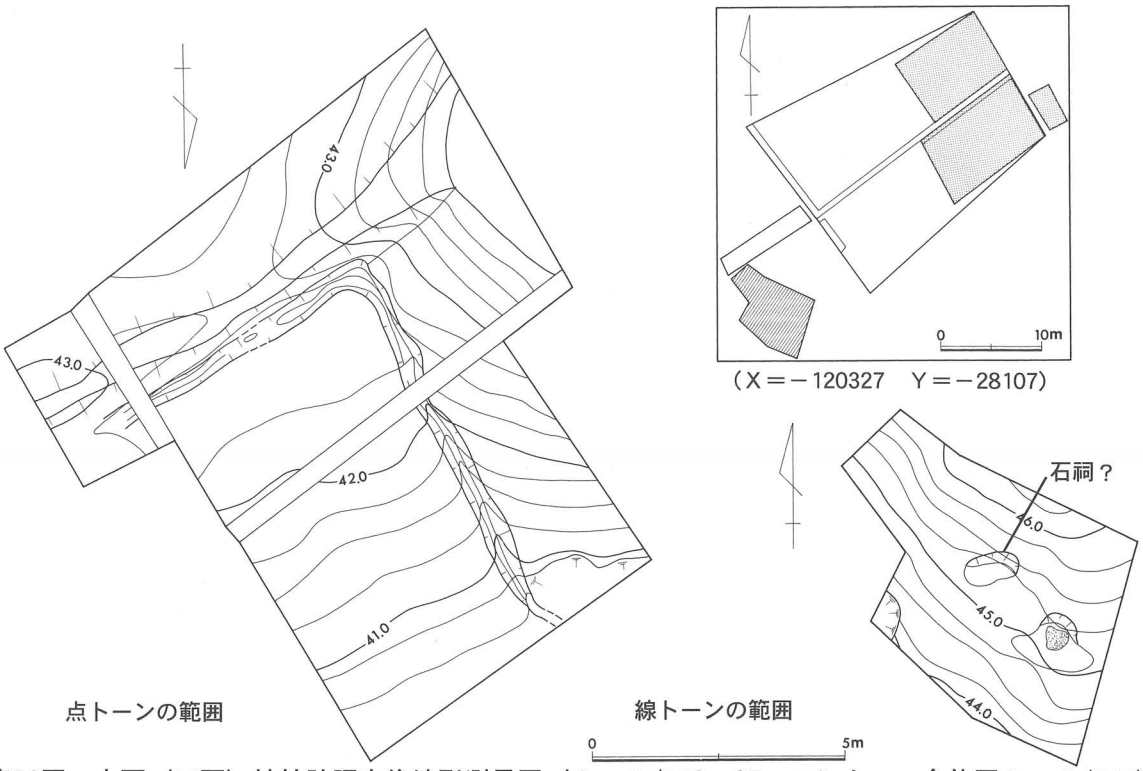


第34図　水戸（三戸）神社跡地形測量図（S＝1/300　25cmコンター）・土層堆積図（S＝1/150）

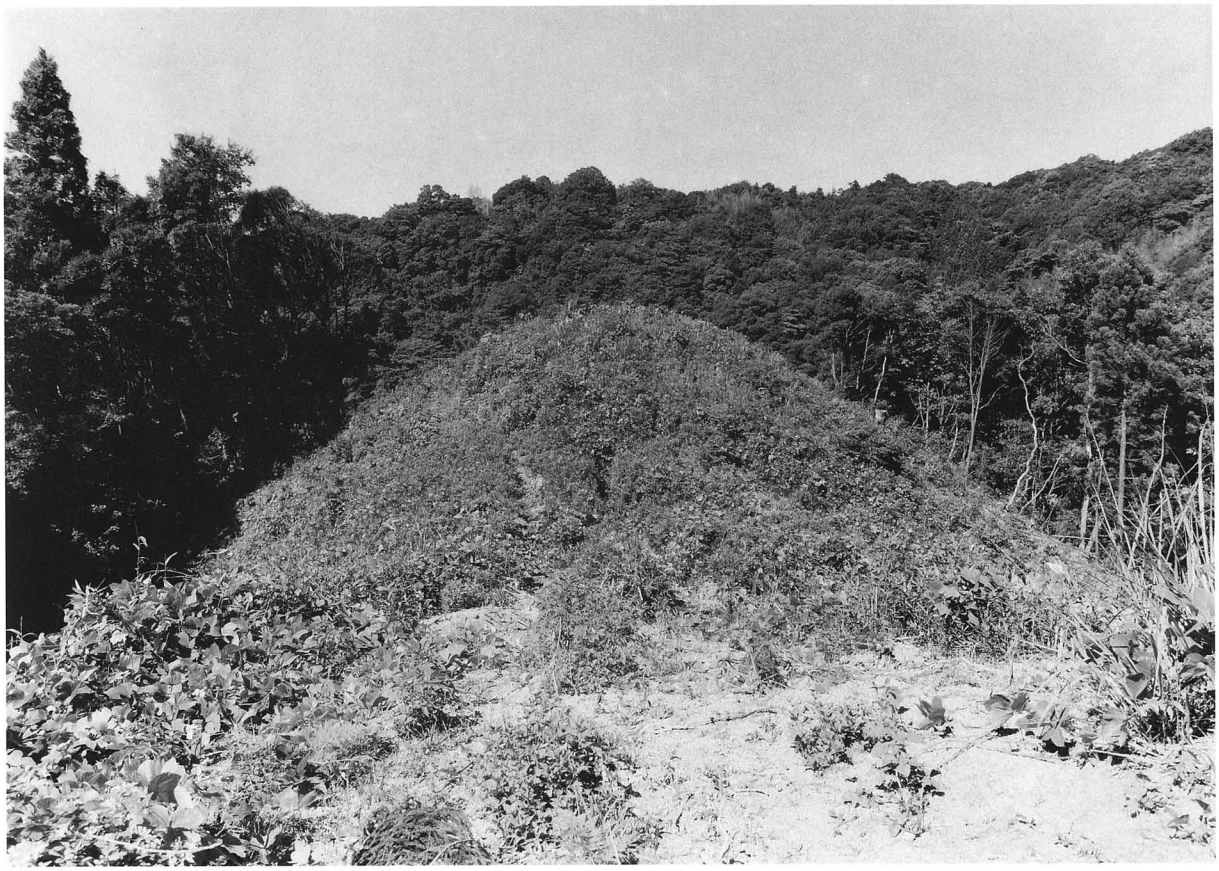


1a　腐葉土に指頭大～握り拳大の角レキ混ざる
1b　腐葉土
2　黄土色粘質土に角レキがわずかに混ざる
3　黄土色粘質土（2より明るい）
4　黄土色土
5　灰色土（しまった土）
6　灰茶色土
7　6に地山赤色土がブロック状に混ざる
8　濁赤色土
9　濁赤色土に地山角レキ混ざる
10　黄土色粘質土
11　黄土色粘質土
12　灰茶色土
13　黄土色土（粘性あり）
14a　黄土色土
14b　黄土色土（パサパサしたしまりのない土）
15　黄土色土

第35図　水戸（三戸）神社跡・土橋土層堆積図（S＝1/60）



第36図　水戸（三戸）神社跡調査後地形測量図（S＝1/150　25cmコンター　全体図S＝1/750）



調査前近景（北東から）

調査風景（北東から）

土層堆積状況（北東から）

土橋土層堆積状況（南西から）

第７章　立　女　遺　跡

第１節　調査前の状況と経過

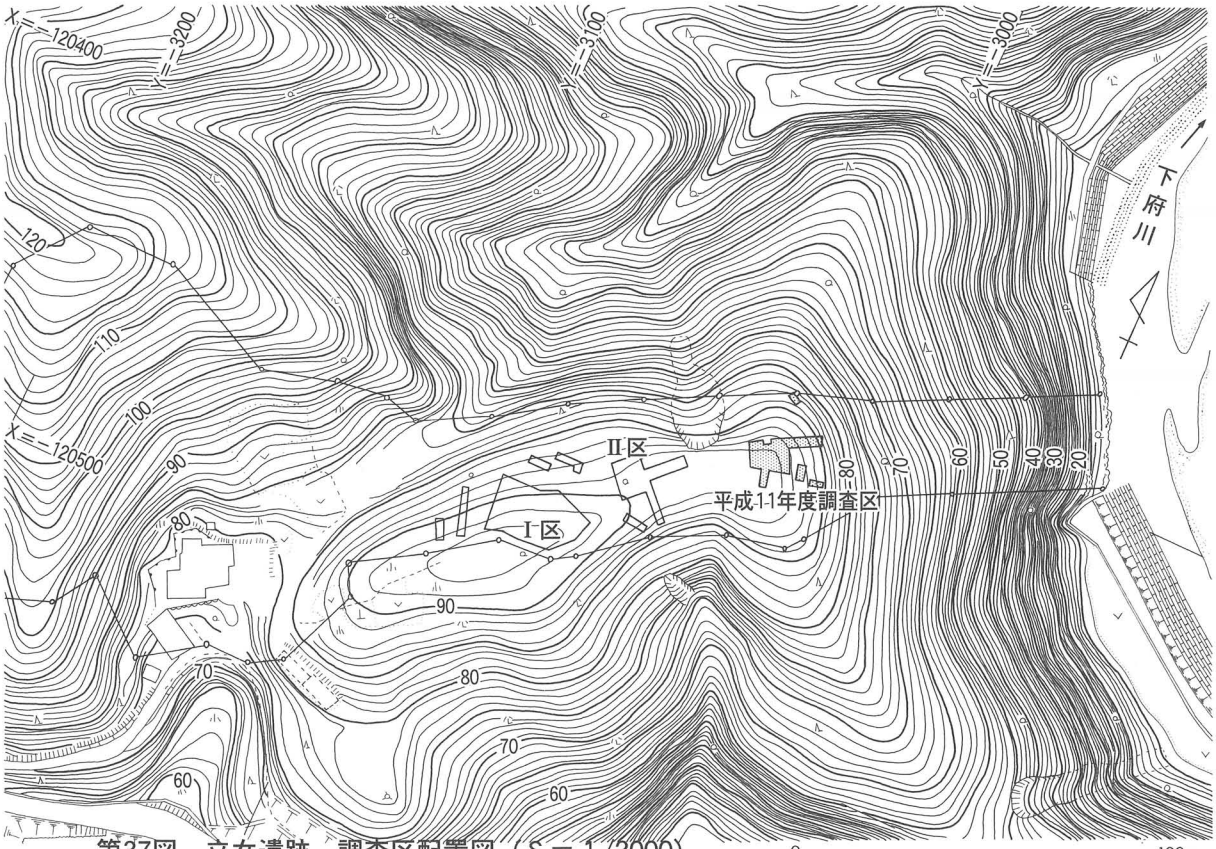
調査前の状況（第37図、写真図版17）

立女遺跡は浜田市上府町の下府川西岸の丘陵上に位置している。立女遺跡の下府川対岸には扁平紐式袈裟襷文銅鐸２個体が出土した上条遺跡と、戦国時代の山城である八反原城跡（文献１）が所在する。調査前の遺跡は丘陵一帯にスギが植林され、尾根上で平坦地を確認できた。立女遺跡から下府川を北西に約1.2km下った平野部には、中世の貿易陶磁が約1,000点出土した古市遺跡（文献２）が発掘調査されており、尾根上の平坦地からは対岸の八反原城跡を見下ろすことができたので、中世に山城として利用された可能性があると考えられた。

調査の経過

平成11年度は、10月25日より尾根上平坦地東端部の調査を行った。尾根上は薄く表土が堆積していたのみで、明確な遺構や遺物包含層は検出されなかった。また、分布調査時に確認された平坦地は、調査の結果地滑りによるものと判明した。調査は11月19日に終了した。

平成12年度は、４月18日から調査を行った。初めに調査対象範囲に10か所トレンチを設定して調査を行った。この結果を基に丘陵頂部に近い部分にＩ区を設定し、平成11年度調査区に隣接した尾根上にⅡ区を設定した。全面的な掘削は、５月18日にＩ区から行い、続いてⅡ区の調査を行った。Ｉ区で方形土坑を、Ⅱ区でピットを16基検出した他は遺構・遺物とも検出されなかった。６月７日から平板による地形測量を行い、最終的に調査が終了したのは６月14日である。



第37図　立女遺跡　調査区配置図（Ｓ＝１/2000）

第２節　調査の結果

１．平成12年度Ⅰ区（第38図、写真図版17・18）

Ⅰ区は丘陵北側斜面の標高約81～89mの部分に設定した。調査前の地表観察では、斜面は尾根から標高約84mまでは急角度に傾斜しているが、81～83mの位置に傾斜の緩い平坦地が確認できた。平坦地を中心にトレンチ調査を行ったところ、斜面の傾斜変換点で炭のかたまりを検出した。炭の下には炭と焼土を多く含んだ土が堆積し、さらにその下で土坑状の落ち込みを検出した。このため平坦地とその斜面上方をⅠ区として全面発掘したが、検出した遺構は段状遺構１か所、方形の土坑１基のみである。近代以前の遺物はしなかった。

段状遺構（第38図、写真図版18）

Ⅰ区の東側、標高約87mの位置で検出した。平坦部の規模は、長さ約６m、幅約70cmである。遺物は出土していない。遺構の詳しい時期や性格は不明である。

土坑（第38図、写真図版18）

Ⅰ区の北側の平坦地で検出した。表土下の堆積土から堀り込まれ、土坑上面には炭と焼土が最大で深さ約60cm堆積していた。堆積土内で土坑プランを検出することが困難だったため、地山まで掘り下げた後プランを検出した。床面は細長い方形で、規模は2.1×0.6m、床面の東西両端には幅30cm前後の範囲に粘質土が堆積していた。焼土の上面から床面までの深さは約1.9mで、壁面は急角度に掘り込まれていた。遺物は出土していない。遺構の詳しい時期や性格は不明である。

３．平成12年度Ⅱ区（第38・39図、写真図版18）

Ⅱ区はⅠ区から約11m北西の丘陵尾根上に設定した。Ⅱ区の標高は約88～89mで、立木の伐採後は下府川対岸の八反原城跡や上条遺跡を眼下に望むことができ、かなり遠方まで見通しがきいた。丘陵尾根上は、表土下に茶褐色土が20～30cm程度薄く堆積しているだけで、遺物包含層や旧表土は認められなかった。当初尾根筋にあわせて調査区を設定したが、南西部でピットを検出したのでこの部分を北側に拡張した。拡張部分では約３×２mの規模の窪みとピット９基を検出した。窪み肩は明確でなく、遺物も出土していない。遺構の時期や性格は不明である。

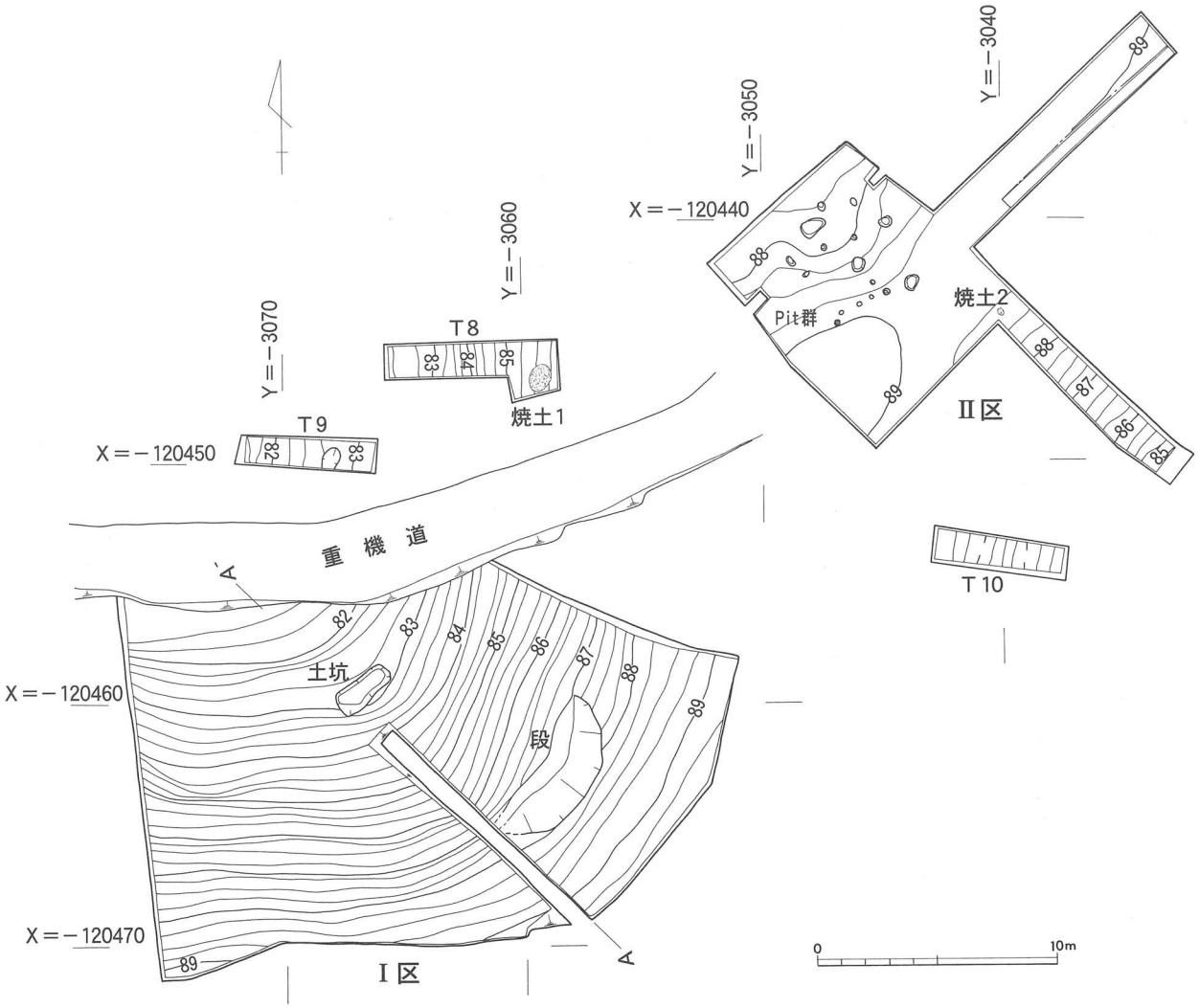
第３節　調査の結果

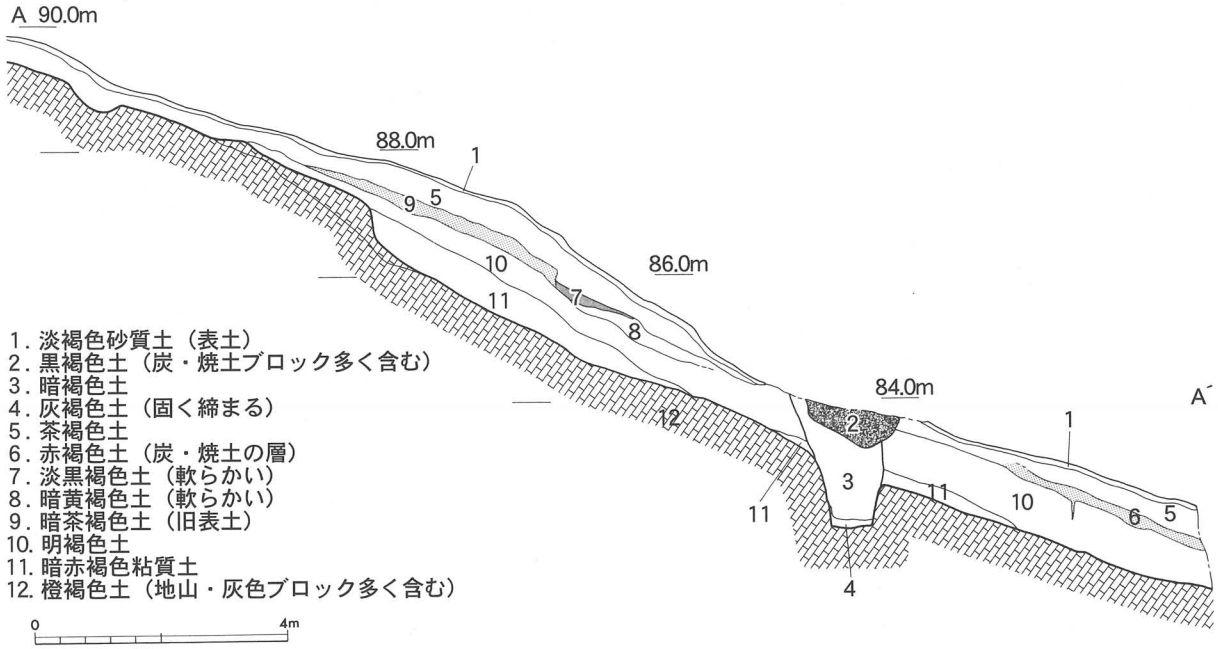
立女遺跡は調査前に尾根上で幅10～15mの平坦地が確認でき、戦国時代の山城である八反原城跡を見下ろす位置にあることから山城跡の可能性が指摘されていた。また、上条遺跡で石匙・銅鐸・白磁碗が出土し、古道を検出しているので、これらの時期の遺構・遺物が検出されることも予想された。しかし、調査の結果は時期不明の段状遺構１か所、土坑１基、ピット16基を検出しただけで、近代以前の遺物も出土しなかった。上条遺跡も遺構・遺物とも非常に希薄だったので、立女遺跡周辺は、各時代において下府川流域の集落の中心から大きくはずれていると考えられる。

参考文献

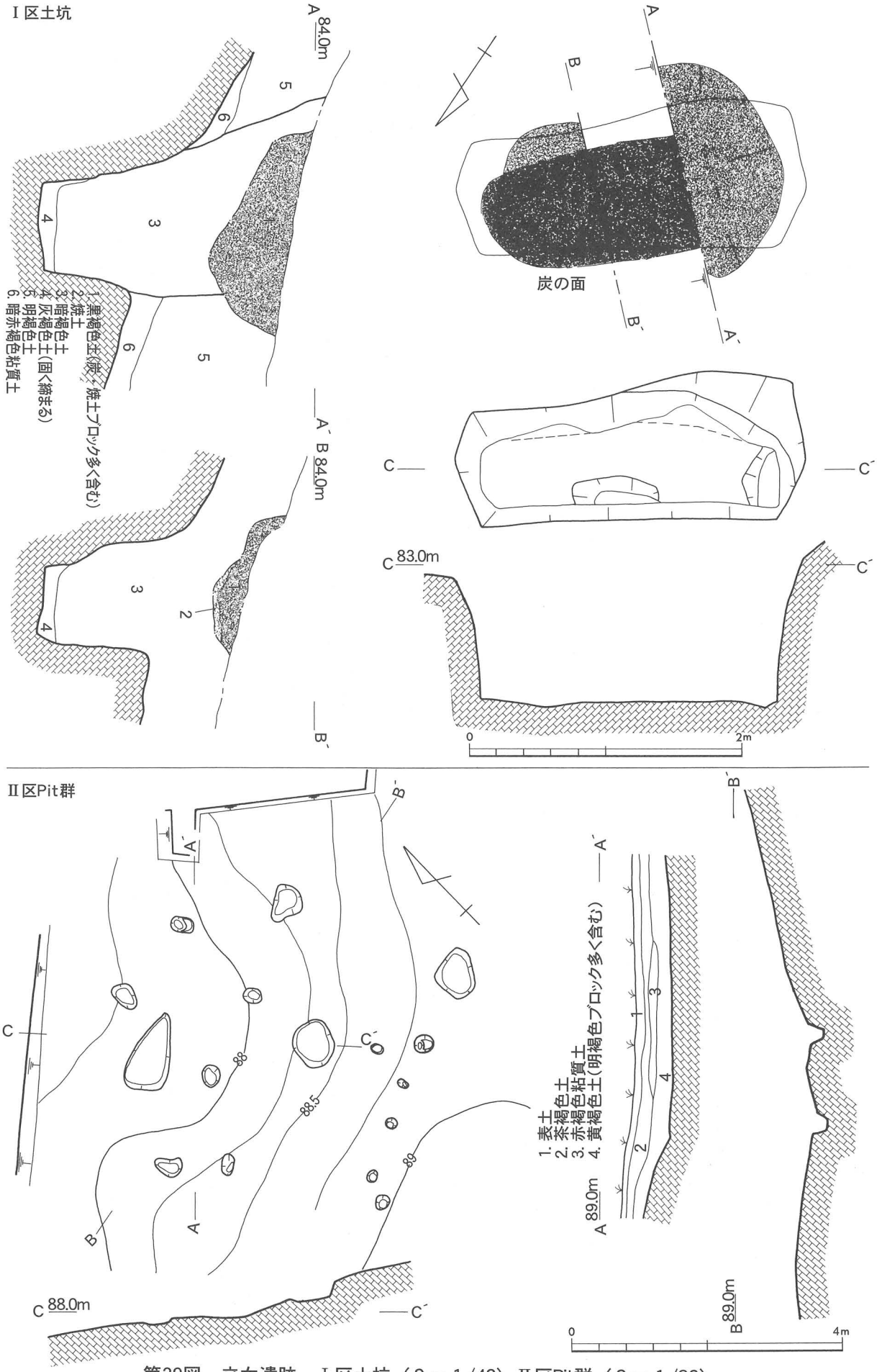
文献１　島根県教育委員会　1997『石見の城館』

文献２　浜田市教育委員会　1995『古市遺跡遺跡発掘調査概報』





第38図　立女遺跡　遺構配置図（S＝1/300）・Ⅰ区土層図（S＝1/120）



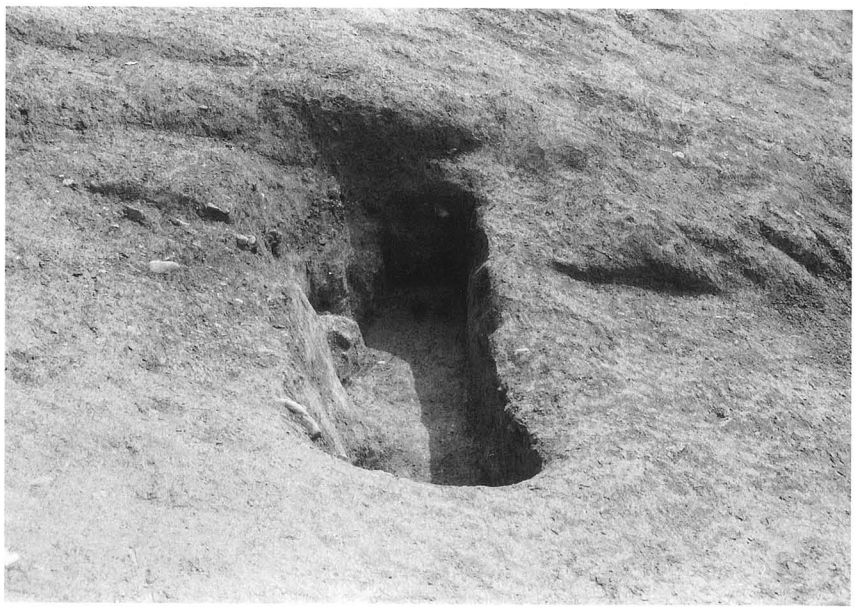
第39図　立女遺跡　Ⅰ区土抗（S＝1/40）Ⅱ区Pit群（S＝1/80）

平成11年度
調査前遠景
（北東から）

Ⅰ区調査前
（東から）

Ⅰ区調査後
（東から）

Ⅰ区堆積土層
（東から）



Ⅰ区土杭
完掘後
（北東から）

Ⅱ区Pit後
（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	エライセキ　ドウドウスミガマアト　カミジョウイセキ　ミトジンジャアト　タチメイセキ
書名	恵良遺跡　堂々炭窯跡　上条遺跡　水戸（三戸）神社跡　立女遺跡
	一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
巻次	
シリーズ名	一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	Ⅳ
編著者名	寺尾　令　大庭俊次　間野大丞　増田浩太　東森　晋（編成順）
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒699-0131　島根県松江市打出町33番地　TEL 0852-36-8608
発行年月日	西暦2001年３月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
エフ 恵　良	シマネケン 島根県 ゴウツシ 江津市 ニノミヤチョウ 二宮町	32207		34°58′12″	132°11′41″	19960902 ～ 19961218	1900	道路建設
ドウドウスミカマアト 堂々炭窯跡	シマネケン 島根県 ゴウツシ 江津市 ハシチョウ 波子町	32207		34°57′13″	132°5′6″	19990621 ～ 19990729	250	道路建設
カミジョウ 上　条	シマネケン 島根県 ハマダシ 浜田市 カミコウチョウ 上府町	32202	L22	34°54′58″	132°8′20″	19981203 ～0114 19990426 ～0701	1100	道路建設
ミト 水戸（三戸） ジンジャアト 神社跡	シマネケン 島根県 ハマダシ 浜田市 カミコウチョウ 上府町	32202		34°54′55″	132°8′10″	19990807 ～0907 19991125 ～1210	350	道路建設
タチメ 立　女	シマネケン 島根県 ハマダシ 浜田市 カミコウチョウ 上府町	32202		34°54′51″	132°7′59″	19991025 ～1119 20000418 ～0614	1000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵　良	集落跡	奈良時代 平安時代	加工段　2 掘立柱建物跡 ３以上	土師器、須恵器 中世土師器 越州窯系青磁 白磁	
堂々炭窯跡	生産	近世末～近代	炭窯跡		
上　条	祭祀	弥生、中世	銅鐸埋納孔 ピット群	石匙、須恵器、 白磁	大正13・14年に計２個の銅鐸出土（東京国立博物館蔵）
水戸（三戸） 神社跡	祭祀	近代	古道、段状遺構、 溝		
立　女			段状遺構１、土孔 １、ピット16		

恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡
水戸(三戸)神社跡(上条古墳)・立女遺跡

一般国道９号線江津道路建設予定
地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

発行　2001年３月

編集　**島根県教育庁埋蔵文化財調査センター**
島根県松江市打出町33番地

印刷　柏村印刷株式会社